
第七独立機動艦隊～神出鬼没!!米海軍の悲劇～

0 0 7

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第七独立機動艦隊〜神出鬼没！！米海軍の悲劇〜

【Nコード】

N3128F

【作者名】

007

【あらすじ】

山本五十六が近衛文麿、豊田副武と共に完成させた独立機動艦隊。日本の科学力の総力を結集して完成させた艦隊は米海軍にデーモン艦隊と恐れられる。核兵器をも恐れぬその艦隊はまさに無敵艦隊。世界はとてつもない化け物に喧嘩を売ってしまった。

プロローグ（前書き）

ビックリするほど日本に有利ですがご了承ください。

プロローグ

昭和17年11月8日。この日極秘の艦隊が呉軍港を出港した。

「ついにこの日がきましたね長官。」

「そうだな宇垣君。」

出港していく極秘艦隊を見送りながら山本五十六連合艦隊司令長官が宇垣参謀長に答えている。

「宇垣君。」

「はい。なんでしょう。」黄金仮面と言われるように表情一つ変えずに答えた。

「彼らはこれから姿を現さず敵はおるか味方にも姿を知られてはいけない。悲しい事だな。」

「仕方ありませんよ長官。彼らはそれを承知でこの艦隊に志願したんですから。」

「うむ。そうだな。」

さてこの二人の話を聞いていると何が何だかわからないので読者の皆様は何じゃこりゃ？と思います。が今一つお待ち頂きたい。

「長官。そろそろお時間です。」

「そうか。早く戻らないといけないな。何せ今私が見送った艦隊は海軍には存在するはずのない艦隊だからな。」

そう言くと2人は現連合艦隊旗艦『長門』へと戻っていった。

「宇垣君。」

「はい。」

「確か今日はあいつがくるんだな。」

「はい。そうですね、そろそろ御見えになるはずですが……。」
コンコン。

「噂をすればなんとやらだな。」

山本が笑いながら言った。

「そうですね。」

おおつ宇垣参謀長が笑ったぞ！

4ヶ月と23日ぶりだ。

「豊田副武海相。お連れしました。」

「うむ。入ってくれ。」

………うん？

豊田が海相？どうゆう事だこれは？

まあ続きをお読み下さい。

「長官、参謀長。お久し振ります。」

「久し振りだな。豊田。」山本が答える。

「確か今日はあの艦隊の出港日だったと思いますが？」

「そうだ。あの艦隊は目覚めた。これからあの艦隊は神出鬼没だ。」

「そうですね。彼らが少しかわいそうですね。」

豊田が答える。

「まあ、仕方ない。そんな事を言えば何の為に近衛首相に頑張ってもらったか解らないよ。」

豊田が海相であり近衛まで総理とは。

読者の皆様は何が何だかだと思えますが今一つお待ち頂きたい。

「そうですね。思えばあの時から我々は戦っていましたね。」

「そうだな。あの時からだな」

そう言う山本と豊田は、あの時へと思いをよせていた。

プロローグ（後書き）

この度はこのような小説をお読みくださりましてありがとうございます。
プロローグをお読み頂きましても何が何だかわからないと思いますので次回からあの艦隊の創設についての説明をさせていただきます。
あとこの世界の状況についても

第1話 第七独立機動艦隊創設秘話前編（前書き）

第七独立機動艦隊創設についてと日本の政治状況について書きました。

第1話 第七独立機動艦隊創設秘話前編

あの時。

山本、豊田の2人が思いを寄せている時。

あの時。それは昭和11年2月26日に起こった2・26事件がある時である。皇道派青年将校が起こした陸軍最大の汚点である。

この事件はなんと天皇陛下自ら陸軍ではなく海軍を率いて反乱軍鎮圧をされたのである。

この事件をきっかけに天皇陛下下の陸軍に対する信用は地に落ち海軍に対する信用は急激に上がった。

これにより岡田内閣総辞職の事態にたいし天皇陛下自ら近衛文麿公爵にたいして内閣組閣の大命を下したのである。

大命を受けた近衛は早速内閣の組閣を開始する。

近衛は最初、山本五十六を海相にしようと考えたが山本が拒否し代わりに豊田副武を海相にと山本が推薦した為に近衛は豊田を海相においた。その代わり山本は連合艦隊司令長官になる事を承諾した。

そして問題の陸相だが陸相には栗林忠道が就任した栗林は陸軍のみに有りながら海軍の実力を評価し、次期大戦では海軍あつての陸軍だ。と就任演説で言ったほどの海軍派でありこれ以上の人選はないという事になったこれにより昭和11年3月1日第一次近衛内閣が成立したのである。

その後近衛は軍の近代化を宣言ドクター・ヤギこと八木博士の研究チームに豊富な予算と人員を与え八木アンテナの性能向上及び増産性能の向上を指示した。

これにより八木アンテナは格段に性能が向上し海軍の全艦船の標準装備となり対空・水上・射撃レーダーは世界最高の性能を持つており米、英共に技術提供を呼び掛けている。

これにたいし近衛はワンランク下の俗に言うモンキーバージョンの輸出を許可し代わりに大量生産技術の提供を米に、英には五億円の資本金を要求。

両国ともそれをすぐさま受け入れ米は、ボーイング・GM・フォード・グラマン等の大量生産技術を持つ企業に対し技術提供を大統領令で発表し日本の増産技術はますます向上した。

英も五億円を支払い技術を受け継いだ。この五億円がああ艦隊創設に使われたのは賢明なる読者のかたならすぐ解ったはずです。

そう、英の五億円無くしてああ艦隊はなかった。

昭和11年6月13日料亭『赤松』にて近衛首相・豊田海相・山本長官三人による極秘会談が行われた。

「首相。流石は首相です。ワンランクしたのレーダーを輸出してそれ以上の価値のある支援を引き出したんですから。流石ですよ。」

豊田が近衛を讃えている。

「いやいや豊田君。そこまで言わないでくれ。あれは私の考えじゃないんだよ。山本君の考えなんだよ。」

「……そうだったんですか！？私はてっきり首相が考えた事だっただけで思っていたんですが。」

「そうだよ。私は何も考えていないよ。全て山本君の考えだ。なあ山本君。」

山本が照れ笑いをしながら頭をかいている。

「まあそうゆう事だ豊田。お前は俺が駐米武官としてアメリカにいたことは知っているな？」

「はい。確かその時にベガスのカジノで大儲けしたと言う話を聞いています。」 またしても山本が照れる。

「おいおい。昔の事だ。」 山本はそうゆうがこのベガスの話は本当でありこの時の山本は日本の国家予算の3分の1を稼いだのであるから驚きだ。

現在その金は英の支援金と一緒に保管している。

もちろんその金があゝの艦隊に使われたのはいうまでもない。「ベガスの事はもとより俺はその時ベルトコンベアーで大量に作られる車を見た。これを見て俺はこのままじゃ戦争になった時にベルトコンベアーを流れながらつくられる飛行機や戦車を想像してみた。そして思った、このままでは駄目だとな。」

「それで長官はワンランク下のレーダーを輸出してその米の大量生産技術を貰おうと思った……。」

「そうだ。そして俺はあることを思い付いた。」

「長官。何ですかそれは！」

「うむ。総理には話したがお前にはまだ言ってなかったな。俺は極秘艦隊を創ろうと思ったんだ。」

「極秘……艦隊ですか？」

「そうだ。俺がベガスで稼いだ金と英からもらった五億円で独立機動艦隊と言うのを創設しようと思う」

「独立機動艦隊！？」

「そうだ。独立機動艦隊だ改大和級三隻と改信濃級三隻と防空重巡洋艦五隻と駆逐艦五隻と潜水艦三隻と輸送艦三十隻の艦隊だ。」

「長官！！無理ですよ！！そんな艦隊を造ったら我が国は破産してしまいます！！。」 「豊田よお。」

「はい。」

「国家というのは国力にあった軍隊を保有するものなんだよ。」

「とゆう事は長官は我が国がそんな艦隊を保有出来るとお考えなん

ですか？」

「そうだ。できる。現にもう旅順で艦隊は建造中だ」豊田は口を開けたまま呆然とした顔で近衛・山本を見つめていた。

第1話 第七独立機動艦隊創設秘話前編（後書き）

次回遂に第七独立機動艦隊の全貌が！？
想お待ちしています。

ご意見ご感

第2話 第七独立機動艦隊創設秘話後編（前書き）

1日に3話投稿……。
み下さい

頑張りました。

どうぞお楽し

第2話 第七独立機動艦隊創設秘話後編

昭和11年6月13日の極秘会談から1週間たった6月20日近衛首相・豊田海相・山本長官の3人は旅順にいた。

「首相・長官！！すごいです！！旅順でこんな艦隊が造られていたなんて。」

豊田は初めて遊園地にきた子供のようにはしゃいでいる。

「まあ、豊田君がはしゃぐのは無理もない。なあ山本君。」近衛が言った。

「そうですね。首相、わたしも未だに信じられませんよ。言いだした本人がそうなんですから1週間しか経っていない豊田は仕方ありませんね。」

今3人がいるのはちょうど旅順港のドックを見渡せる所にいる。そこには大艦隊が建造されていた。

「豊田君。技術者の説明を聞きに行こう。」

「はい！！」

こうして3人は技術者の説明を聞きに造船本部へ向かった。

「牧野君説明してくれ。」山本が言つと牧野と言つ男が説明を始めた。

「それでは皆様お集まりのようですので説明を始めさせていただきます。あつ私は牧野茂と言います。造船中佐です。よろしく願います。」

と牧野が言つ

「それでは皆様お手元の資料をご覧ください。」

牧野が説明を始める。

「まず皆様には独立機動艦隊の主力となる改大和級と改信濃級の説明を始めさせてもらいます。」

「牧野君ちよつといいかな？」

豊田が質問する。

「改大和級や改信濃級とあるが信濃級や大和級もないのになぜ改大和級や改信濃級を建造するんだ？」

豊田聞いた。それもそうだろう。この世界では大和級や信濃は建造されていないのだ。計画書はあるが近衛や山本により建造されなかったのだ。

「ああその事なら私が答えよう。」

山本が説明を始めた。

「大和級や信濃は造っても金の無駄という事に結論がいたったんだよ。」

「金の無駄使いつて事ですか？」

「そうだ無駄の説明をしていると時間がなくなるから割愛するが改大和級や改信濃級を造る方が何層倍も有効だという結論になったんだよ。」

「何も割愛しなくても時間ならたつぷりあるんですからいいじゃないですか。」

「いや、それが作者が書くのがめんどくさいらしくて私にお前を説得してくれといわれたから勘弁してくれ。」

「そうですか。作者がいうなら仕方ないですね。」

「ああ、牧野君。すまなかった。説明を再開してくれないか。」

「はいわかりました。説明を再開します。まず改大和級について説明します。」

牧野が説明を再開した。

「改大和級は大和の発展拡大版です。全長330メートル・最大幅46メートル・満載排水量123000トン・速力33ノット・主

砲51センチ3連装3基9門・副砲25センチ3連装2基6門・高角砲15センチ連装24基48門・噴進砲15センチ30連装6基・対空機関砲5センチ3連装60基180門・乗員数3100名です。これを三隻建造します。」

「すごい。首相、長官！我が国はこのような艦を建造する事が出来るんですね」

「まだ驚くのは早いぞ豊田君まだ改信濃級の説明を受けてからだ。」

「それでは改信濃級の説明をさせて頂きます。改信濃級は信濃級の発展拡大版です。全長310メートル・最大幅60メートル・最大排水量11800トン・速力33ノット・高角砲15センチ2連装40基80門・噴進砲15センチ30連装8基・対空機関砲5センチ3連装80基240門・搭載機数130機です」

「すごい。これなら勝てますよ！首相・長官。」

「防空重巡洋艦は最上級を改装しています駆逐艦は雪風級というのを新造しています。」

「うむ。牧野君ありがとう。この艦隊が完成すればどうなるか想像出来るだろう。」

山本がそうつぶやいた。

豊田は想像してみた、51センチ砲を装備した改大和級が出撃すれば敵艦がどうなるか想像できた。

「この艦隊が早く完成してほしいな。」

近衛がそうつぶやくと山本と豊田は頷いた。

第七独立機動艦隊に配備される予定の全艦艇が完成するのは昭和17年の正月辺りだと牧野がいった。

第七独立機動艦隊が産声を挙げるのはまだまだになりそうだ……。

第2話 第七独立機動艦隊創設秘話後編（後書き）

改信濃級が戦艦か空母か悩んだ人がいたと思いますが空母でした。

ご意見ご感想お待ちしております

ます。

第七独立機動艦隊編成表（前書き）

遂に第七独立機動艦隊完成！！

第七独立機動艦隊編成表

第七独立機動艦隊

司令長官↳小沢治三郎中将参謀長↳草鹿龍之介少将

総旗艦・戦艦大和

戦艦武蔵

戦艦信濃

機動群旗艦・空母大和改

空母武蔵改

空母信濃改

防空重巡洋艦最上

防空重巡洋艦鳥海

防空重巡洋艦青葉

防空重巡洋艦松島

防空重巡洋艦高雄

駆逐艦雪風

駆逐艦谷風

駆逐艦初風

駆逐艦海風

駆逐艦山風

潜水艦伊一 一号

潜水艦伊一 二号

潜水艦伊一 三号

輸送艦三十隻

全艦が33ノットを出す事が出来る。

潜水艦は新開発のポンプ式噴流エンジンを採用した為にこのような
速力がでる。輸送艦は対空噴進砲を装備している為にただの輸送艦
だと思つて手を出すと酷い目にあう。

全艦、今の日本で開発出来る最新最強の物を装備している。

空母搭載機

艦上戦闘機・陣風

艦上攻撃機・流星

艦上偵察機・彩雲

各空母の搭載機数

艦上戦闘機50機

艦上攻撃機40機

艦上偵察機40機

となっている。

簡単に三機種の説明をする艦上戦闘機陣風

最大速度735キロ

実用上昇限度14500メートル

武装30ミリ機関砲2門

13ミリ機銃2門

航続距離7300キロ艦上攻撃機流星

最大速度610キロ

実用上昇限度9500メートル

武装12ミリ機銃2門

爆装800キロ爆弾

雷装800キロ長魚雷

航続距離7000キロ

艦上偵察機彩雲

最大速度850キロ

実用上昇限度1900メートル

航続距離8800キロこれらの機体は現在の日本の最高傑作機である。

しかし今現在これらの機体の改良型を開発中である。

第七独立機動艦隊編成表（後書き）

いやゝ1日4話はきついですね……。

皆様に相談なんですが最近

このような架空戦記小説は艦魂が流行っていますが、この小説はどうしたらいいか悩んでいます。 この状況を打破するため皆

様の意見を聞きたいのでご協力いただければ幸いです。よろしくお願ひします。

第3話 第七独立機動艦隊柱島集結（前書き）

艦魂が出るか、出ないか。本文をお読みください。

第3話 第七独立機動艦隊柱島集結

昭和17年1月11日大日本帝國呉軍港。

今日は遂に完成した、第七独立機動艦隊全艦が柱島に集結するとい
う事で海軍関係者が勢揃いしている。

主要な人物を説明すると、内閣総理大臣近衛文麿

海軍大臣豊田副武

GF司令長官山本五十六

海軍造船中佐牧野茂

GF参謀長宇垣纏

そして第七独立機動艦隊司令長官に就任した

小沢治三郎中将

同じく同艦隊参謀長に就任した

草鹿龍之介少将

海軍の中枢ここにあり。といったところだ。

「おい小沢。この艦隊を頼んだぞ。」

山本が小沢に激を飛ばす。

「お任せ下さい。マレーの南遣艦隊よりも強力な艦隊を指揮出来る
のでとても嬉しいです。」

うーん。鬼瓦の呼び名を持つ小沢が笑っていると何だかおかしい気
分になるな。やっぱり小沢は笑わないほうがいいかもしれない。

話は脱線するが作者も友達に笑わないほうが威厳がある、と言われ
たので最近友達の前で笑った事がない。何の話だったわけ？

そうそう艦隊の話だった。

「そうだ小沢。この艦隊は今の帝國の総力を注いで完成させた物だ。
だがこの艦隊は海軍から独立した艦隊だ。全ての作戦はお前に一任
するから頼んだぞ。」

「長官。もちろん分かっています。この艦隊は神出鬼没を信条とす
る艦隊であり味方にも秘匿するのも知っています。私はこの艦隊を

使つて必ずや米太平洋艦隊を壊滅させてみせます。」小沢が急に真面目な顔になり真面目な事を言つたため全員我慢出来ず吹き出してしまった。

これには流石の小沢も照れてしまい顔を真っ赤にしている。それがまた面白いから全員が爆笑に包まれた。

さて呉軍港で山本達が笑っている時第七独立機動艦隊は怒号で溢れていた。なぜかと言うと艦長がどうせ一回きりの航海だからもう二度とこないだろうと言い張り全くやる気がない。

まあ確かにもう二度とこない事は確かだがだからといってやる気がないのは困りものだ。艦長はいいが彼女達はこれが処女航海なんだからもう少しやる気をだしてほしい。

事実怒号を言っているのは人間ではなく彼女達であつた。「あのヘボ艦長め！！殺してやる。」

「まあまあ落ち着いて。姉さん。一回きりの航海だからしかたないよ。」

「そんなに怒らないの。」さてここで説明すると。

艦長に怒りをぶつけているのが戦艦大和の艦魂。艦魂達の間では『早紀』と呼ばれている。

その早紀をなだめているのが戦艦信濃の艦魂『喜恵』そして最後になだめているのが戦艦武蔵の艦魂『亜由美』である。

「くそっ！あの野郎っ！！」

「はいはい。姉さんそこまで、亜由美姉さんが呆れてるわよ。」

「でも、喜恵。あんなヘボ野郎が私達に乗ってるじたい犯罪よ。」

「ふん。何が犯罪よ。馬鹿らしい。」「亜由美！！ケンカ売ってる

の？いい度胸じゃない。」

「姉とケンカしている時間などない。」

「まあまあ二人共落ち着いて。今は柱島に着く事を第一に考えましようよ。」

「…………。たしかに喜恵の言うとおりね。まずは柱島ね。亜由美。

この勝負預けたわよ。」

「ふんっ！いつでもどうぞ。お待ちしています。」

その後早紀が亜由美に殴りかかった為に喜恵が慌てて仲裁に入った。

さて、遂に柱島に集結した第七独立機動艦隊。
彼女達はまだ誕生したばかりだ…………。

第3話 第七独立機動艦隊柱島集結（後書き）

早紀「やっと登場出来たわね。」

作者「あつ早

紀様。ご苦労様です。」

早紀「何がご苦労様よ。亜

由美、喜恵こいつを捕まえなさい。」

二人「はいは

い。」

作者「おいつ。二人共なにをするんだよ!」

早紀「フッフ。」

作者「早紀様!なぜ鞭なんか持つてるん

ですか!」早紀「楽しみましょうよ」作者「いやだあゝ」。

亜由美「あらら作者さん、かわいそうに……。」

世界情勢解説（前書き）

この世界の情勢を書きました。

やはり一話の

量が少ないですがご覧ください。

あつ私事ですが先ほど総ア

クセス数が1000人を越えました。

私のような小

説を読んでいたいてありがとうございます。

007。これからも頑張っていきます。

世界情勢解説

昭和11年6月23日。 山本・近衛・豊田の3人が旅順視察を終え帰国してきた。

この辺りの世界・日本の情勢をいうと。

7月5日に陸軍の東条英機が陸軍軍備増強を訴え首相官邸に大隊を率いて押し入るといふ事件が発生。

この事態にたいし山本は自ら陸戦隊を率いて東条大隊を鎮圧する事に成功。

東条は逮捕されたが数日後に自決しその他の関係者も自決した。

今回の事件の責任を取り陸相を辞任すると表明した栗林だが近衛の説得により辞任を撤回。

7月20日に第二次近衛内閣が成立した。

その後8月1日のベルリン五輪が無事に終わり11月7日には国会議事堂落成式が行われた。

その後日独防共協定が日本に流出したドイツ語の『わが闘争』により白紙になり日独同盟も白紙になった。その後昭和12年7月7日日中戦争が始まった。 北京、南京など中国東部を占領した日本

は昭和13年2月10日蒋介石と講和条約を結び、蒋介石の国民党を中国の代表として認めた。

この世界の陸軍は世界列強に劣らない戦車を保有している。

その主たる物が五式重戦車である。主砲に100mm砲を装備し、最大装甲厚145mmもある立派な戦車を保有していた。

米からの大量生産技術を提供してもらったおかげですでに生産数は千台を越えている。

数々の技術のおかげで史実とは比べものにならないくらい早く終わった日中戦争であった。

その後世界はつかの間の平和を享受していたが、昭和14年7月26日米国が日米通商航海条約の破棄を宣言し、8月23日にドイツ

とソ連が不可侵条約を結んだ事により世界は再び暗雲立ち込みはじめた。

そして9月1日ドイツ及びソ連が東西からポーランドに浸攻。翌日、英・仏が宣戦布告した為に第二次世界大戦が勃発した。

その後ドイツはフランスへソ連はフィンランドとそれぞれ侵攻し両国を占領。

次にドイツはイギリス占領を目指すがバトル・オブ・ブリテンで敗北し矛先をソ連へと向けた。

これに対してソ連は日本と不可侵条約を結び対独戦への準備を始めた。

そして昭和16年6月22日ドイツがソ連に侵攻。

欧州戦線は泥沼化していった。

一方で日本というと昭和16年8月1日に米が対日石油輸出の禁止を発表。

日本政府は動揺した。何せ史実と違い何も悪い事はしていないのだから何が原因か解らない。

事態を重くみた近衛は自ら渡米しルーズベルトと会談したが何も聞けないままむなしく帰国した。

実はこの時の米国は昨年起きたドイツ飛行船『ヒンデンブルク』号の墜落事故がテロだったとして対独宣戦布告をおこなったところであつたのだ。

そして11月30日米は『ハル・ノート』を提示、日本は12月1日御前会議で対米・英開戦を決意。12月8日米英に宣戦布告太平洋戦争が始まった。

この世界ではハワイ真珠湾空襲は行われず南雲艦隊は南方地帯支援に回っている。

そして昭和17年11月までには南方地帯全域に日章旗がはためいていた。

世界情勢解説（後書き）

早紀「ねえ。作者君」 作者「はい。なんでしょうが早紀様。」

早紀「今回は私達の訓練航海の話じゃなかったの？」

作者「うっ！そんな事言っても昭和11年6月20日から昭和17年1月11日にいきなり話がとんだら訳が解らないじゃないか！！だから書いたんじゃないか」早紀「誰に向かってそんな言い方してるのかしら」 作者「早紀様。目が笑ってないですよ。目が。」

早紀「フッフ。作者君もう一度ゆっくり調教してあげる。遠慮しなくていいよ」 そう言くと作者の襟を掴み個室へ連れていく。

作者「いやだぁぁ。助けてえ。」

第4話 帝國の思い・合衆国の陰謀（前書き）

ご覧ください。

第4話 帝國の思い・合衆国の陰謀

さて第3話に世界情勢説明を入れさせていただきました所。

読者の方から無理やり感があるとのこと指摘を頂きましたので、またしても解説を入れさせて頂きたいと思います。

戦闘などを期待されてる方には申し訳ありませんがお付き合いください。

さて我らが第七独立機動艦隊が無事に柱島に集結。今回の話は山本達が第七独立機動艦隊総旗艦大和に乗り込んだ所から始まる。

「何という大きさだ。まさに海に浮かぶ要塞だな。」山本が感激の声をあげている。

確かに山本の言うとうりだ、改大和級が三隻も浮かんでいるのだその奥には改信濃級が三隻。

海軍の秘宝ここにありだ。

「しかし長官のアイデアは凄いですよ。あれが空母に装備されてから離発着が容易になりました。」

「何。ただ単に二本有れば便利かな?と思っただけだよ。俺の思いつきを実現した牧野君の方がすごいよ」

「ありがとうございます。長官。」

さて二人が何を話しているかというと改信濃級の話である。

実は改信濃級は世界で初めてアングルド・デッキを装備した空母な

のである。

スチーム・カタパルトも四基装備している。

そして改大和級・改信濃級共に艦首にバルバス・バウとバウ・スラストアーを装備している。

まさに最先端技術のオンパレードだ。

「小沢。これから完熟訓練だが手を抜くなよ。」

山本が言う。

「もちろんです。長官。私はこの艦隊を率いて米太平洋艦隊を叩き潰す事が使命だと思っていますのでこの艦隊に配属されるものに早く慣れてほしいと思います」

うーん。この艦隊に配属される人間に早く慣れてもらわないといけないな。

このぶんだと小沢は完璧になるまで訓練を続けそうだ無理をしなればいいが。

「しかしわからんなあ。」

「近衛首相。何がですか？この艦隊が気に入らないんですか？」

豊田が近衛に答える。

「いやいや。この艦隊はとても気に入ってるよ。私が悩んでるのは米国の態度なんだよ。」

「米国がどうかしたんですか？」

牧野が心配そうに聞く。

「開戦前の我が帝國と米国の關係について考えていたんだよ。」

「続きが気になりますね」

山本が訪ねる。

「我が帝國が米国と戦争になる前に米国が通商航海条約の破棄を伝えてきたのを覚えているか？」

「はい。覚えています。あの知らせには驚きました」
山本が答える。

「そうだろう。だが私は覚悟していた。」

「覚悟といえますと？」

牧野が訪ねる。

「国際連盟の理事国が戦争をしたのだ。それなりの覚悟はあっただろう。」

宇垣が答えた。

「そうだ。宇垣君の言うとうりだ通商航海条約の破棄は仕方ないと思つた。」

近衛は続ける。

「しかし対日石油輸出の禁止までは予想していなかったよ。」

近衛はもう笑うしかないと言って笑っている。

「確かにそうですな。」

山本が真面目に考えているそれを見て全員が考えはじめた。

「米国はそんなに我が帝國と戦争がしたかったんでしかね。」

小沢が言った。

「解らん。昔ならわかるが今となつてはこの第七独立機動艦隊があるんだぞ。まあ米国は知らないと思うがな。」

山本が答える。

「まあいい。私が変な事を言ったからいけなかった。もうやめようじゃないか。始まったものは仕方ない今はどう終わらすかだ。」

近衛がなだめるように言う

「確かにそうですね。もう過ぎた事に悩んではいけませんね。」

牧野が言う。

「そうだ。牧野君の言うとうりだ。それじゃあ小沢。完熟訓練に励めよ。」

「お任せ下さい。」

小沢が答えた。

こうして小沢・草鹿以外はそれぞれ帰路に着いた。

さて山本達の会話を聞いていても米国の考えはわからなかったがそこはそれ、読者の皆様にはわかるようにしますよ。

えっ？どうするかって。そこは米国のトップの会話を聞きに行くんですよ。

「ん？誰か呼んだか？」

「いいえ。大統領。誰も呼んでませんよ。」

「そうか。それならいいがな。しかし読めば読むほど腹立たしい。この報告書は本当なのか？」

「本当です。大統領。フィリピンが南雲の艦隊の奇襲を受け壊滅しマッカーサーも戦死しました。フィリピンはもうすぐ陥落します」「何ということだ。悪夢だ。それよりハワイの再建は進んでいるだろうな？」

「はい。順調です。夏頃にはハワイは再建完了です。そして秋頃には新造艦がハワイに集結します。」

「よし。順調だな。」

さて何がハワイの再建かというところこの世界のハワイは日本軍ではなく天災により壊滅した。

死火山と思われていたダイヤモンドヘッドが噴火したのだ。

ダイヤモンドヘッドの噴火によりハワイ及び太平洋艦隊は壊滅した。

これにより米海軍はエセックス級空母・アイオワ級戦艦・モンタナ級戦艦がいち早く登場する事になった。

この世界ではハワイ真珠湾空襲がなかったから未だに米海軍は大艦

巨砲主義である。

「ところで、ハル。」

「はい。なんでしょう？大統領。」

「マーシャルやキングはドイツはまだしも日本とは戦争はしないで良かったんじゃないっていたが君はどうなんだ？」

「…………。大統領閣下。私もドイツはまだしも日本とはちょっと。」

「そうか……。君もか。」

ルーズベルトは悲しそうにつばやいた。

「確かにそうだな。通商航海条約の破棄と対日石油輸出の禁止の理由は少し無理がありすぎたな。」

「確かにそうですね。日中戦争時に日本軍が慰安婦を現地で調達しただけが理由ですからね。」

「そうだな。しかしもう後戻り出来ない。何が何でもこの戦争に勝つてやる。」

「まあまあ大統領閣下。落ち着いて下さい。お体に障ります。」

「そうだな。それよりハル。ヒンデンブルクの実行犯は始末したか？」

「はい。大統領。FBIにいたという記録も消しました。これで安心です。」

「よし。それでいい。我が国はもう後戻り出来ない。国民には頑張

ってもらわないとな。」

「しかし、『リメンバー・フィリピン』と言いましてもまだ国民の三分の一はまだ戦争を認めていません」

「まあ。いつかわかつてくれるさ。」

日本、アメリカそれぞれの思いが交差する太平洋戦争この戦争という大きな渦に巻き込まれていく人間と艦魂。

なぜ戦うのか？

誰を守るのか？

何を得るのか？

等々さまざまな思いを持って人間と艦魂は戦っていく勝のはどちらだ？

第4話 帝國の思い・合衆国の陰謀（後書き）

作者「ふ」。今回はゆっくり説明出来ますね。何せ今回は早紀様や亜由美様も貴恵様も出ませんからね。今回は鞭でしかれる事も調教される事ありませんから。

良かったよ

った。今回は伊東参謀長及び草薙先生からご指摘がありました。だから全てをひっくり返すための説明とさせていただきました。

艦魂や戦闘などは次回からだと思います。

これからよろしくお願いします。

ご意見ご感想

お待ちしております。

第5話 完熟訓練前編（前書き）

完熟訓練と書きましたから完熟訓練と思いますが詳しくは次回からです。
本当に申し訳ありません。ご了承ください。

第5話 完熟訓練前編

昭和17年1月12日

この日から第七独立機動艦隊は完熟訓練に入った。

山本長官から11月8日に出撃するからそれまでひたすら訓練を続けると言われたので小沢は約10か月に及ぶ訓練計画を立てた。

「草鹿。果たして間に合うだろうか？」

小沢が草鹿に聞いてみた。

「どうですかね。まあ10か月もありますからどうにかなると思いますか。」

「そうだな。10か月もあればなるようにはなるだろう。」

小沢が笑った。

「そうですね。長官も心配し過ぎですよ。」

二人が笑っていると。

「全く長官と参謀長という役職にあるんだからしゃきつとしなさいよ。」

「おおっ！大和じゃないか！どうしたんだ？」

お忘れの方がいるかもしれないので説明させてもらおうと彼女は戦艦大和の艦魂です。（早紀と呼べるのは艦魂同士だけである。作者は

特別に許可された。」

「どうしたじゃないわよ。あんなひよっこ達は厳しく教育してよね。」

「わかってるよ。大和。安心してくれ。今はひよっこでも10か月後には熟練者にしてみせるよ。」

「ふんっ。それならいいけど。頼んだわよ。」

それだけ言うと大和（早紀）は艦橋を出ていった。

「ふう〜。困ったものだ」

「この艦の艦魂ですか？」

草鹿が尋ねる。

「そうだ。あいつはいつもツンツンしている。どうしたものか。」

「そうなんですか。私も艦魂が見えればいいんですが」

「まあそう落ち込むな。いつか君にも見えるよ。」

小沢はそう草鹿に言うと長官室に入ってしまった。

さてここで現在の第七独立機動艦隊の状況を説明すると沖縄へ向けて20ノットで進撃中である。

沖縄に着いたら燃料を補給してから硫黄島に向かえと指示がでた。

なぜ最初から硫黄島に行かないかというと訓練時間を増やす為であ

る。

まあ沖縄に寄っても大して変わらないと思うがまあ1分1秒でも多い方がいいという事だろう。

さてその頃大和の会議室では会議が始まるとしていたが、まだ始まっっていない。

「全く。長官も情けないわね。何がなにかなるよ。しゃきつとなさいよ。」

さっきから愚痴ばかり言っているのは早紀だ。

「はいはい。もう解ったから。」

「同じ事ばかり。」

亜由美と貴恵が早紀に注意している。

「解ったわよ。もう言わないから白い目でみないで」
早紀が素直に謝罪している

「それはそうと他の子達はどうしたの？」

早紀が貴恵に聞く。

「そろそろくるんじゃないかなあ。」

貴恵が腕時計を見ながら答えた。

「ふん。じゃあ遅刻したんだからお仕置きしないかね。特に由美には。」

早紀が興奮している。

「姉さん。ヨダレ垂れてるわよ。」

「へへへ。可愛がつてあげる。」

貴恵の話も聞こえないみたいだ。

「ごめん。遅れちゃって。怒らないでね。」

さて説明しよう。

彼女が空母大和改の艦魂である由香である。

その他の艦魂は

武蔵改、綾夏

信濃改、理華

最上、望

鳥海、愛美

青葉、裕香

松島、志保

高雄、千穂

雪風、由美

谷風、亜紀

初風、美紀

海風、美香

山風、渚

伊一、一、舞

伊一、二、乱

伊一、三、華

である。

「やれやれ。遅れるなら遅れるって連絡してよね。ほうれん草よ。」

亜由美が怒っている。

「ほうれん草？皆知ってる。」

由香が皆に聞いている。

「報告、連絡、相談。これは常識ですよ！でも帝國海軍の艦魂かつ！」

亜由美がぶちギレた。

その頃早紀はと言うと由美を連れて会議室を飛び出していった。

「まあまあ。姉さん。もう遅刻した事はいいから会議にしましょうよ。ね。」

喜恵が亜由美に慰めるように言った。

「そうね。妹にめんじて許してあげるわ。」

「それじゃあ会議を始めましょう。」

喜恵が皆に言い聞かせる。

「うむ。それでは会議を始める。全員席に付け。」

亜由美はそう言うと言いつと席に着いた。

「さて、全員揃ったな。」

「待ってください、まだ由美が帰還していません。」

「くっ。そうだった。……まあ、良いだろう。１人大丈夫だ。」

何が大丈夫かわからないがとにかく会議が始まりそうだ。

「それではまず現在の行動日程について説明を開始する。」

亜由美が説明を始めた。

「本日から我が艦隊は１０か月に及ぶ短期集中型訓練を始める。それに關してお前達には各艦の人員に対してさぼっている奴がいたら制裁を加えてもらいたい」

亜由美が続ける。

「１０か月で完璧に仕上げなければいけないから各員全力を挙げて
かかれっ!!」

「了解っ!!」

「総員解散。」

亜由美の号令により全員自分の艦に戻っていった。

さてその頃早紀達はと言つと……

「フフフ。由美。もっと気持ちよくしてやる。」

「あっ……そこ……いい……もっと……」

……見なかった事にしよう。

第5話 完熟訓練前編（後書き）

あつそれから皆さんにご報告です。

わたくし00

7はこの度極上艦魂会に加入いたしました。

先輩である黒鉄元帥、伊東参謀長、零戦先生、火星明楽先生、二等海士長先生、の足を引っ張らないよう頑張らせていただきます。
これからもよろしく願います。

第6話 完熟訓練後編（前書き）

皆さん。初めての戦闘シーンです。

ご覧ください。

第6話 完熟訓練後編

さてさて昭和17年1月13日。

この日から本格的な訓練が始まった。

硫黄島に未明に到着した我らが第七独立機動艦隊。

小沢の号令と共に訓練が始まった。

「さて。今から訓練が始まるが大丈夫だろうか。」

小沢が心配している。

「大丈夫ですよ。長官。大和の艦魂が言ってたじゃないですか。さぼっている輩がいたら制裁を加えると」

草鹿が言う。

「そうだな。あいつらがどうにかしてくれるだろう」

「そうですよ。今は訓練に集中しましょう。」

さてここで今回の訓練目的を言うと戦艦群と空母群に分かれての訓練となっている。

戦艦群はひたすら射撃訓練に励み、空母群は離着陸の訓練及び編隊飛行の訓練に励む事になっている。

「しかしあれだな。標的はまだか？」

「後5分程で来ると思いますが。」

今回の戦艦群の訓練の為に海軍は実物大の米戦艦のハリボテを作り、駆逐艦に曳航させ、それに向かって射撃をする訳だ。

今回の訓練は昨年末に完成した『二八式射撃レーダー』の評価試験も兼ねている

正式名に外国語が使われているようにこの世界の日本は英語は禁止されていない。

昔、故東条英機が

「適性語は禁止にしろ。」と言ったが、近衛首相が

「敵の言葉も知らずに戦争が出来るか！」

といった為に禁止にはならなかった。

その為海軍では今のところ自由科目になっているが後数年もすれば英語は必修科目になるだろう。

「戦術情報集中室から連絡です。30海里前方に駆逐艦見ゆ。です。」

艦橋に連絡がはいった。

「よし。主砲発射用意。遅れてきた罰だ。盛大に脅かしてやれ」
さて、戦術情報集中室はと言うと現代でいうCICである。

現在大日本帝國海軍の全艦にはこの戦術情報集中室は標準装備となっている。

「やっとこの時が来たわね。」

「おお。大和。楽しみだな。」

「ふんっ！そんな事言わずに早く撃たせなさい。」

「はいはい。怖い怖い。」

小沢が笑いながら言っている。

「主砲発射用意。」

小沢の声が響きわたる。

「主砲発射用意。」

参謀達が復唱していく。

あつ。言い忘れたが大和級全艦には主砲砲弾の全自動装填装置が装備されている。

「主砲発射っ！！！！。」

ドグワアアアアアン！！！！

凄まじい音と共に遂に大和が咆哮した。

「報告します。駆逐艦村雨が曳航していた米戦艦のハリボテに全弾命中しました。結果から言うと米戦艦のハリボテは消滅したそうです。」

「何っ！？消滅しただと？本当か？」

小沢が驚いている。

「はい。木っ端微塵です。ほとんど欠片が残っていないようです。それと駆逐艦村雨の艦長、渡辺中佐から発射するなら連絡してくださいよ、と言っておりました。」

「そうか。流石に私も驚いているから後で私から謝罪しておく。」

小沢が素直な気持ちを伝える。

「大和。お前の主砲の威力は恐ろしいな。」

「私も驚いてるわよ。」

大和（早紀）が自分の主砲の威力に驚いている。

「これから忙しいぞ。」

小沢が全員に言った。

これから11月まで第七独立機動艦隊は24時間戦えますか？と言わんばかりに訓練に励んだ。

これにより11月には恐るべき習熟度になっていた。
さて11月5日。

この日は第七独立機動艦隊にとって記念すべき日になった。

えっ。何が記念日かって？それは読めばわかります。

「さて。今日はこれくらいでいいだろう。」

小沢が言った。

「よし。呉に帰還するぞ」

「やっと終わった。もうクタクタだよ。」

「おい。大和。お前は何もしてないじゃないか。」

小沢が呆れたように言う。

「長官も命令するだけだから何もしてないじゃないですか。」

大和（早紀）が言う。

「まあそうだが。」

小沢が照れている。

「ハハハ。」

艦橋が笑いに包まれた。

「長官。艦首バルバス・バウのソナーが右舷、30海里に潜水艦を捕らえました。いかがしましょう。」

「ほっておけ。この艦隊のどの艦も、魚雷の一発や二発ぐらい命中しても大丈夫だ。ただし、魚雷を射ってきたら反撃だ。」

「了解しました。」

確かに小沢の言う通りだ。この大和級（大和級が設計図だけだったので改大和級が正式な大和級になった。信濃級も同じである。）は防水区画が四百トンまで細分化している。

それだけではなく、外部装甲のすぐ内側にゴムを注入した層を設け爆発時の衝撃を吸収するのだ。

そのまた内側にはスポンジの層を造り、浸水を吸収して水圧から隔壁を防御し浮力を増大させる。

水中弾の対策には喫水線下の装甲の傾斜角を工夫して爆圧を減殺する。

重装甲に対する浮力の問題だが、史実の大和級の煙突上部や甲板面に使った『蜂の巣鋼板』を応用して何層にも平板鋼にサンドイッチすれば半分程度の重量で同じ強度が得られる。

穴の直径を二五ミリにすれば前後を挟む鋼板は二　ミリで十分だという実験結果を得ていた。

そして十分な浮力を得るため『大和』を拡大、発展させて艦幅を十分に取りバルジを設け。

速力が落ちるぶんタービンを増やした結果三三ノットの速力を得ら

れたのだ。

「おうっ！！なんて大きさだ。見てみるよバーク少尉」

「WOW！！オーガン艦長。あの馬鹿でかいのを雷撃しましょう。」

「もちろんだ！日本の対潜哨戒技術は遅れてるからな絶好の力モだ！！」

さてこの間抜けな潜水艦を『シーウルフ』という。

誠にもってかわいそうだ、彼らは日本の対潜哨戒技術が遅れていると言ったが実は日本の方が上であり小沢がほっておいたと聞いたなら彼らは怒り狂っただろう。

「よし、魚雷発射用意。」

「前部発射管一番二番魚雷装填。」

「発射管開け。」

「魚雷準備よし。」

「発射装置異常なし。」

「発射。」

「右舷より魚雷接近。二本です。」

「進路そのまま。前進。」

「了解。」

小沢が迷わず命令した。

ドンッ！

わずかにだが大和が揺れた。

「被害知らせよっ！」

「右舷中央に魚雷二本命中しました。しかし被害らしきものなし。わずかにへこんただけです。」

「よし。流石は大和だ。大和怪我はないか？」

「もちろんよ。ちょっとかゆかったぐらいよ。」

大和（早紀）が笑いながら答える。

めっちゃかわいい！！！！

さてその頃『シーウルフ』は何を思っていたか。

「OH！MY GOD！！魚雷を二本もくらいいながら。モンスターめっ……」

……混乱していた。

「よし。黨砲術長。主砲射撃で沈めてやれ。」

「了解。」

「砲弾には四式弾を使用します。」

「わかった。」

「主砲発射。」

「発射っ！」

ドグワアアアアン！！！！

「うつっ！？…………敵戦艦からの主砲射撃です。」

ドドオオオオオン！！！！

「わわっ！！！」

「なんだ。」

「敵戦艦からの主砲射撃です。ソナー員が鼓膜をやられました。」

「直撃か！？！」

「いいえ。それが――メートル以上はあつたみたいです。」

「艦長っ！！方向舵が効きませんっ！！それに排水ポンプが作動しません。修復不能。」

「直撃でもないのに海中の潜水艦にこれだけのっ！！！！そんなっ……そんな戦艦があつてたまるか……っ！！！！」
ゴグア！！！！

「敵潜。撃沈。」

「あっけないわね。全く」
大和（早紀）が言った。

「そうだな。」

小沢が答えた。

「さて帰るか。」

こうして第七独立機動艦隊の初めての戦闘は終わった

第6話 完熟訓練後編（後書き）

初めての戦闘シーンでしたがどうでしたか？ 余りにも一方的でしたので面白みはなかったと思いますがすいません。

今回は第七独立機動艦隊の出航前の宴会を書こうと思います。

次回は艦魂中心ですので楽しみ。

第7話 出撃前の大宴会（前書き）

艦魂中心に書いてみましたご期待ください。
的に戦闘が始まります。

次回から本格

第7話 出撃前の大宴会

昭和17年11月7日、この日は第七独立機動艦隊の出撃前夜ということで盛大に宴会が開かれていた。

「まあ有賀も飲め。」

小沢が有賀艦長に酒を注いでいる。

「ありがとうございます。閣下。」

有賀が礼を言いながら酒を飲んでいる。

隣では草鹿参謀長と黛砲術長が刺身に手を出している。

「皆、いよいよ明日が出航だ。これまでの訓練に良く耐えてくれた。だから今日は盛大に飲んでくれ。」

小沢が全員に言った。

「長官の言うとうりだ。皆、今日飲まねば何の為に訓練に励んでいたかわからないからな。」

黛が笑いながら言った。

「まあ飲め。」

有賀が黛に酒を注ぎながら言った。

その時小沢はふと思い出した。

（確か大和達も宴会をしているだろうな。あいつらも楽しんでいるだろう。）

小沢はそう思いながら酒を飲んでいた。

その頃大和達はというと。

「ヒヒヒ。由美は可愛いわね。」

酔っていた。

「ちょっと。姉さん、大丈夫？」

喜恵が心配している。

「情けない。それくらいで酔うなんて。」

亜由美がそう言いながら新しく一升瓶を開けていた。よく見ると後ろに一升瓶が数本転がっている。

「しかし、由美は可愛いわね。今からいい事しない？」

早紀が由美の耳元で囁いている。

「あつ……早紀……司令……ダメ……です。」

由美が辛そうに答えている。

この分だと早紀は由美の弱点を熟知している見たいだ。

「そんな事を言う・・・や・・・した事を皆に言うわよ。」

……もう言っちゃってるんですけど。

「ちょっと。姉さん。そんな事したの？」

喜恵が聞く。

「えっ？何の事。」

早紀が聞く。

どうやら早紀は自分が何を言ったか覚えていないようだ。

「何って・・・や・・・した事。」

「あら。そんな事言ったの私。ハハハ」

早紀が笑っている。

「笑っている場合じゃない。艦隊司令ともあろう御方が部下に手を出すなんて。何を考えているの。」

喜恵が怒っている。

「何を考えている。って言われても。まあ美味しくいただきましたよ。」

「なっ！？美味しくいただきました！？もしかして」
喜恵が心配そうに聞く。

「ええそうよ。美味しくいただきました。」

この二人の会話に清純な舞、乱、華が鼻血を出しながら倒れた。

「ちょっと。あなた達大丈夫？」

亜紀、美紀、美香、渚が慌てて助け起こす。

「あの三人には刺激が強すぎたかしら？」

綾夏が言った。

「ちょっと。綾夏。それはどうゆう意味なの。」

喜恵が怒りながら言う。

「そうよ。綾夏。それは言い過ぎよ。」

由香が注意する。

「そうね。ちょっと言い過ぎたわね。謝るわ。」

綾夏が謝る。

「はいはい。そこまで。そんなに怖い顔しないの。笑顔で帰ろおう。」

早紀が右の拳を突き上げた。

だいぶ酔ってるぞこれは、誰か止めないと由美を襲いかねないぞ。

「ちょっと姉さん。大丈夫？」

「うるさああい！おだまりなさい！！」

喜恵が節介心配してくれたのに早紀は何故かご立腹のようだ。

「もう我慢出来ない。由美来なさい！！」

「あつ……」

どうやら早紀は由美を襲いたかったようだ。

由美は早紀に連れられて何処か行ってしまった。

無事に帰ってくるだろうか？

「姉さん。あんまり酷い事しなければいいけど」

喜恵が心配している。

「あの変態、レス、DSの姉に捕まったから大変だろうな。」

亜由美が呆れたように言っている。

その言葉に全員が笑いに包まれた。

「所で喜恵、明日私達は何処にいくの？」

由香が喜恵に質問する。

「さあ、私も知らないわ。亜由美は知ってる？」

喜恵が亜由美に聞いた。

「私が知っている限りではまず明日0500時に呉を出航してまずはフィリピンのマニラに向かうわ。そこで燃料を補給した後シンガポールに寄港する。そこでまた燃料を補給した後、マレー沖海戦で大破したP・Oウェールズとレパルスが逃げたセイロン島に殴り込みをかけるのよ。」

さてここで説明するとこの世界では南雲艦隊が南方地帯に派遣された事は先に書いた。

そのお陰で南方地帯は昭和17年8月には完全に日本が占領していた。

中国東部が日本の友邦である中国国民党の制圧下にあり今現在中国国民党と日本陸軍が共同で西部進攻を行っており来年春には中国全土を占領する事が出来るだろう。

そして今回の第七独立機動艦隊の初陣がセイロン島制圧及び英東洋艦隊壊滅作戦が立案された。

「そうなんだ。なんかめんどくさそうな作戦ね。」

綾夏が言った。

「そんな事言わないの。綾夏。英東洋艦隊を叩き潰すんだから。」

「まあそうね。でも最初の戦う相手が英国とはね。」
由香が言った。

「そうね。英国は日本海軍の師匠じゃない。最初の相手が日本海軍の師匠とは」
喜恵が言った。

「まあそう言っても仕方ない。敵が誰であれ、叩き潰すのみ。」

亜由美が迷わず言った。

「まあ。明日から頑張りましょう。」

亜由美がそう言って宴会の終了を宣言し、他の艦魂は自分の艦へ戻っていった。

その頃早紀と由美はというと……

ピシッ！

「あっん！！……もっ」と

「由美は可愛いわね。けどその可愛さが私のSを目覚めさせるのよ。」

今の状況を説明すると由美は両腕を天井からの紐でつるされており、それを早紀が鞭で叩いているのだ。

……早紀はドSに目覚め、由美はドMに目覚めた。
ちなみに作者は超がつくドMだ。

特に女の人にやられるのが大好きだ。

……一部話からそれたが遂に明日第七独立機動艦隊が出航する。

彼女達の活躍やいかに！？

第7話 出撃前の大宴会（後書き）

いかがでしたでしょうか？艦魂を盛大に出させていただきました。

次回から本格的に戦闘シー

ンが始まりますのでご期待ください。

話は変わりますが本日10

月25日は初めて神風特別攻撃隊が出撃した日です。祖国を守る為に自分の命をかけた青年達の冥福を祈り、この小説を読んだ後に黙祷をしていただければ幸いです。

ご協力ください。

第8話 セイロン島へ向けて（前書き）

人物紹介

《大和》

大和型戦艦一

番艦

出身地

旅順

身長

158センチ

体重

聞いたら殺す！！

髪型 長髪

通称

早紀

実年齢

0歳10ヶ月

外見年齢

18歳

誕生日

1月5日

家族構成

妹・武蔵、信濃好きな物

妹達、由美、女の裸体、平和

嫌いな物

米、英、戦

争 大和型戦艦一番艦である。艦魂達の間では『早紀』と呼ばれている。
周囲が引くほど由美を溺愛している。

レズ、変態、DSである。

第8話 セイロン島へ向けて

昭和17年11月8日遂に第七独立機動艦隊が呉を出航した。

「長官。遂に出撃ですね」

草鹿がやや興奮気味に言った。

「そう大きな声をだすな。まだ出航したばかりだぞ」
小沢が冷静に言った。

「確かにそうですね。」

草鹿が笑いながら言った。

「そうだよ。何も慌てる事はない。セイロン島は逃げないからな。」

小沢が艦橋の全員に言い聞かせた。

さて、現在の第七独立機動艦隊の状況を説明すると。

0500時に予定通り出航して、現在フィリピンのマニラを目指して南下中だ。

「なあ大和。俺達は勝てるよな？」

大和艦長の有賀幸作は大和（早紀）に聞いていた。

「何言ってるのよ。私の艦長なんだからしっかりしてよね。私達が負ける訳ないわよ。」

大和（早紀）が怒りながら言う。

「おいおい。そんなに怒るなよ。冗談だよ。冗談。」

有賀が謝る。

「ふんっ！ー！ばあか！ー！」

大和（早紀）はそういうとどこかへ行ってしまった。

「全く。そんなに怒らなくてもいいだろうに。」

有賀が呆れて言う。

「有賀艦長。お電話です」

初陣で緊張しているのか震えた声で伝令が言っている。

「おお。ありがとうございます。」

有賀が電話に出ると声の主は馴染みのある声だった。

「よお。有賀調子はどうだ？」

武蔵艦長の森下からだった。

「別に何ともないぞ。どうしたんだ？」

有賀が聞く。

「いやあな。この艦隊としては初陣だからお前が緊張していないか心配していたんだ。」

森下が笑いながら言った。

「馬鹿野郎。俺が緊張すると思っていたか？」

有賀も笑いながら言う。

「思っちゃいねえよ。ただ単に聞いてみただけだ。」
森下が言う。

「全く。お前って奴は。」
有賀が笑う。

「じゃあそつゆう事だ。精々楽しませろよ。」

それだけ言つと森下は一方的に電話を切つた。

有賀は、相変わらずの野郎だと思いながらそれを伝令に渡した。

と、そこへ連絡が入つた。

「連邦商路護衛艦隊から入電です。」

伝令が言う。

「なんだ？」

小沢が聞く。

「言います。貴艦隊は第七独立機動艦隊と見ゆ。貴艦隊は極秘艦隊の為貴艦隊と遭遇した事は秘匿する。です。」

伝令が言った。

「うむ。流石は鈴木 of 艦隊だ。我が艦隊の情報を入手しているとはよし。返信だ。心ずかい感謝する、とな。」

小沢が言った。

「了解しました。返信します。」

さてここで連邦商路護衛艦隊と鈴木について説明する。

鈴木とは実在した『鈴木商店』である。

鈴木商店は1874年に兵庫の弁天浜に開業し、金子直吉と柳田富士松の両番頭が鈴木よねに経営を任せられ、戦前の日本の財閥に育てた。

砂糖事業などで利益を上げ、製糖・製粉・製鋼・タバコ・ビールなどの事業を展開し、さらに保険・海運・造船などの分野にも進出した。

1920年の全盛期の売上は、16億円（日本のGNPの約1割）に達した。

しかし、第一次世界大戦後の反動でバブルが崩壊。

銀行からの借り入れのみで運営資金をまかっていた鈴木商店は大打撃を受ける。

台湾銀行は、鈴木商店への新規融資の打ち切りを通告、系列銀行に鈴木商店を支える体力はなく資金調達が不能となり、事業停止・清算に追い込まれた。

鈴木商店の流れを継ぐところは神戸製鉄所・帝人・ナブテスコ・IH・いすゞ自動車・日本化薬・双日などである。

さて、本題の連邦商路護衛艦隊であるが、

台湾銀行が鈴木商店に新規融資を打ち切った時に帝國政府が鈴木商店救済法案を可決し、鈴木商店に対する援助を決めた。

しかし、帝國政府は自分だけが金を出すのはもったいないと考え、鈴木商店に対して商路警護委託法案を鈴木商店側に提示した。

それに対し、鈴木商店側は商路警護委託法案を承諾して帝國政府からの援助を受け、倒産の危機を脱する事に成功した。

これから後の鈴木商店の動きは迅速だった。

早々と連邦商路護衛艦隊を創設し、太平洋戦争の始まる昭和16年12月8日には早速業務をはじめた。

業務内容は占領地からの輸送船団の護衛などであった。

これにより、帝國海軍は敵艦隊との戦いにのみ集中出来るようになった。

それが連邦商路護衛艦隊である。

「さて後はフィリピンのマニラへ行くだけだな。」

小沢がつぶやいた。

数時間後の1100時には第七独立機動艦隊は無事にフィリピンのマニラに到着した。

「南方っていい所ね。」

早紀が言った。

「本当ね。姉さん。」

喜恵が応える。

「けどちょっと前までここでは血が流れていたんだよ。」

亜由美が言った。

確かに亜由美の言う通りで少し前まで、ここは戦場だった。

「まあ。いいじゃない。私達の目的地はまだまだ先だよ。」

早紀が言った。

早紀の言う通りだ。

彼女達の目的地はセイロン島だ。

「さて。そろそろ出航ね」

亜由美が言った。

「さて。行きますか。」

早紀が言った。

その後第七独立機動艦隊は無事にシンガポールに到着し、燃料を補給した後、セイロン島へ向け出航した。

今回はセイロン島制圧及び英東洋艦隊壊滅作戦の為、第七独立機動艦隊の輸送船30隻の内10隻が特別陸戦隊一個師団を乗せており、セイロン島の占領も考えていたのだ。

セイロン島を占領した後は陸軍を派遣してくる事になっていた。

さて、いよいよ次回。

第七独立機動艦隊が派手に暴れます。

ご期待ください。

第8話 セイロン島へ向けて（後書き）

皆さん。

申し訳ありません。

今回、戦闘シ

ーンを書くといいましたが次回にズレてしまいました。

本当に申し訳ありません。見捨てないで下さい。

第9話 セイロン島空襲（前書き）

《武蔵》

大和型戦艦二番艦

出身 旅順港

身長 155センチ 体重 聞かない方がいいよ

髪型 長髪

通称 亜由美

実年齢 0歳

10か月 外見年齢 18歳 誕生日 1月5日

家族構成 姉・大和、妹・信濃

好きな物 姉、

妹、平和 嫌いな物 戦争

艦魂達の間では『亜由美』と

呼ばれている。 姉の早紀ではケン力をすることもあるが実

は姉の事を尊敬している。

第9話 セイロン島空襲

昭和17年11月13日。遂に第七独立機動艦隊はセイロン島の東400キロに位置していた。

「よし。大和改に連絡。機動群は第一次攻撃隊を編成し、セイロン島を空襲せよ。」

小沢が言った。

「よし。これで一段落だな。」

「やれやれですね。」

草鹿が応えた。

「しかし、警戒は厳重にしろよ。英東洋艦隊の所在が掴めないんだからな。」

小沢が心配している。

それもそうだろう、未だ英東洋艦隊が見つからないのだ。

小沢はもとより、第七独立機動艦隊の誰もが躍起になっていた。

「もう。まだ見つからないの?」

大和（早紀）が呆れたように言っている。

「まあそう言っな。皆躍起になって探しているんだ。もう時間の問

題だろう。」

小沢がなだめるように言った。

「そうね。もうすぐ見つかるよね。」

「そうだ。見つけたら盛大に迎えてやれ。」

小沢が言った。

さてその頃大和改、武蔵改、信濃改の三空母はてんてこ舞いだった。

「急げ。第一次攻撃隊の出撃はもうすぐだぞ。」

総指揮官である『大和改』飛行隊長の木月武中佐が激を飛ばしている。

「張り切ってるわね。」

「おお。大和改。張り切るに決まってるだろ。」

大和改（由香）が木月に話かけた。

「あんまり無茶しないでね。あんたが死んだら殴る相手がなくなるからね。」

「あたぼうよ。お前の為に死ねるかよ。」

「なっ！！誰があんたの為よ。勘違いしないでよね。」

「ハハハ。そう慌てる所が怪しいな。」

木月が言う。

「もう。ふざけないで。」

大和改（由香）が木月を殴り飛ばした。

「ぐふつ。人が出撃前なのにこんな事をするとは」

「あんたが悪いのよ。」

大和改（由香）はそう言うと、どこかへ行ってしまった。

「全く。あいつは。」

木月が呆れて言う。

「よし。出撃だ。」

大和改、武蔵改、信濃改の三空母の飛行甲板はまさに新時代の空母といった感じだった。

従来の飛行甲板から蒸気カタパルトに射出される航空機の横で斜めに射出される航空機があった。

これこそが世界初となるアングルドデッキである。

元々は山本の思いつきに牧野が建造中の三空母に取り付けたのである。

（しかしなあ。一昔前じゃあ想像つかなかったぞ。何せ斜めに打ち出されるんだからな。）

木月が部下が飛び立ってくるのを上空で見守りながら考えていた。

（よし。全員無事に上がってきたな。あのカタパルトが付いてから出撃にかかる時間が短くなったな。）

木月が率直な気持ちを思っている。

木月は全機に直通の無線を入れた。

「よし。全機無事に上がってきたな。それではセイロン島空襲に出撃だ。」

この世界では日本の無線は世界各国のそれより、はるかに凌駕していた。

第一次攻撃隊としていたがその実は、彩雲以外の全力出撃である。

「全機に告ぐ。これよりセイロン島を空襲するが、第一目標はドンドラ岬の要塞だ。陸戦隊がドンドラ岬に上陸するから重点的に空襲しろ。陣風隊は敵に流星隊に絶対に手を出させるな」

木月が全機に命令を下した。

その後木月率いる第一次攻撃隊はセイロン島の南、ドンドラ岬要塞を徹底的に破壊し意気揚々と帰還した。

何せ被害機及び被弾機は皆無だったのだ。

この知らせを聞いた小沢は

「流石は木月だ。あいつに総指揮官を任せて正解だったな。」

と言っている。

その後第七独立機動艦隊に待ちわびた報告が届いた。

「我。敵英東洋艦隊を発見す。南南西の方角、距離1200キロにて13ノットで進撃中。」

信濃改が放った彩雲偵察機の快拳だった。

この報告を受けて小沢は、

「全艦最大速力。南南西へ進路を取れ。英東洋艦隊を撃破するぞ。」

と言った。

「やっと私が活躍出来そうね。」

「大和。期待しているぞ」

小沢が大和（早紀）に言っている。

「任せて。私の51センチ砲で粉碎してやるわ。」

大和（早紀）が言った。

さてその頃、英東洋艦隊はというと。

「長官。紅茶が入りました。」

「おお。リーチ艦長。有り難う。」

英東洋艦隊長官のサー・トーマス・フィリップス中將が紅茶を飲んでいる。

呑気な風景だが、英国紳士はレディファーストであり服装は完璧であり紅茶をたしなむものだと思っている。

作者もこう思っており、レディファーストを常に心がけている。

朝と三時のティータイムは欠かした事がない。

まあ五年前からだが……

「それより。ウェールズ。これから敵艦隊との砲撃戦が予想される。頑張ってくれよ。」

フィリップスがウェールズに言っている。

「任せてよ。私頑張るからね。」

ウェールズが応えた。

「うむ。頑張れよ。」

さて。ゆっくりとだが、確実に接近していく第七独立機動艦隊と英東洋艦隊。

両艦隊が激突するのは時間の問題だ。

第9話 セイロン島空襲（後書き）

次回。
撃戦。

お楽しみに。

第七独立機動艦隊と英東洋艦隊の一大砲

第10話 セイロン島の決戦（前書き）

《信濃》

大和型戦艦三番艦

出身 旅順港

身長 150センチ 体重 秘密です

髪型 長髪

実年齢 0歳10か月 外見年齢 1

8歳 誕生日 1月5日 家族構成 姉・大和、武蔵

好きな物 姉たち、平和 嫌いな物 戦争、ルーズベルト、チャー
ル 艦魂達の間では『喜恵』と呼ばれている

大和三姉妹の中では一番真面目である。

第10話 セイロン島の決戦

昭和17年11月13日の夜半。

遂に両艦隊共相手を発見した。

「よし。機動群は輸送船団を率いて戦域を離脱させろ。」

小沢が言った。

「了解。機動群に連絡。」

参謀達が復唱していく。

「大和。今から派手にやるから頑張ってくれよ。」

小沢が大和（早紀）に言った。

「まかせて。私にかかれば敵なんてイチコロよ。」

大和（早紀）が笑いながら言った。

「おいおい。沈めたら意味がないだろう。俺達の目的は敵主力艦の鹵獲だぞ。」

有賀が言った。

「わかってるわよ。そんな事をいちいち言わなくていいのよ。」

大和（早紀）が怒っている。

「すまんすまん。」

「まあそう怒るな。」

有賀が謝り、小沢が宥めている。

「艦長。敵艦の観測機です。どうしますか？」

艦内放送で防空指揮所からの連絡が入った。

「よし。二番主砲塔、三式弾装填。装填したら敵機を撃墜せよ。」

有賀が言った。

なお、三式弾と言っても史実と同じではない。

この世界の三式弾はVT信管が付いている。

この世界ではVT信管をすでに開発していたのだ。

その他に潜水艦用の四式弾があり、対地用に開発された今で言うクラスター弾の五式弾がある。

「了解しました。」

二番主砲塔から連絡が届いた。

その頃、英東洋艦隊はというと。

「弾着観測機は、発進させたか？」

フィリップスが言った。

「もちろんです。長官。悔しい事に我が軍のレーダーより、日本軍の方がレーダーは優秀ですからね。」

リーチ艦長が応えた。

「フィリップス長官。」

若い士官が慌てて艦橋に入ってきた。

「どうした。」

フィリップスが尋ねた。

「弾着観測機が全機叩き落とされました。」

「何！？それは本当か？」

「はい。」

「うむ。」

フィリップスが悩んでいる。

「よし。レーダーがあるんだ。レーダー射撃だけで迎え撃とう。」

フィリップスがそう言い切った。

さてもう一度我が独立機動艦隊はどうゆう状況かというと。

「よし。全速前進。敵に先に撃たせるのだ。」

小沢が言った。

「ねえ。大丈夫なの？」

大和（早紀）が言った。

「どうした。大和。お前は丈夫だから大丈夫だよ。」

「別に何も無いわよ。」

「大丈夫だ。お前は世界中のどの戦艦の主砲にも耐える事が出来るからな。」

小沢が言った。

確かに小沢の言うとおりだ。

大和級は世界中のどの戦艦の主砲弾にも耐える事ができる。

現在の所、大和級が耐える事の出来ないのは自身の主砲弾だけである。

大和級の装備する主砲弾の超々重量徹甲弾は世界一の威力を持っている。

「敵艦隊。射程内に入りました。」

防空指揮所から連絡が入る。

「発射は控える。先に敵に撃たせるのだ。大丈夫だ。ウェールズの主砲は35・6センチだから被害はないはずだ。」

「敵艦発砲。」

防空指揮所から連絡が入る。

ウェールズからの砲撃が大和に向かって飛んでくる。

八発の主砲弾は、隔壁を粉碎しつつ船体に浸透、ヴァイタルパートへと接触し……………

全弾が、あさつての方向へ弾き飛ばされた。

「被害報告。」

小沢が言った。

「被害皆無。」

報告が各所から入った。

「よし。反撃だ。一番主砲塔は重巡洋艦群。二番主砲塔は駆逐艦群に三番主砲塔は五式弾を装填し敵空母群を狙え。」

「了解。」

各砲塔から返事が返ってきた。

その後、英東洋艦隊の重巡洋艦群及び駆逐艦群は全滅し空母群も飛行甲板が大破させられ、戦艦群も大和、武蔵、信濃の前には子供のようなものであり戦況はけつした。

その後の第七独立機動艦隊の降伏勧告を英東洋艦隊は受け入れ、戦闘は終結した。

フィリップスなど主要幹部は大和に乗り移り、戦艦POウエールズ及びレパルス空母インドミダブル及びフォーミダブルは第七独立機動艦隊に鹵獲された。

その後、第七独立機動艦隊は更に強大になるがまたそれは次回に。

第10話 セイロン島の決戦（後書き）

皆さん。

申し訳ありません。

物足りないの

はわかっています。

米太平洋艦隊との戦いでは

派手にしまのでこれからもよろしく願います。

第11話 第七独立機動艦隊改修計画（前書き）

今回は題名のとおりです。

第11話 第七独立機動艦隊改修計画

昭和17年11月15日

第七独立機動艦隊はセイロン島のドンドラ岬に上陸を開始した。

上陸にあたり、艦砲射撃及び航空攻撃を行った。

大和、武蔵、信濃は五式弾による艦砲射撃を行った。

その射撃により、セイロン島の建物という建物は粉々になりその後を対地ロケット弾を装備した『陣風』、ナパーム弾を装備した『流星』が空爆を行い、英軍守備隊は戦う前から戦意を喪失していた。

そこに第七独立機動艦隊の輸送船がドンドラ岬の砂浜に乗り上げた。

実は、陸戦隊を乗せた10隻の輸送船は強襲揚陸艦であつた。

一個師団の半数は20式重戦車を配備していた。

20式重戦車は陸軍ではなく海軍が開発したものである。

20式重戦車の概要は主砲115mm砲を装備し、最大装甲圧は170mm、時速55kmである。

陸軍は現在海軍に要請し、20式重戦車を大量生産中である。

この20式重戦車を主軸とし、歩兵隊も軍用トラックに乗って進軍を行ったので翌日の昼にはセイロン島は第七独立機動艦隊が占領するに至った。

その後、セイロン島は『連邦商路護衛艦隊』に任せて第七独立機動艦隊は昭和17年11月20日には旅順港に帰港した。

小沢達が旅順港に上陸するとそこには懐かしい人物達が待っていた。

「おお。小沢君に草鹿君。セイロン島では頑張ってくれた。」

近衛が言った。

「小沢、草鹿。よくやった。」

山本が言う。

「お疲れ様でした。」

豊田が疲れを労う。

「近衛総理、山本長官、豊田君。わざわざありがとうございます。」

小沢が応える。

「まあ小沢。そう固くなるな。今回は作戦の成功祝いだけじゃなく、艦隊の改修をいいにきたんだ。」

山本が言った。

「……………改修ですか？」

小沢が驚いたように言う。

「そうだ。第七独立機動艦隊全艦及び鹵獲艦の改修だ。」

山本が言った。

「詳しい事は牧野君に説明してもらってから早速聞きに行こうではないか。」

近衛はそう言うのと1人で基地の方へと行ってしまった。

残された4人は慌てて後を追いつけた。

「それでは説明をはじめてくれ。牧野君。」

近衛が言った。

「わかりました。それでは第七独立機動艦隊全艦及び鹵獲艦改修計画案についてご説明させていただきます。」

牧野が説明を始めた。

「まずは第七独立機動艦隊全艦の改修計画案から説明させていただきます。大和級戦艦から説明します。まず大和級は三艦共に艦首尾を撤去し新艦首尾を接合します。」

牧野がそこまで言うのと小沢が質問した。

「新艦首尾と言ったが何が新しくなったんだ？」

小沢の質問はもっともな物だった。

「新艦首尾ですが。まず艦首はバルバス・バウから艦首部の予備浮力確保及び抵抗低減をさらに推し進めたシリンドリカル・バウ（円筒状突出艦首）に更新します。艦尾はただ単に延長しただけですが。」

牧野がそう説明すると小沢納得して手元の資料を読み始めた。

「それでは、続けます。」

「このように、新艦首尾を採用した事により全長が前後40メートル

ル延び370メートルになりました。これにより旋回性能の是正のため、艦首下艦底中央部に引き込み式副舵（並列二枚配置）を追加装備します」

「その他大和級は生物、化学、放射性、核兵器（CBRN）対策の全面的導入をします。主に対放射性塵、汚染物質対策の為、木甲板を廃止し鉄、鉛粉末混合コンクリート層による耐熱表面被覆に更新します。また放射能塵除洗用散水装置を設置して区画の一部に含水層を追加し火災、弾片防御、対核防御の向上を目指します。」

「その他、主計科倉庫、被服庫、糧食庫、給水所を各所に分散配置。全配置で戦闘配食と負傷者の応急措置が可能な『戦う大和ホテル』に。」

「この他に艦尾の弾着観測機を水上機からヘリコプターに変更します。」

牧野が言うつと。

「ヘリこぷたー？」

小沢が始めて聞いたぞと言わんばかりに言った。

「そうだ。ヘリコプターだ。私から説明しよう。」

山本が説明を始めた。

「ヘリコプターは陸軍と海軍の協同で開発した物だ。ヘリコプターはその使い道の多さから陸軍では対地ロケット弾を装備したヘリコプターを海軍では対潜水艦ロケット弾を装備したのをそれぞれ生産中だ。大和級及び最上級及び雪風級には海軍仕様を配備し、信濃級

には陸軍仕様と海軍仕様をそれぞれ10機配備する。まあそれがヘリコプターと言う奴だ。」

「はあ。なんとなく解りました。」

小沢が言った。

「よし。説明を再開してくれ牧野君。」

「わかりました。」

牧野が言う。

「それでは次に信濃級ですが、信濃級は艦首部をシンドリカル・バウに変更し陸軍、海軍各仕様のヘリコプターを10機搭載した以外は変わりません。」

「最上級は20センチ砲を装備し海軍仕様のヘリコプターを搭載しただけです。雪風級は海軍仕様のヘリコプターを搭載しただけです。」

「以上が第七独立機動艦隊の改修計画案です。次に鹵獲した英艦の改修計画案ですが……………」

その3ヶ月後、第七独立機動艦隊は更に強大になり、アメリカ太平洋艦隊撃滅に出撃していった。

第11話 第七独立機動艦隊改修計画（後書き）

如何でしたでしょうか？ 話はいきなり3ヶ月飛びますがまたまだ

太平洋戦争は続きます。

これからも頑張っていきま

すので応援よろしくお願いします。

新生第七独立機動艦隊（前書き）

大改修を行った第七独立機動艦隊の陣容を書きました。

更にパワーアップした第七独立機動艦隊をご覧ください

い。

新生第七独立機動艦隊

第七独立機動艦隊

司令長官↳小沢治三郎中将参謀長↳草鹿龍之介少将

総旗艦・戦艦大和

戦艦武蔵

戦艦信濃

機動郡旗艦・空母大和改

空母武蔵改

空母信濃改

防空重巡洋艦最上

防空重巡洋艦鳥海

防空重巡洋艦青葉

防空重巡洋艦松島

防空重巡洋艦高雄

駆逐艦雪風

駆逐艦谷風

駆逐艦初風

駆逐艦海風

駆逐艦山風

潜水艦伊一 一号

潜水艦伊一 二号

潜水艦伊一 三号

輸送艦二十隻

強襲揚陸艦十隻

戦艦近江（旧POウエールズ）

戦艦尾張（旧レパルス）

空母海神（旧インドミタブル）

空母風神（旧フォーミダブル）

各艦の性能は以下の通り。

超弩級戦艦大和級

全長370メートル

最大幅50メートル

満載排水量13500トン

速力35ノット

主砲51センチ3連装3基9門

副砲25センチ3連装3基9門

高角砲127ミリ速射砲単装12基12門

80ミリ速射砲連装16基32門

噴進砲18センチ40連装6基

対空機銃40ミリ4連装50基200門

4連装対潜魚雷発射機2基対潜哨戒ヘリコプター3機搭載

主砲には二式重戦車の主砲が装備していたサーマルジャケットと冷水放射基を装備した。

電装関係だが発電機をターボ発電機、ディーゼル発電機に変更した。これにより砲塔駆動を水圧方式から電圧方式に変更した。

『三式射撃レーダー』及び『二二式水上レーダー』及び『二五式対空レーダー』及び『三三式ソナー』を装備している。『三式射撃レーダー』は対水上、対空問わずに一五の目標に対するリアルタイム照準と追尾が可能になった。

バルバス・バウに変わりシリンドリカル・バウに更新した。

シリンドリカル・バウ内にソナーが装備されている。

超弩級航空母艦大和改

全長330メートル

最大幅75メートル

満載排水量12500トン

速力35ノット

高角砲130ミリ速射砲単装砲20基20門

噴進砲15センチ30連装8基

対空機銃40ミリ4連装60基240門

搭載機数150機

艦上戦闘機・陣風40機

艦上攻撃機・流星40機

艦上偵察機・彩雲25機

早期警戒機・極星25機

攻撃ヘリ・10機

対潜ヘリ・10機

『アングルドデッキ』及び『蒸気カタパルト』を世界に先駆けて装備した。

大和級と同じくシリンドリカル・バウに更新し、その中にソナーを装備している。レーダー等は大和級と同じ装備である。

防空重巡洋艦最上級

全長190メートル

最大幅25メートル

満載排水量9800トン

速力35ノット

主砲25センチ連装4基8門

高角砲130ミリ速射砲単装20基20門

噴進砲15センチ30連装8基

対空機銃40ミリ4連装60基240門

対潜ヘリ2機搭載

対空戦闘を主眼にした防空艦である。

防空艦の為、セイロン島沖海戦までは主砲は装備していなかったがセイロン島沖海戦後に、砲撃数が多いほうがいいと言う事で最上級にも主砲が取り付けられた。

バルバス・バウを装備している。

電装関係は大和級等と同じである。

駆逐艦雪風級

全長150メートル

最大幅15メートル

満載排水量7500トン

速力35ノット

主砲15センチ連装4基8門

高角砲127ミリ速射砲単装10基10門

対空機銃40ミリ連装40基80門

噴進砲15センチ30連装4基

魚雷発射管4連装4基12門

対潜ヘリ1機搭載

駆逐艦ではあるが軽巡洋艦なみの武装をもっている。バルバス・バ
ウを装備している。

電装関係は大和級等と同じである。

潜水艦伊一 一級

全長100メートル

最大幅23メートル

満載排水量7500トン

速力35ノット

70センチ魚雷発射管6門最大潜航深度180メートル

世界で初めてポンプ式噴流エンジンを搭載した潜水艦である。

このエンジンのお陰で35ノットの速力がだせる。

20式重戦車

主砲115mm砲

機銃30mm重機銃

最大装甲厚170mm

時速55km

日本海軍が開発した重戦車である。

陸軍用も現在大量生産中である。

現時点では世界最強の戦車である。

艦上戦闘機陣風

最大速度770キロ
実用上昇限度15800メートル
武装30ミリ機関砲門
13ミリ機関砲門
対地口ケット弾6発
航続距離7500キロ
ジェットエンジンを搭載する予定だったが開発が難航し現有のエンジンの馬力アップを狙った。
速度、上昇限度、航続距離が上がった。

艦上攻撃機流星

最大速度650キロ
実用上昇限度11500メートル
武装対艦口ケット弾8発
爆装1トン徹甲弾及びナパーム弾4発
雷装850キロ長魚雷
航続距離7300キロ

主翼は世界初となる逆ガル型の主翼を採用した。

その為、流星は世界初の急降下爆撃、雷撃兼用の航空機となった。

艦上偵察機彩雲

最大速度880キロ
実用上昇限度2300メートル
航続距離9300キロ

世界最速の艦上偵察機である。

実用上昇限度が低いのは速度に重点を置いた為である。

早期警戒機極星

最大速度850キロ
実用上昇限度8000メートル
航続距離9000キロ

対空、水上の両レーダーを装備した航空機である。

世界初の早期警戒機である。

攻撃ヘリコプター

最大速度510キロ

実用上昇限度4500メートル

武装30ミリ機関砲1門

対地ロケット弾12発

対艦ロケット弾10発

航続距離2500キロ

世界初となる実用ヘリコプターである。

対潜ヘリコプター

最大速度500キロ

実用上昇限度4300メートル

武装30ミリ機関砲1門

対潜魚雷4発

航続距離1800キロ

対潜水艦を攻撃に重点を置いたヘリコプターである。

戦艦近江（旧POウエールズ）

全長228メートル

最大幅29メートル

満載排水量38500トン速力35ノット

主砲38センチ連装4基8門

高角砲127ミリ速射砲単装8基8門

対空機銃40ミリ4連装30基120門

UP空中機雷発射機4基

セイロン島沖海戦で鹵獲したPOウエールズを誠意改修した。

UP空中機雷発射機は日本軍が現在大量生産中であり近々全艦艇に
装備される。

シリンドリカル・バウを装備した。

電装関係も大和級と同じ装備にした。

戦艦尾張（旧レパルス）

全長245メートル

最大幅28メートル

満載排水量29000トン

速力35ノット

主砲38センチ連装2基4門

高角砲157ミリ速射砲単装10基10門

対空機銃40ミリ4連装30基120門

UP 空中機雷発射機4基

POウエールズと同じ誠意改修を行った。

シリンドリカル・バウを装備。

大和級と同じ電装関係を装備。

空母海神、風神（旧インドミダブル、フォーミダブル）

全長230メートル

最大幅50メートル

満載排水量35000トン

速力35ノット

高角砲127ミリ速射砲単装10基10門

搭載機数80機

艦上戦闘機陣風30機

艦上攻撃機流星30機

艦上偵察機彩雲10機

早期警戒機極星10機

シリンドリカル・バウを装備。

大和級と同じ電装関係を装備。

アングルドデッキ及び蒸気カタパルトを装備。

新生第七独立機動艦隊（後書き）

如何でしたでしょうか？ パワーアップした第七独立機動艦隊。

次回から派手な戦闘といきたいですが……

次回はセイロン島沖海戦の結果を聞いたアメリカの対応などについて書きたいと思います。 遂にアメリカに知られてし

まった第七独立機動艦隊。彼らの次なる戦略は？ その次こそ戦

闘シーンといきたいですが…… 連合艦隊について書きたい

と思います。 海軍の本家の動向について書かないとい

けませんからね。

第12話 アメリカ合衆国政府の苦悩前編（前書き）

アメリカ合衆国がついに第七独立機動艦隊について情報を得た。

その艦隊についての対抗計画を考えるアメリカの苦悩について書きました。

第12話 アメリカ合衆国政府の苦悩前編

さて今回は第七独立機動艦隊が大改修を行なっているときのアメリカの対応について書きたいと思います。

1942年11月13日に起こったセイロン島沖海戦を受けてのアメリカの対応です。

アメリカ海軍省。

海軍省長官フランク・ノックスの気分は朝から優れなかった。

11月の肌寒さの中セイロン島沖海戦にて敵連合艦隊に未確認の艦隊が英東洋艦隊と海戦を行ったという。しかもそのX艦隊は強敵らしく（アメリカ海軍はその未確認の艦隊をX艦隊と呼んでいる。）POウエールズ、レパルス、インドミダブル、フォーミダブルを鹵獲したというのだ。

頭痛の種はこのところいくつもあったが、今日はまた特別だ。

午前7時30分。

まだコーヒーも口にしていない時間に、その人物は海軍省に現われてノックスの席に腰を据えてしまった。

つまり海軍長官の席にである。

ほかの人間であればただちに尻を蹴飛ばして厳寒の通りに放り出すところだがその人物に限っては苦笑い程度で我慢するしかなかった。

「やあ。フランク」

椅子に座っているのはフランクリン・D・ルーズヴェルトアメリカ合衆国第三二代大統領その人だ。

「大統領。私の記憶違いでなければお約束は8時ではなかったかと……」

「どうしても一度この椅子に座ってみたくてね。」

フランクリン個人だけでなくルーズヴェルト一族は海軍に強い影響力を発揮していた。

『マイ・ネイビー』

フランクリン・ルーズヴェルトはそう公言していた。
イギリスの後ろ盾にとどまらずついにアメリカは大戦の荒波に乗り

出した。

相手は世界の三大海軍の一つ。

英東洋艦隊は壊滅した為、日本海軍との一騎打ちとなった。

ルーズヴェルト一族が育てあげてきた海軍『マイ・ネイビー』の成果がいよいよ試されるのである。

と言ってもハワイのダイヤモンドヘッドが噴火した為海軍が壊滅した為、フランクリンが再建したからルーズヴェルト一族のではなくフランクリンの『マイ・ネイビー』と言ったほうが正しいだろう。

「次官をしていたのはもう30年も昔の話だが。その時の願望がやつとかなった。」

ルーズヴェルトが言った。

本来の約束時間8時。

コッコッ

誰かがドアをノックした。

「入りましたまえ。」

ルーズヴェルトが言った。

六フィートを超す長身。

その男が入って来ただけで部屋の気温が五、六度下がったようにノックスは感じた。

大西洋艦隊司令長官アーネスト・J・キング大将。

アナポリス海軍兵学校教官、大西洋艦隊参謀、潜水艦戦隊司令、空母「レキシントン」艦長、航空局長、航空艦隊司令長官、将官会議メンバーを経て、1940年12月、キング少将は大西洋哨戒艦隊の司令官となった。

41年2月1日の改編により合衆国艦隊は廃止され、アメリカ海軍は大西洋艦隊、太平洋艦隊、アジア艦隊に三分割された。

キングは大西洋艦隊の新編なった司令長官に就任。

大統領の息のかかった>ルーズヴェルト・サークル<の外からの抜擢は、それだけキングの力量を示すものといえた。

「オラン沖では見事だったなキング大将。うまいこと飛行機を使っ
た。」

「最善を尽くしたまでです。大統領閣下。」

キングが無表情で答える。

「オランダに比べてフィリピンや南方地帯は残念だったな。」

「確かにそうですね。閣下。」

キングが答えた。

「しかし、閣下。問題はそれだけではないとお聞きしましたが。」

キングがルーズヴェルトに聞く。

「ああそうだ。大きな問題がある。」

ルーズヴェルトが続ける。

「セイロン島沖海戦で英東洋艦隊を壊滅させた謎の艦隊が出てきた。」

「我々はその謎の艦隊をX艦隊と読んでいるのだ。」
ノックスが説明した。

「海軍長官の言った通りそのX艦隊は全ての艦がまったくの新型艦みたいなのだ。」

ルーズヴェルトが落ち着きながらいう。

「そのX艦隊に対抗出来るように現在、太平洋艦隊の増強を推し進めている。」

ノックスが自慢気に言った。

「話の内容は分かりました。そのX艦隊に対抗する為に太平洋艦隊を増強する、その為大西洋艦隊は規模を縮小する。それを認めさせる為に私を呼んだ。そうでしょう。大統領閣下。」

キングが笑いながら言う。

「いやいや。違うよキング君。確かに太平洋艦隊は増強するが大西洋艦隊の規模は縮小しない。」

ルーズヴェルトも笑いながら言う。

「君には別のポストについてもらう。」

「フィリピンや南方地帯の件を持ち出したということはキンメル大将の代わりに対日戦の指揮を？」

キングが驚いたように言う。

「いや。キンメルはそのまま太平洋艦隊をみてもらう。君はその上のポストだ。私は合衆国艦隊を復活させたいと思う。海軍内に太平洋・大西洋両面の統合指揮官が必要だ。」

ルーズヴェルトが言った。

「レインボー七色のうちのオレンジをなんとしても塗り潰さねばならんのだからな。」

レインボーとはレインボー・プランの事である。

日露戦争後、加速度的に膨張を続ける日本の軍備をアメリカは極度に警戒した。

日本を仮想敵国として作戦を練り上げたものが、1904年のオレンジ・プランである。

30年以上にわたって研究されたオレンジ・プランは1939年6月に破棄され、代わりにレインボー・プランが採用された。

一国のみを相手にするのではなく、複数の国と戦う場合を想定した戦争計画だった。レインボー七色のうちオレンジが従来通り日本、レッドがイギリス、ブラックがドイツ、グリーンがメキシコである。

オレンジ・プランは太平洋を西進し、日本艦隊を撃破。

日本を海上封鎖し、降伏させる。

といったふたつのステップからなる。

「つまり大統領閣下。ゲルマンだけでなくジャップを潰す役も私に？」

「その通りだ。」

ルーズヴェルトが言った。

（ドイツ人嫌い知られる私だが日本人はそれ以上に嫌いだ。やつらを叩く事ができる！）

（実戦部隊の最高位に立ったことよりも悦びは大きいぞ！）

「了解しました。大統領閣下。合衆国艦隊司令長官の役職におつきします。」

「そうか。ありがとうキング君。」

二人は固い握手を交わした。

第12話 アメリカ合衆国政府の苦悩前編（後書き）

アメリカ合衆国政府の苦悩はまだまだ続きます。

第13話 アメリカ合衆国政府の苦悩後編

キングが合衆国艦隊司令長官を引き受けてから五日後。

合衆国艦隊司令部長官補佐のフリードマン中佐は車を走らせていた。

（シャープエッジを怒らせてはいけない。）

フリードマン中佐は更に車のアクセルを踏んだ。

合衆国艦隊旗艦ドントレスに到着した。

「おはようございます。サー。」

「用意がよいな中佐。」

8時ちょうどにキングは現れた。

「キンメル大将の入院は長引くとのことですよ。」

「ふん。そうか。しかし計画には支障はない。遅かれ早かれキンメルは更迭するつもりだった。」

「キンメルにやけ酒を飲ませて正解だったな。」

キンメルは開戦以来負け続けの戦果に嫌気がさしていた。

その為キンメルのみならず太平洋艦隊司令部の職員は軒並みアル中になっている。

（はっ……………もしや……………）

「もしか長官はわざとキンメル長官に酒を飲ませ続けたのですか？
アル中になれば更迭のもっともな理由になる……………」

「ああそうだ。キンメル大将に酒を飲ませ続ければ奴はアル中になる。
そうすれば更迭はいつでも出来る」

（これが最初からキングの思惑通りだとすれば実に恐ろしい計算だ
！）

（壮大かつ非情！）

「フリードマン中佐。」

突然のキングの呼び掛けにフリードマンは心臓が止まる勢いだった。

「貴官は頭が切れる。わしはいい掘り出し物を当てたようだ。しかしこの件については他言無用。」

キングが続ける。

「誰かに漏らすことがあれば『ドントレス』のアンカーにつながる
れることになる。ポトマックの水はまだ冷たいことを忘れるな。」

「イ……………イエッサー。」

フリードマンは シャープエッジ の本当の意味を知った。

アメリカ海軍省本館

キングは先日ハロルド・R・スタークから海軍作戦部長を引き継ぎ、合衆国艦隊司令長官と兼任していた。

指揮権の一本化をはかった結果だが。

これにてキングは名実ともにアメリカ海軍のトップに立った。

キングはすべて自分の希望する人材をスタッフに集めている。

参謀長にはアナポリスの校長だったラッセル・ウィルソン。

参謀副長には大西洋潜水艦隊司令長官だったリチャード・S・エドワーズ。

その他にはやはり大西洋艦隊から旧知の仲のフロッグ・ロウ、海軍作戦部からは戦争計画部のリッチモンド・K・ターナーといった面々を幕僚として引き入れた。

さらにキンメルの下で知略を持てあまし気味の『ペンシルヴァニア』艦長、チャールズ・M・クックを先任参謀に予定していた。

キングという人間は会議で時間がつぶれることを嫌い、定例会議というものを開かない。

直に合うのは参謀長のウィルソンか参謀副長のエドワーズのどちらかの場合が多かった。

ところが今日は様子が違っていた。

「日本に対する基本戦略でありますか？」

フリードマンは驚いた。

「副官の身では口出しできるものではありませんが。」

「かまわん。マハンをもっと若いうちから著作の構想を温めていたぞ。」

さてマハンについて説明すると

アルフレッド・セイヤー・マハン大佐（1840～1914）は、著作『海上権力史論』によってシーパワーの重要性を訴え、当時のセオドア・ルーズヴェルト大統領のみならず、世界各国の海軍関係者や政治家に影響を与えた人物である。

現在もマハンの書は海軍関係者にとっては聖書みたいなものである。

マハン流の海洋地政学の三大テーゼは

・海を制する者は世界を制する。

・いかなる国も大海軍国と大陸軍国を同時に兼ねることはできない。

・シーパワーを得るためにはその国家の地理的位置、自然条件、国土の広さ、人口、国民の物質、政府の性質の六条件が必要。

アメリカはこれまで、

1、大海軍の建設

2、海外海軍基地の獲得

3、パナマ運河建設

4、ハワイ王国併合

など米国西方世界戦略はすべてにおいてこのマハン理論を具現化していた。

作者も一度この『海上権力史論』（3500円位で発売している）を読んだ事があるが一回だけでは全くもって意味がわからなかった。

二回読んでようやく意味が理解できた。

さてマハンのシーパワー理論が出てきたからついでにイタリアのジュリオ・ドゥーエの爆撃機用兵理論を紹介する。

イタリアの将軍ドゥーエが1920年代に著した『19XX年の戦

争』という未来戦予想記の中の一説で『明らかな攻撃意図をもって国土上空へ侵入してくる、敵爆撃隊はいかなる手段をもっても百パーセント阻止することは不可能だ』と著している。

攻撃側はいつどこを攻撃するかという点で常に主導権を握っておるだけに防御側は、はなはだ不利な立場に立たざるを得ない。

この爆撃機用兵理論を応用したのが史実におけるアメリカ軍である。

ヨーロッパの第八空軍、マリアナでB29を率いたルメイである。

日独双方共に爆撃によって息の根を止められた。

本土爆撃は戦争の最終局面に入った合図と捉えてもいいだろう。

一部本編からはなしはずれたが気を取りなおして続けよう。

フリードマンはこれを好機と考えた。

キングに認められるということは大きなステップアップとなるはずだ。

もちろんここで見放されるということもある。

フリードマンは慎重に言葉を選んだ。

「太平洋の脅威として、日本だけを考えていればよかった時代は終

わかりました。」

「状況は変わり。同盟を結んでいませんがドイツも敵として存在します。」

「また、長官の慧眼けいがん通り海戦の主力は戦艦ではなく、空母と潜水艦に移ったかと思います。」

「……しかし。それでもオレンジプランの基本に間違いはないと私は考えます。」

キングは黙ってうなづく。

「いま現在。日本軍は東南アジアからフランス、オランダ勢を一掃してしまいました。」

「ニューギニアも占領し、オーストラリア、ニュージーランドが降伏するのは時間の問題だと思います。」

「現在の状況でもシンガポールからスマトラ、ボルネオ、セレベス、ニューギニアに至る『マレー・バリヤー』が構築されました。」

「いかなアメリカ力軍といえど『マレー・バリヤー』を突破するのは至難の業です。」

「正面から攻略しようとするれば膨大な物資と時間、そして大勢の将兵たちの生命が失われるのは確実。」

「そうなれば厭戦気分が蔓延し、戦争継続すら危うくなります。」

フリードマンは続ける。

「南方ルートを放棄するとなると中部太平洋を突っ切るルート、もしくはアリューシャン・チシマ列島に沿った北方ルートが考えられます。」

「しかし北方は一年中霧が立ち込めており。大部隊の移動には難があります。」

そう言っているとフリードマンは大きく息を吸い。

「中部ルートからの進攻を提案します。」

「進攻法については……」

キングは冷たく言った。

「日露戦争でのバルチック艦隊がイギリスの監視網から逃れることが出来なかったように我が艦隊も『マレー・バリヤー』からやってくる偵察部隊の目をくまますことは出来ないのでしょう。」

「最悪の場合は退路を断たれます。」

「ここはギルバート、マーシャル、マリアナといった諸島を攻略し、兵站線を築いてから進撃すべきでしょう。」

「いずれにせよ史上かつてないほどの大規模な作戦となります。機動部隊や攻略部隊が完成するまでは時間が、かかりますのでそれまで敵を潜水艦で叩いておくことも必要かと」

「ボルネオ周辺にて通商破壊戦を展開すれば日本の動きは著しく封

じ込めれます。」

「奴らの弱点は海外に石油を頼っていることだ。」

「フリードマン中佐。貴君の戦略眼は実に興味深かった。明日の統合参謀長会議の参考になった。」

キングはそう言った。

「西半球。特に大西洋で一手打つことも有効です。ジョンブルたちに頑張ってもらい我々は太平洋に主軸を持っていくためにも。」

「そのためにはジョンブルたちの尻を蹴飛ばす必要があるな……」

……

「よし。続きはランチを食べながらだ。」

キングはそう言うところそくさと出ていってしまった。

フリードマンは朝の挽回ができたことを知って安堵のため息をついた。

もつともシャープエッジとの食事は何を食べても味などわからないだろうが。

第13話 アメリカ合衆国政府の苦悩後編（後書き）

次回から連合艦隊の動向についてかきます。 そして後書き
コーナーを作り、より一層艦魂を楽しんでもらえるようにしたいで
す。

第14話 大日本帝國海軍連合艦隊動向

さて今回は連合艦隊の動向について書きたいと思います。

先程、今まで投稿した小説を読んでみたんですが。

途中から普通の架空戦記になってましたね。

しかも説明が多い……！！

まあ今回も連合艦隊の説明ですが……

怒らないでください。

次回から艦魂の出る架空戦記になるので今回もお付き合いください。

さてさて、この小説には多数の艦隊が登場する。

日本・連合艦隊、第七独立機動艦隊、連邦商路護衛艦隊。

アメリカ・合衆国艦隊、太平洋艦隊、大西洋艦隊、アジア艦隊（すでに壊滅）

イギリス・イーストフリート（本国艦隊、地中海艦隊）イーストス

テーション（北大西洋艦隊、南大西洋艦隊、東洋艦隊、東洋艦隊はすでに壊滅）

ドイツ・大西洋艦隊

ソビエト連邦・黒海艦隊、地中海艦隊、極東艦隊

などが登場する

さて今回は大日本帝國海軍連合艦隊とは何か？

この小説中での活躍。

この小説中での建艦計画について書くことにしたいと思います。

連合艦隊だけでなくそもそも海軍というのは国力の基準であった。

現在のように、国民総生産（GNP）や国内総生産（GDP）は国力の基準ではなかった。

七つの大洋のどこにでも出動して、戦場に兵力を運んだり、紛争地に睨みをきかすことの出来る海軍力こそが、国力の象徴だった。

日露戦争の日本海海戦でのバルチック艦隊壊滅を受け、世界各国はまさに海軍の大拡張時代を迎え、米英共にいかに大きな軍艦をたく

さん造るかに血道を上げた。

そのような状態で第一次世界大戦に突入。

ジユットランド沖海戦などもあり、第一次世界大戦後も世界主要国の海軍拡張政策はとどまるところを知らなかった。

その建艦競争にブレーキをかけたのが、アメリカが主導したワシントン会議であり、そこで協定された条約の一つが海軍軍縮条約である。

ワシントン海軍軍縮条約から約十五年間、日本をふくむ五大国（日米英仏伊）は軍縮条約を通じて、世界の平和に貢献したわけである。

これがいわゆる^{ネーバルホリデー}建艦休止期である。

まずは大日本帝國海軍連合艦隊とは何か？

連合艦隊とは、国民にとっては帝國海軍のいわば代名詞だった。

二隻以上の軍艦が一人の指揮官に指揮されるとき、艦隊と呼んだ。

二個以上の艦隊を一人の指揮官で指揮するとき、連合艦隊と呼んだ。

連合艦隊は当初、大演習のときや戦争のときに編成されていた。

連合艦隊の制度は明治17年（1884）にできたが、はじめて連合艦隊が編成されたのはそれから十年後の明治27年（1894）だった。

それまでは艦隊の規模が小さく、連合艦隊を編成するほどではなかった。

ところが、清国との戦争が現実の問題となって、常備艦隊に当時の小さな艦隊をまとめてはじめて連合艦隊とし、伊藤中将が司令長官となった。

日清戦争が終わると連合艦隊は解散した。

再び連合艦隊が編成されたのは十年後、日露間に戦雲がただよい始めてからである。

この連合艦隊も戦争が終わると解散した。

しかし、明治末に一回、大正4年（1915）からはほぼ毎年、大演習のたびに連合艦隊が編成され、演習が終わるて解散した。

昭和8年（1933）5月に連合艦隊が編成され、以後は解散することなく、常置することになった。

連合艦隊司令長官は、帝國海軍の主要艦艇をほとんど指揮下にいれた、その重責を担った者は初代以来31代24人である。

簡単ながらこれを連合艦隊についての説明とする。

次にこの小説の中での活躍を説明する。

この小説では大日本帝國海軍連合艦隊の南雲機動艦隊はハワイ真珠

湾を奇襲していないのは先に書いた。

南雲機動艦隊は南方地帯におもむき、フィリピンを奇襲した。

フィリピンを奇襲した事により、マッカーサーは戦死した。

そのおかげでフィリピンは1週間で陥落。

その後南方地帯で南雲機動艦隊は上陸作戦の援護を担当。

マレー半島・スマトラ・ボルネオ・セレベス・ニューギニアを占領するにいたる。

そして問題のミッドウェー島はと言うと、『赤城』『加賀』『蒼龍』が大破するも上陸作戦に成功。

ミッドウェー島を占領するに至った。

その後『赤城』『加賀』『蒼龍』は『霧島』『榛名』『飛龍』『瑞鶴』『翔鶴』の曳航作業により日本に無事帰還することに成功。

その後『赤城』『加賀』『蒼龍』は修理のついでにアングドデッキと蒸気カタパルトを装備する改修を受けた。

『飛龍』『瑞鶴』『翔鶴』も3隻の修理改修後に同じ内容の改修を行った。

今後はニューブリテン島、ブーゲンビル島、ソロモン諸島の攻略を検討している。

以上がこれまでの連合艦隊の活躍である。

さて次にこの小説の大日本帝國海軍連合艦隊の建艦計画について説明する。

まず空母について説明する。

重装甲空母大鳳級

全長280メートル

最大幅58メートル

速力35ノット

高角砲100ミリ速射砲単装10基10門

噴進砲13センチ20連装4基

対空機銃40ミリ4連装40基160門

搭載機110機

艦上戦闘機陣風40機

艦上攻撃機流星40機

艦上偵察機彩雲10機

早期警戒機極星10機

攻撃ヘリ5機

対潜ヘリ5機

同型艦・葛城、天城、阿蘇、生駒、笠置

シリンドリカル・バウを装備。

アングドデッキ及び蒸気カタパルトを装備。

甲板に95ミリのCNC甲板を敷き詰めている。

昭和18年の正月には完成を予定している。

まあそれ以外はそれといった艦はない。

以上がここまでの連合艦隊の動向などである。

（後書きコーナー）

作者

「さあ、ついに始まりました。」

作者

「艦魂さんいらっしゃいんです。」

早紀

「なに騒いでるのよ作者。」

そう言いながら作者に飛び膝蹴りを炸裂させる。

作者

「グハッ！！！」

作者

「なにするんですか！！早紀様。」

亜由美

「何をおっぱじめるつもりだ。作者。」

喜恵

「教えて下さい。」

作者

「それではお教えしよう。」

作者

「艦魂さんいらっしやういとは極上艦魂会に所属する先生方の艦魂をお呼びして楽しくしようという企画です。」早紀

「ふん。ひまなのね。」

作者

「早紀様。早紀様が何かしろと言ったから企画したのに酷いです。」

早紀

「男がギャーギャーギャー言うな。」

作者

「はい！！！！申し訳ありません。ですから何もしないでください。」

「

早紀

「まあ確かに私が言ったからね。その行動力には感心するわね。」

亜由美

「よくやった。大儀であつた。」

喜恵

「やりましたね。作者さん。」

作者

「ありがとうございます。いやゝ。嬉しいですね。こんなに褒めてもらえるとは。」

早紀

「ピキッ」

作者

「!？」

喜恵

「何か変な音が聞こえたような……………」

早紀

「ちよつと亜由美。」

亜由美

「何？姉さん。」

早紀

「例のやつ頂戴。」

亜由美

「はい。どうぞ。」

早紀

「フフフ。これで奴は私の奴隷に」

作者

「あのゝ。何をしてるんですか？」

早紀

「フフフ。」

作者

「……………。怖いです。」

????

「なんなら早紀と一緒にいじめてあげようか？」

作者

「!?!?」

作者

「この声はエリーゼ様のお声っ!?!?!」

作者

「助けてください。」

フルマラソンを完走出来そうな勢いで走っていった。

早紀

「フッフ。これこそが私の秘密兵器。『エリーゼ声発生機』」

喜恵

「どうしたの？それ。」

亜由美

「昨日テレビみてたらタカタの社長さんが紹介してた。」

喜恵

「！？タカタの社長さん？」

早紀

「8000円でご提供しますって言ってたから。」

喜恵

「それで買ったの？」

早紀

「まあね。」

亜由美

「あなたの貯金から買ったわ。」

喜恵

「うそ。」

早紀

「本当。」

亜由美

「まあこれがあれば。あやつを奴隷にすることも出来る。」

喜恵

「フッフ。奴隷。」

早紀

「喜恵も私達と手を組まない？」

喜恵

「組むっ!!!」

亜由美

「決まりだね。」

早紀

「あいつの奴隷は決まりね。」

こうして悪女3人による作者奴隷計画がスタートした。

第14話 大日本帝國海軍連合艦隊動向（後書き）

これにて説明などは終わりです。
もどります。

次回から話に

第15話 帝國陸軍の反乱（前書き）

帝國陸軍のクーデターが計画されていた!!!

第15話 帝國陸軍の反乱

昭和も18年に入ってまだ3日しかたっていない1月3日。

この日は大日本帝國にとっては忘れることの出来ない日になった。

帝國陸軍がクーデターを計画している。

この報告は当初、誤報だと思われた。

しかし情報の出所が鈴木商店という事になり、近衛を中心とする帝國政府は鈴木商店の大番頭の金子直吉と高畑誠一との秘密会談を行った。

昭和17年12月20日

帝國政府代表として

近衛文麿首相

豊田副武海相

栗林忠道陸相

特別に山本五十六連合艦隊司令長官も呼ばれた。

鈴木商店代表として

金子直吉大番頭

高畑誠一社長

なお、金子直吉大番頭とあるが要は会長職である。

豊田は実は両方の代表になっている。

かたや帝國政府の海相、かたや鈴木商店の豊田自動車の社長。

豊田自動車は、戦後に日本を代表する企業の『トヨタ自動車』の前身である。

「金子さん。その陸軍のクーデターはいつなんですか？」

近衛が金子に聞く。

「まあまあ。そう焦りなさんな。」

「この高畑が説明するわ。」

金子がそう言うと高畑が説明を始めた。

「それでは帝國陸軍のクーデターがいつ起こるかを言います。」

「昭和18年1月3日に帝國陸軍がクーデターを起こします。」

近衛、豊田、栗林、山本が息をのんだ。

「高畑くん。それは確実なんだね。」

山本が高畑に聞く。

「残念ながら山本さん。確実です。」

高畑が続ける。

「昭和18年1月3日には確実に帝國陸軍がクーデターを起こします。首謀者は牟田口廉也、山下奉文、海軍からも嶋田繁太郎が賛同し合計三人です。」

高畑の説明を受け、山本は絶句した。

陸軍だけでなく身内の海軍からも反逆者がたのた。

「もう一度聞く。高畑くん。間違いないのだな。」

山本が再度、確認の為に聞いた。

「確実に間違いありません。我が社の諜報力は戦前のシーメンス事件でお分かりのはずです。」

「まあ。確かにシーメンス事件では世話になったんだ。鈴木商店の

情報は正しいよ。」

近衛が宥めるように言った。

「わかりました。」

山本が諦めるように言った。

さてシーメンス事件はと言うと。

戦前にドイツのシーメンス社による海軍高官への大贈賄事件である。

この事件も鈴木商店の諜報活動により、極秘の内に解決された。

「そうと決れば第七独立機動艦隊に硫黄島に待機するよう連絡しなければな。」

山本が言った。

「長官。なぜ硫黄島なんですか？」

豊田が聞く。

「わからんか？反乱軍が行動を起こすとなれば帝都で行動を起こすに決まっている。だから第七独立機動艦隊を硫黄島に待機させておいて反乱軍が行動を起こしたらすぐさま東京湾に向かわせる。そう考えれば硫黄島に待機させるほうがいいだろう。」

山本は笑いながら言った。

「最後にじゃが。これも言わないといけないな。」

金子が最後に言った事は他のものを啞然とさせることだった。

「陛下を守るべき近衛師団もクーデターに加担する恐れがある。」

この金子の言葉を一同は理解できなかった……………

〈後書きコーナー〉

作者

「やりました!!!」

作者

「第二回艦魂さんいらっしや〜い」

早紀

「テンション高いわね。作者。」

作者

「早紀様。愛してまゐります。」

早紀

「死ねえ……!!!!!!」

ドグワアアアアアン

早紀

「亜由美、喜恵。一斉砲撃!!!!!!」

亜由美、喜恵

「了解!!!!!!」

早紀

「由香（大和改）、綾夏（武蔵改）、理華（信濃改）。全航空機の全力出撃!!!!!!」

由香、綾夏、理華

「了解!!!!!!」

作者

「や……めて……く……ださ……い……」

一同

「問答無用！！！！！！死ねえ！！！！！！」

作者

「ギャーーーーー」

早紀

「ふっ！！！！馬鹿作者めっ」

亜由美

「もう復活するな。」

喜恵

「奴隷になるなら復活してもいいですよ。」

作者

「奴隷にでも何でもなりますからもう何もしないでください。」

早紀

「わかったわ。じゃあこれにサインして。」

作者

「………………。これって人権を無視した内容だね。」

亜由美

「そんな事ない。」

喜恵

「最低限の人権があります。」

作者

「だってこれじゃあ。一生奴隷になれって事じゃないか。」

早紀

「文句あり？」

作者

「うっ………………。何もありません。」

喜恵

「じゃあサイン。」

作者

「はい。」

こうして作者は悪女達の奴隷になった。

早紀

「ところで、奴隷。」

作者

「はい。何か御用でしょうか？早紀女王陛下様。」

早紀

「草薙とエリーゼに謝らないといけないんじゃないの？」

作者

「あつ。そうでした。」

作者

「草薙先生。エリーゼ様。申し訳ありませんでした。あれは書いてる途中で思いついたので、確かめをせずに書いたので、あのような間違いを侵してしまいました。申し訳ありませんでした。しかし修正はしません。あのままの方が話的に面白いですから……………」

亜由美

「そんなに急いで書かなくて良かったのに」

喜恵

「そうですよ。急いで書いて間違いが多いより、ゆっくり書いて間違いが無いほうがいいですよ。」

作者

「ありがとうございます。亜由美女王陛下様、喜恵女王陛下様。」

早紀

「それじゃあ。次回から他の艦魂が出てくるのね。」

作者

「はい。艦魂を出してもいいと言う先生がいたらメッセージを送ってください。」

早紀

「そんな事なくても勝手に書いて投稿したらいいんじゃないの？」

作者

「そんな事言っても早紀女王陛下様。初めて書くんですからの先生の艦魂を出すか悩むんですよ。」

亜由美

「優柔不断。」

作者

「申し訳ありません。亜由美女王陛下様。」

喜恵

「まあ。仕方ないですね。それでどうするの。」

作者

「最初にメッセージを送ってもらった先生の艦魂を出します。それからその後の順番に送ってもらった先生方の艦魂を順番に出します。」

亜由美

「回りくどいわね。」

作者

「申し訳ありません。」

早紀

「すごく。オープンな企画ね。」

作者

「はい。早紀女王陛下様。オープンな企画です。」

喜恵

「こんな事なくても直にメッセージ送ったら良いじゃないですか？」

作者

「はい。確かにそうですが。このような開かれたようにすれば。読者の皆様も楽しんで貰えますから。」

早紀

「そつね。頑張つてよ。」

作者

「わかりました。早紀女王陛下様の為なら何でも致します。」

早紀

「まあ頑張きなさい。我が奴隷。」

さて先生方にご協力お願いします。

どの先生方の艦魂もいいものばかりですから、すごく悩むんですね。
メッセージの届いた順番に登場させますのでご協力お願いします。

第15話 帝國陸軍の反乱（後書き）

今回は1・3事件発覚編でした。
事件勃発編。お楽しみに。

次回。1・3

第16話 1・3事件勃発（前書き）

長いです。

第16話 1・3事件勃発

昭和18年1月3日は午前2時から雪だった。

午前3時には雪は激しくなり、間もなく、視界が利かなくなった。

その中で、麻布歩兵第一連隊の衛門から二台の黒のジムジンが、栗原中尉たちに見送られて、出発した。

目標は大蔵大臣高橋是清の命だった。

午前3時30分には麻布歩兵第二、第五、第八、機関銃隊の将兵530名が桜田門の警視庁前に到着した。

ただちに正面玄関はおろか建物の出入口すべてに向かって機関銃が備えられ、小銃分隊が配備された。

そうしておいて、野中大尉は庁内で特別警備隊長岡崎英城に決起の趣旨を読み上げ、警視庁明け渡しと、警視総監への面会を強要した。

岡崎警備隊長は、毅然として拒絶したが、機関銃の前に折れた。

ただちに野中たちは警視庁内に乱入、警視総監の姿を求めた………
…。

しかし、警視總監は警視庁には居なかった。

それだけではない。

高橋是清蔵相も居なかった。

その後も海軍省、陸軍省に押し入った近衛師団も各大臣が居ない事に気付く。

各大臣及び警視總監は何処に消えたか？

実は全員、横須賀鎮守府に居たのだ。

鈴木商店の情報提供により前日に横須賀鎮守府に集まっていたのだ。
横須賀鎮守府には海軍陸戦隊が20式重戦車を配備して警備を行っていた。

「陛下。このような場所ですがおくつろぎ下さい。」

「いや。そのような気は使うでない。」

天皇裕仁は答えた。

「しかし。朕を守るべき近衛師団までもが反乱に賛同するとは……
……情けない。」

天皇裕仁は深くため息をはいた。

「御上」

山本が天皇裕仁に言った。

「なんだ？山本。」

天皇裕仁は聞いた。

「この陸軍の反乱は必ずや海軍が解決させます。」

「うむ。朕の信用出来るのは海軍だけだ。頼んだぞ。山本。」

「はっ。必ずや。」

山本は最敬礼をした。

「失礼します。」

伝令が部屋に入ってきた。

「山本長官にです。」

伝令が山本に紙を渡した。

「うむ。」

山本は一息吸うと。

「徒党を組んで陛下に齒向かう輩に天誅を下す。午前6時に陸軍に
対して宣戦布告だっ！！！！！！！」

帝國陸軍VS帝國海軍。

今まさに、ちょっとした内戦が始まろうとしていた。

「やれやれ。遂に陸軍の輩が、やらかしたな。」

第七独立機動艦隊司令長官の小沢が嘆いている。

「しかたありません。こうなれば陸軍の輩に一泡吹かせてやりま
しょう。」

有賀艦長が小沢に言った。

「まあ有賀君の言う通りです。陸軍の輩はガツンとやってやらないとわかりませんからね。」

草鹿も有賀に賛同した。

「それもそうだ。」

小沢が笑いながら言った。

と、そこへ。

「報告です。『富嶽戦略空軍』が帝都上空に差し掛かりました。」

「うむ。それでは作戦を開始する。」

「了解。」

各員が作戦の準備に入る。

さて『富嶽戦略空軍』というのは満州北満小興安嶺の麓にある日本海軍秘密航空基地において、設立された空軍である。

さて『超重爆撃機富嶽』の概要はというと。

最大速度750キロ

実用上昇限度21500メートル

武装35ミリ機関砲15門

88ミリ4連装ロケット弾発射機4基

搭載爆弾55トン

航続距離29500キロ

以上が富嶽の概要である。

この富嶽は史実にも中島航空機の中島知久平が提唱したZ機計画でその計画が残されている。

史実では4発の爆撃機でも開発できなかったのに6発の爆撃機だから相手にされないはずである。

この世界では中島知久平が山本に請願書を提出し山本が日本の技術力を結集してでも完成させると言った為に開発が始められた。

そのために満州で中島航空機の巨大生産工場が造られた。

そこで完全オートメーション化により大量生産されている。

富嶽は従来の爆撃機の他に爆弾を搭載せずに機関砲を200門搭載した掃射機バージョンと機関砲10門だけの武装で1個大隊と20式重戦車2台を搭載出来る輸送機バージョンの合計3バージョンがある。

さて話がズレたが帝國陸軍鎮圧計画を説明する。

まず降伏勧告のビラを搭載した富嶽にビラを投下させて陸軍に降伏を促す。

もし降伏しない場合は6時の宣戦布告後に富嶽掃射機バージョンと大和改、武蔵改、信濃改の搭載している攻撃ヘリの共同で攻撃を開始。

その後横須賀鎮守府付近に強襲揚陸艦で上陸を開始。

横須賀鎮守府陸戦隊と共同で帝都奪還を目指す。

その間、第七独立機動艦隊の各艦は帝都付近に徹底した艦砲射撃を行う。

実はこれは帝都近代化計画に組み込まれたものである。

帝都を近代化させる為の解体作業を艦砲射撃でやってしまおうという事である。

なんとも豪勢だが天皇陛下がお考えになられた事なので反対は出来ない。

なお、帝都都民は年末には全員立ち退きが完了していた。

近代化に伴い、全ての資金を政府が負担するので都民は期待を胸に立ち退いていった。

「御上。時間ですが陸軍は降伏しません。攻撃のご命令を。」

近衛が天皇裕仁に聞いている。

「うむ。朕は降伏を期待していたが無理なようだな……。よし。断腸の思いだが帝國陸軍に対して全面的な攻撃を許可する。」

天皇裕仁が言った。

「はつ。了解しました。山本君。攻撃許可がおりた。頼んだぞ。」

「了解いたしました。御上の為にも陸軍の輩を鎮圧させてみせます。」

山本はそう言うで一息置いて。

「第七独立機動艦隊に命令。帝國陸軍を完全撃滅せよ。」

第七独立機動艦隊旗艦大和。

「山本長官から命令が届いた。大和改、武蔵改、信濃改に命令だ。攻撃へりを出撃させよ。」

「了解。」

小沢が言い、参謀が復唱していく。

「よし。強襲揚陸艦は横須賀鎮守府に向かい、その地点で揚陸を開始せよ。それ以外の艦は帝都艦砲射撃を行う。」

「了解。」

小沢が命令を言い終わると大和（早紀）が話し掛けてきた。

「本当に帝都に艦砲射撃するの？」

「なんだ？今更遅いぞ。大和。」

小沢が笑いながら言った。

「まあね。仕方ないわね。」

大和（早紀）も笑った。

もうこの後は言うまでもない。

その後、富嶽掃射機バージョンと攻撃ヘリの攻撃により、反乱軍の半数が戦死。

横須賀鎮守府に揚陸した第七独立機動艦隊特別陸戦隊と横須賀鎮守府陸戦隊は共同で帝都に進撃。

第七独立機動艦隊の艦砲射撃で廃墟となった帝都に入った。

そこで反乱軍の残存と激突したが海軍側の圧勝。

被害は皆無だった。

この戦闘でクーデター首謀者の牟田口廉也、山下奉文、嶋田繁太郎の3名は戦死した。

これにより、

クーデター参加者全員死亡により1・3事件は幕を閉じた。

（後書きコーナー）

作者

「第三回艦魂さんいらっしやい。」

早紀

「えらく威勢がいいわね奴隷。」

作者

「あつ。早紀女王陛下様。何とですね、今回は凜様、京子様、エリ―ゼ様が来られるというのです。」

亜由美

「そつなの？奴隷。」

喜恵

「本当に？」

作者

「もちろんでございます。亜由美女王陛下様、喜恵女王陛下様。」

早紀

「で。いつ来るのかな？奴隷。」

作者

「そろそろ来られると思いますが……………」。

亜由美

「何かきそつな感じがする。」

作者

「何がくるんですか？」

ドグワアアアアン!!!!!!!!!!

作者

「!?!」

宇宙戦艦紀伊登場。

凜

「はじめまして。」

京子

「じゃまするぞい。」

エリーゼ

「初登場。」

早紀

「あなたが草薙の所の艦魂ね。」

亜由美

「これからよろしく。」

喜恵

「はじめまして。これからよろしくお願いします。」

凜

「あなたが早紀ね。」

早紀

「そうよ。」

凜

「よろしく。」

早紀

「よろしく。」

京子

「うむうむ。また新たな艦魂の友が増えたのう。」

亜由美

「京子。」

京子

「なんじゃ。」

亜由美

「よろしく。」

京子

「おお。こちらこそ。よろしくじゃ。」

喜恵

「エ、エリーゼさん」

エリーゼ

「何？」

喜恵

「これからよろしくお願いします。」

エリーゼ

「フフ。よろしく。」

早紀

「ねえ。凜、京子、エリーゼ。」

凜

「何？」

京子

「なんじゃ？」

エリーゼ

「何か？」

早紀

「ここにあいつを奴隷に出来る契約書があるわ。」

京子

「まさか。おぬし……………」

早紀

「そう。そのまさか。これにサインさせてあなた達もあいつを奴隷にしちゃいなさいよ。」

エリーゼ

「フフフ。面白い。」

凜

「いいわね。」

京子

「それもいいのお。」

早紀

「ね。いいでしょ。さあ、そう決まったなら早速サインさせましょう。」

喜恵

「どこいったの？奴隷さんは」

亜由美

「さあ。」

作者

「フフフ。私はここだ。」

早紀

「ん？」

作者

「もうこれ以上奴隷になってたまるか。」

喜恵

「奴隷さん。手に拳銃を持ってどうするんですか？」

作者

「フフフ。このダーティーハリー愛用の『44マグナム』で、その

契約書を射ちぬいてやる。」

早紀

「私はダーティーハリーよりもダイハードの方がいい。」

凜

「私はリーサルウェポンがいい。」

京子

「なんじゃ。私はターミネーターの方がよいの。」

エリーゼ

「あぶない刑事の方がいい。」

早紀

「そうね。」

作者

「特攻野郎Aチームもいいですよね。」

凜

「そうよね。特攻野郎Aチームもいいわよね。」

京子

「ハンニバル大佐の作戦が面白いのぉ。」

エリーゼ

「モンキーもなかなか。」

早紀

「フェイスマンもいいわよ。」

喜恵

「コングさんもいいですよ。」

エリーゼ

「そうね。」

作者

「ちよつと待ったあゝ」

早紀

「何？」

作者

「なぜ早紀女王陛下様達がダーティーハリーやリーサルウェポンやターミネーターや特攻野郎Aチームを知ってるんですか？」

一同

「気にしない。気にしない。」

作者

「………………。まあいいです。それじゃあその契約書を灰にします。」

早紀

「出来るの？」

作者

「弓道部の意地です。」

凜

「じゃあ。射ってみたら？」

作者

「もちろんです。覚悟！！！！」

カチッ！！！！！

作者

「！？」

亜由美

「捜し物はこれかな？」

そう言いながら弾を足元へ落とす。

作者

「なぜ……。亜由美女王陛下様が弾を。」

エリーゼ

「あなたの負けよ。」

作者

「！？なぜエリーゼ様はプレデター（米陸軍歩兵用対戦車ロケット）とRPG7（旧ソ連対戦車ロケット）を持っているんですか？」

作者

「早紀女王陛下様も何故にM63機関銃（米陸軍歩兵用機関銃）を」

早紀

「亜由美女王陛下様と喜恵女王陛下様はM4A1+M203（M16 M4シリーズのハンドガード下面にM203グレネードランチャーの装備を可能にした自動小銃）を持っているんですか？」

早紀

「京子様と凜様はM4A1（米軍全般に配備されている騎兵銃）を持っ……て。」

一同

「死ねえええ」

作者

「お許しを」

作者

「グスッ」

エリーゼ

「泣かないでサインしましょうね。」

京子

「サイン。サイン。」

凜

「2人の笑顔がいつもと違う。」

作者

「うっ。すいませんでした。」

サインを終えた作者。

エリーゼ

「いいわよ。許してあげるわ。奴隷。」

京子

「奴隷。遠慮するでない。」

凜

「まあ。奴隷がいるってのはいい気分ね。」

作者

「凜女王陛下様、京子女王陛下様、エリーゼ女王陛下様。これから
よろしく願います。グスッ」

早紀

「そろそろ時間じゃないの?」

凜

「あらっ?本当だっ!!!!!!京子、エリーゼ。帰るわよ。」

京子

「はいはい。」

エリーゼ

「そうだな。」

喜恵

「また来て下さいね。」

亜由美

「また会えると信じているぞ。」

凜

「もちろんよ。」

京子

「さらばである……！」

エリーゼ

「また会おう。」

早紀

「ちよつと。忘れ物よ。」

凜

「ああ。大事な契約書。」

早紀

「それは絶対に無くさないでね。」

エリーゼ

「任されよ。」

京子

「それでは、次こそさらばだ」

宇宙戦艦紀伊ワープ。

早紀

「さて。これで他の艦魂との交流が始まったわね。」

亜由美

「奴隷。次回は誰を呼ぶの？」

作者

「次回は零戦先生の艦魂をお呼びします。」

早紀

「ふん。頑張るのよ。」

作者

「イエス・マイロード。」

草薙先生如何でしたでしょうか？

ご感想お待ちしております。

第16話 1・3事件勃発（後書き）

本編は次回陸軍反乱の後始末（？）をします。
Iは零戦先生の艦魂をお呼びします。

後書きコーナ

第17話 第三の艦隊（前書き）

短いです。

第17話 第三の艦隊

昭和18年1月4日。

1・3事件から一夜明けた帝都は淡々としていた。

第七独立機動艦隊が徹底的な艦砲射撃を行ったおかげで瓦礫の山となっていた。

このような状況にあっても帝都はすでに復興に向けて作業が始まっていた。

帝都の完全復興には2年を予定していた。

しかしおかしな状況である。

皇居と国会議事堂、日本武道館を除いて瓦礫の山となっているのだ。

そして山本は皇居に呼ばれていた。

「山本。今回は大義であった。」

天皇裕仁が讃えている。

「御上。ありがとうございます。」

山本が照れている。

「うむ。よくやった。」

天皇裕仁が続ける。

「しかし。山本に質問があるのだが。」

「はっ。なんでしょうか？」

山本が尋ねる。

「先日、陸軍反乱軍を壊滅させた第七独立機動艦隊とはなんだ？」

天皇裕仁が答える。

「了解しました。それでは第七独立機動艦隊について説明します。」

山本は第七独立機動艦隊について説明を始めた。

「そのような艦隊が存在していたとは……………」

天皇裕仁が考え込む。

「……………」

山本が緊張した面持ちで返事を待っている。

「では。セイロン島を占領し、英東洋艦隊を壊滅させたのも、第七独立機動艦隊なのだな。」

天皇裕仁が言った。

「はい。そうです。」

山本が緊張しながら答えた。

「そうか……………。では小沢も呼んで話を聞きたいな。」

天皇裕仁が言った。

「了解いたしました。」

山本はそう言うと小沢に連絡を入れた。

その後、天皇裕仁と山本、小沢の3人で数々の事が決められた。

・第七独立機動艦隊は緊急時の場合のみ、天皇及び連合艦隊司令長官の指揮下に入る。

・通常時は第七独立機動艦隊司令長官の独自判断に任せる。

・第七独立機動艦隊は帝國臣民には公表する。

などが、決定した。

この他に近衛首相を呼んで、帝國全体の改革について話し合いをした。

帝國の改革については基本的に戦後の話なので第2部で語らせてもらう。

ここまで言ってしまったから全て話すが、今読んで頂いているこの小説と、これが完結した後に書き始める、戦後からの日本の歩みを描く、2部構成になっております。

ですので、この小説が完結しても、第1部が完結しただけで、第2部がすぐに(？)始まりますので、よろしく願います。

さて、話がそれたので話を戻したい。

皇居で、話が行われた翌日の1月5日。

帝國中が驚いた。

連合艦隊、連邦商路護衛艦隊の他に、第七独立機動艦隊と言う第三の艦隊が存在したからである。

連邦商路護衛艦隊は鈴木商店の私設艦隊の為、設立前から国民に知れ渡っていたのである。

第七独立機動艦隊は日本国民に拍手で受け入れられた。

アメリカ合衆国との、一大戦争の真っ只中にあるのだから、当然のことである。

そして、1月6日。

第七独立機動艦隊は、ブーゲンビル島及びガダルカナル島及びツラギ島からなる、ソロモン諸島占領の為に硫黄島の南西185キロ地点にいた。

その同じ時間帯に、新生米太平洋艦隊はハワイ真珠湾を出港した。

目的地は……………

ソロモン諸島。

第17話 第三の艦隊（後書き）

皆様（？）申し訳ありません。

零戦先生の艦

魂を出す予定でしたが。

次回にしていたきたいと

思います。

零戦先生。

申し訳ありま

せんでした。

第18話 珊瑚海の悲劇前編

昭和18年1月10日。

第七独立機動艦隊はラバウルにいた。

南太平洋の制海権を取り、オーストラリア及び、ニュージーランドの連合国離反を狙う日本には、ソロモン諸島に居座るアメリカ軍は厄介な存在であった。

その為、艦隊をソロモン諸島に派遣し、ソロモン諸島を占領しようと考えたのである。

そのついでに、太平洋艦隊を壊滅させれば、一石二鳥であると考えたのである。

しかし、そこで問題が発生した。

連合艦隊のどの艦を使っても、そのような余裕を持って作戦を行える艦隊がなかったのである。

そこへ、突然のように第七独立機動艦隊という、第三の艦隊が存在したのだ。

このチャンスに海軍軍令部は逃さなかった。

この艦隊にソロモン諸島占領作戦をやってもらおうと考えたのだ。

しかし、第七独立機動艦隊に命令出来るのは、緊急時の場合のみに天皇と連合艦隊司令長官が命令出来るのだ。

その為、この作戦は白紙になるかと思われたが、小沢がこの作戦に出撃する事に承諾。

そして今の状況に至る。

「彩雲からの報告はまだないか？」

小沢が草鹿に聞く。

「今のところはまだ報告はありません。」

草鹿が残念そうに言う。

「そうか。仕方ないな。」

小沢が慰めるように言う。

「早く見つけて欲しいわよ。」

「まあ。そう言うな大和。」

大和（早紀）が不機嫌そうに言う。

「早く敵を叩き潰したいのに見つかからないなんて……………」

「わかったわかった。そこまで言うなら、敵に有りったけの砲弾を打ち込んでやれ。」

小沢が言う。

「当たり前よ。弾が無くなれば体当たりしてでも敵を沈めてやるわ。ねっ有賀。」

大和（早紀）が有賀に同意を求める。

「んっ？何が？」

有賀は話を聞いてなかったみたいだ。

「有賀。人の話を聞けい。」

大和（早紀）が怒る。

「人の話って。お前人間じゃないだろ。」

有賀が言う。

「なっ！！！！！」

大和（早紀）が顔を赤くする。

この2人の会話に艦橋は笑いに包まれた。

この前の1・3事件以来、艦橋のスタッフ全員に艦魂が見えるようになった。

そこへ。

「報告です。武蔵改の彩雲偵察機からの連絡です。『我ニューギニア島の西340キロの地点に太平洋艦隊を発見。現在、補給作業中。』です。」

待ち望んだ連絡が届いた。

「よし。太平洋艦隊攻撃の為、出港する。」

小沢が言った。

「了解。」

「ニューギニア島近辺を哨戒していた、潜水戦隊に太平洋艦隊攻撃命令を出せ。」

小沢が続ける。

「了解しました。」

さて、太平洋艦隊攻撃命令を受けた潜水戦隊は早々と準備を済ませ、太平洋艦隊を捕捉していた。

「うようよいるぞ。」

伊一 艦長の橋本金伍大佐が言った。

本来、大佐という階級ならすでに潜水艦の艦長は卒業してワンランク上の役職に着いているはずだが、未曾有（みぞうと読む。何処かの総理みたいにみぞゆうと読まないように……）の潜水艦配備の連絡に自らこの潜水艦の艦長に志願したのである。

この他に橋本は自分と仲のいい者を呼び、各役職につかせている。

「艦長。どうしますか？」

砲雷長の久保田が聞く。

「もちろん雷撃するさ。」

橋本が言った。

「よし。一番から三番まで魚雷発射用意。」

「一番から三番、魚雷発射用意。」

砲雷長が復唱する。

「てっ！！！！」

前部の6門ある発射管から3本が飛び出していった。

敵艦隊はまだ気付いてないみたいだ。

そこへ3本が3隻の駆逐艦に命中した。

凄まじい水柱があがるとともに衝撃で、弾薬庫が誘爆。

敵駆逐艦は横倒しとなり、そのまま沈没した。

絵に描いたような轟沈である。

ほかの護衛艦が事態に気付き、反撃態勢をとるまでに数十秒の間が
あいた。

目標のタンカーは、ちょうど護衛艦の隙間に位置し、しかも止まっ
ていたので、照準は容易であり、橋本は残り3本の発射を命じた。

3本の魚雷は護衛艦の間をすり抜け、不運なタンカー3隻の横っ腹
に突き刺さった。

タンカーは3隻共に1万トン級で、航空ガソリンを満載していたか
らたまったものじゃない。

たちまち大爆発を起こし、紅蓮の炎が中天を焦がした。

「よし。」

橋本が喜んでいる。

「よかったです。これで一安心です。」

伊一一（舞）が橋本に言っている。

「そうだな。一。ん?.....」

橋本が黙り込んだ。

「どうしたの？艦長？」

一（舞）が聞く。

「喜べ。――！！！！！！お前の妹達が出来たぞ！！！！！！もう数えきれない！！！！！！」

橋本が興奮気味に言う。

「あの子たち、やってくれたんだ。」

一（舞）が嬉しそうに言う。

この時、舞の妹である伊一 二（乱）、伊一 三（華）が全門一斉発射を行い、全弾命中。

タンカー12隻を撃沈する戦果を上げたのである。

これを 一（舞）と合計すると、駆逐艦3隻、タンカー15隻を撃沈する戦果を潜水戦隊は出したのだ。

この攻撃により、アメリカ太平洋艦隊は戦う前から一方的にタンカーを壊滅させられた。

アメリカ太平洋艦隊旗艦モンタナ

「くそっ！！！！ジャップめっ！！！！」

アメリカ太平洋艦隊司令長官のウィリアム・ハルゼーは怒り狂っていた。

何せ、突然の潜水艦の雷撃により、輸送船団が壊滅したのだ。

ハルゼーでなくても怒り狂ったはずだ。

「敵の本隊を捜せっ！！！！絶対に本隊がいるはずだ」

ハルゼーの勘は当たっていた。

事実、あと4時間程で両艦隊は激突するのであった……………

「後書きコーナー」

作者

「艦魂さんいらっしやい。」

早紀

「で。奴隷。今回はどの艦魂をよぶのだ？」

作者

「今回は零戦先生の艦魂をお呼びします。」

亜由美

「奴隷。早く呼べ。」

作者

「はいっ！……！分かりました。それではお呼びします。瑞鶴様と金剛様です。」

瑞鶴

「じゃまするよ。」

金剛

「失礼する。」

作者

「はじめまして。瑞鶴様、金剛様。」

早紀

「これからよろしく。」

亜由美

「まあ。仲良くしよう。」

喜恵

「喜恵と言います。よろしくお願いします。」

瑞鶴

「よろしく。」

金剛

「礼儀正しくてよいの。」

早紀

「よろしくね。瑞鶴、金剛。」

瑞鶴

「こちらこそ。よろしく」

金剛

「こちらこそ。」

早紀

「ねえ。瑞鶴に金剛。」

瑞鶴

「何？」

早紀

「これ。なんだかわかる。」

そう言いながら紙を出す。

金剛

「もしや。それは、作者を奴隷に出来る紙ではないのか？」

早紀

「そうよ。これであいつを奴隷にしましょう。」

亜由美

「またしても、姉が他の艦魂に作者を奴隷にさせようとしている。」

喜恵

「姉さんは007さんを全ての艦魂の奴隷にしよう計画しているわ。」

「

亜由美

「姉の考えはわからん。」

喜恵

「まあ、この後の展開を期待しましょう。」

瑞鶴

「面白い。奴隷に出来るなら奴隷にしておおう。」

金剛

「面白い。」

早紀

「ねっ。早速あいつを呼んで、調印式を済ませてしましましょう。」

瑞鶴

「早い方がいいからね。」

金剛

「確かに。」

早紀

「さて。奴隷は何処へ行つたかな？」

作者

「ハハハ。私はここだ。」

金剛

「おいおい。なんであんな所にいるんだ？」

作者

「よくぞ、聞いてくれた。金剛様。これを見よ。」

大海原を疾走するアメリカ製の艦隊。

早紀

「亜由美っ！！！！解説しなさい。」

亜由美

「いま奴隷が乗っているのは、戦艦ミズーリね。その両サイドには原子力空母のジョージ・ワシントンとカールビンソン。そのまたよこにエイブラハムリンカーンにステニス。その周囲にタイコンデロガ級が30隻、アーレイバーク級が90隻。その上空にはF22とF35が各100機飛んでるわ。」

喜恵

「あんな未来の艦隊が相手じゃ、手も足も出ないじゃない。凜がいればよかったのに。」

早紀

「亜由美。全砲門一斉掃射。」

亜由美

「了解。」

主砲を発射する亜由美。

金剛

「これが51センチ砲の砲撃……………」

喜恵

「でも。私達の砲弾って効くのかな……………」

早紀

「フフフ。普通の砲弾じゃないのよね。」

喜恵

「？」

バシユツツッ！！！！！

喜恵

「なっ！？」

瑞鶴

「！？」

金剛

「なんてことだ……………」

早紀

「小型核砲弾。」

亜由美

「タカタの社長さんのテレビショッピングでうってた。」

作者

「なんでこんなことに……………」

早紀

「さあ。調印式よ。」

瑞鶴

「早紀。」

早紀

「何？」

金剛

「もういいではないか。」

早紀

「と言うと？」

金剛

「こんな大和魂を持った奴は久しぶりに見た。」

瑞鶴

「だから許してやろう。」

作者

「瑞鶴様、金剛様万歳¥（＾Ｏ＾）／」

早紀

「それじゃあ、今回は許してあげる。」

作者

「ありがとうございます。早紀女王陛下様。」

瑞鶴

「それじゃあ、帰るわ」

金剛

「失礼する。」

喜恵

「あら。もういない……………」

亜由美

「疲れたんだろう。」

作者

「さて、零戦先生。こんなになりましたが、如何でしたしょうか？何か少し変わってしまいましたか………」

作者

「ご感想お待ちしております。」

第18話 珊瑚海の悲劇前編（後書き）

次回、第七独立機動艦隊とアメリカ太平洋艦隊との艦隊決戦。
ご期待を

第19話 珊瑚海の悲劇後編（前書き）

ユニーク数が1万を越えました。
ざいます。

ありがとうございます

第19話 珊瑚海の悲劇後編

昭和18年1月10日午後6時。

第七独立機動艦隊の水上レーダーが、アメリカ太平洋艦隊を捉えた。

「よし。機動群と輸送船団は戦域を離脱せよ。」

小沢が言った。

「艦長。敵の実力は未知数だ。うまいこと戦ってくれよ。」

小沢が有賀に言う。

「お任せください。」

有賀が答える。

「艦長。敵艦隊を射程内に捉えました。」

「わかった。5万メートルになったら砲撃を始める。」

「了解しました。」

砲術長が答える。

ここで言う大和級の射程は5万5000メートルを誇る。

『三式射撃レーダー』を装備しているので、最大射程でも初弾命

中が出来るのである。

「覚悟しろ。アメリカ軍。」

大和（早紀）が言った。

アメリカ太平洋艦隊旗艦モンタナ。

「長官。ジャップを見つけました。」

レーダー係が言う。

「よし。砲戦用意、目標、前方の日本戦艦。」

ハルゼーが命令した。

その時、先頭の敵艦……見たこともない巨艦の真つ黒なシルエットがぱあっと、目もくらむ炎を発した。

この時日本艦隊も単縦陣を形成、敵艦に対して正体していたので、前部の6門しか使えない。

したがって、6つの砲火が閃いた。

「敵が撃ってきました。」

見張り員が叫ぶ。

「なんと、射程5万です!!!!」

実は5万5000メートルから可能なのだが、ハルゼーは知らなかった。

敵からの砲弾がモンタナの右舷にいたオハイオに命中した。

ドグワアアアアン

目を背けたくなりそうな炎が上がる。

恐ろしい炎柱が消えると、そこには……………

オハイオの姿はなかった。

オハイオ轟沈。

「なっ……………なんて……………なんて奴だ。」

ハルゼーが言った。

「オハイオが、轟沈？」

今の状況を認めたくない艦長が嘆く。

「機関、最大戦速。針路45に変針、敵に対して平行針路をとる。」

ハルゼーが命令する。

生き残ったモンタナ、アイオワ、ニュージャージー、ミズーリ、ウイスコンシン、ノースカロライナ、ワシントンがいつせいに45度に変針した。

変針がおわると、再び単縦陣に戻る。

そこへ、次の砲撃がやって来て、今度はワシントンの艦橋に直撃し機関室も壊滅した為、ワシントンは漂流を始めた。

「糞っ！！！！ジャップめ。」

ハルゼーが言った。

そこへ、待ち望んだ報告が来た。

「射程距離に入りました。」

航海長が報告した。

「よし。あのモンスターにぶちこんでやれっ！！！！！」

ハルゼーが叫ぶ。

「イエッサー」

砲術長が答えた。

ハルゼーの怒りが砲弾に込められ敵艦に向かっていく。

50余りの砲弾が敵戦艦に命中したかと思うと、

ズガアアアアン

凄まじい音と共に砲弾が弾き飛ばされた。

「何っ？」

ハルゼーは我が目を疑った。

今、目の前にいる敵戦艦は50余りの砲弾を弾き飛ばした。

「突撃……………」

ハルゼーがつぶやく。

「はっ？」

艦長が聞く。

「突撃だっ！……！撃って撃って撃ちまくれっ！……！」

ハルゼーが怒り狂ったように言う。

「イ、イエッサー。」

艦長が答えた。

モンタナが速力を上げ始めたが、そこに。

ドガアアアアン

ノースカロライナが中央から真つ二つになりながら沈んでいった。

「糞っ！！！！ジャップめっ！！！！」

ハルゼーはやり場のない怒りを覚えた。

「艦長。機動群に命令だ。『航空機隊を出撃させ、敵艦隊を攻撃せよ』だ。」

「了解しました。」

艦長が答える。

「フフフ。さすがのモンスターも海空の両方からの攻撃には耐えられないだろう。」

ハルゼーは言った。

だが！！！！

「長官！！！！大変です。」

艦長が血相を変えて艦橋に飛び込んできた。

「どうしたんだ？艦長。」

「大変です。機動群の全空母の飛行甲板が大破したとの事です。」

「何っ？」

「しかも、それだけでなく、降伏勧告を受け入れて敵艦隊に降伏しました。」

艦長がそう言う。

「何だと！！！！私の許可なしに降伏したと！？」

ハルゼーは混乱した。

さて、ここでアメリカ空母群降伏の真相を語ると。

艦隊決戦の前に第七独立機動艦隊は機動群を輸送船団と共に離脱させたが、ただ単に離脱させたのではなかった。

敵も離脱させるであらう、機動群を大破させて、鹵獲するよう命令させたのだ。

そして敵機動群を発見した第七独立機動艦隊の機動群は航空攻撃を
決行。

陣風の対地ロケット弾と流星の対艦ロケット弾攻撃により、飛行甲
板は一瞬の内に大破炎上。

空母としての機能を失った。

そこへ、大和改、武蔵改、信濃改が到着。

降伏勧告を行うと、案の定降伏した。

これにより、第七独立機動艦隊はエセックス、ハンコック、フラン
クリン、キャボットを鹵獲する事に成功した。

「糞っ!!!!!!!!!!突撃だっ!!!!!!!!!!」

ハルゼーは命令した。

「了解しました。」

艦長が答えた。

ドグワアアアアアン

「今度は誰が沈んだ？」

もはやハルゼーにとっては、爆発音〓沈没が定着した。

「ウイスコンシンです。」

艦長が言った。

「糞っ！！！！！」

ハルゼーが言う。

「あのモンスターめっ！！！！！！あいつにダメージを与えられたのか？」

ハルゼーが聞く。

「いいえ。被害といえば、艦首部の火災位でしょうか……」

艦長が言う。

「艦長……」

「はい。長官何でしょうか？」

艦長が聞く。

「もう、無駄だな。」

「はい？」

艦長が理解できませんと言っ顔をする。

「降伏しよう。」

ハルゼーが落ち込みながら言う。

「……………了解しました。」

艦長が言った。

「敵艦隊に連絡だ。『我降伏の意思あり』だ。」

ハルゼーが言った。

「了解しました。」

海戦は終わった。

結果から言うと、アメリカ太平洋艦隊、全空母鹵獲。

戦艦モンタナ、アイオワ、ニュージャージー、ミズーリ、ワシントン鹵獲。

戦艦オハイオ、ウィスコンシン、ノースカロライナ沈没。

駆逐艦全滅。

巡洋艦は全て生き残り、ハルゼー以下、巡洋艦に乗り移りハワイへ

と帰還した。

第七独立機動艦隊の被害であるが、

大和・小破

武蔵、信濃・対潜ヘリ大破

以上が第七独立機動艦隊の被害である。

第19話 珊瑚海の悲劇後編（後書き）

如何でしたでしょうか？ 次回は海戦のその後を書きたいと思います。

第20話 南太平洋戦線の終結

昭和18年1月20日

第七独立機動艦隊は旅順港に帰還した。

1月10日に太平洋艦隊と砲撃を行い、見事にそれを撃破した第七独立機動艦隊はソロモン諸島に上陸を開始し、ブーゲンビル島及びガダルカナル島及びニューギニア島等の主要な島を占領した。

ソロモン諸島を占領し、アメリカとの連絡網を断たれたオーストラリア政府とニューギランド政府に対し、小沢は山本と近衛とのかねての計画通りに条件付き降伏の勧告を行った。

オーストラリアとニューギランドにあるアメリカ軍司令部は、当然のごとくこれを無視した。

しかし、アメリカとの連絡網を遮断された事実は隠しようもなく、このニュースは、一昼夜にして全世界を駆け巡ったのである。

このニュースを知ったルーズベルトは、ただちに連合国首脳と連絡を送り、動揺することがないよう注意を促した。

この時期、じつは連合国首脳のあいだには、たとえ国土の一部を占領さるようと、けっして降伏しないとの合意事項が交わされていた。

それをルーズベルトは、たんに確認したかっただけである。

ただし……

この連合国首脳の中に、オーストラリアとニュージーランドは含まれていなかった。

あくまでアメリカ・イギリス・フランス・オランダというヨーロッパ中心の欧米列強諸国で構成され、オーストラリアやニュージーランドは、旧大英帝國連邦の一員ということで、イギリス政府の下とみなされていたのである。

そこで英首相チャーチルは、オーストラリア政府に対し、焦土作戦を覚悟で敵の要求を無視せよと連絡してきた。

これにカチンときたオーストラリア政府が、一種のサボタージュを開始したのである。

しかも、もっと切実な状況に陥ったニュージーランド政府は、単独で帝國政府に条件付き講和を受け入れるむね、申し出てしまった。

その条件とは、あらゆる戦争責任を問わぬ事と、今次大戦における非武装中立を確約する事、民間ベースでの完全自由貿易を即時実施することだった。

国土占領もなく、政府解体もない。

なんとも敗戦国にとっては甘い条件である。

飛びつくのも無理はない。

ニュージーランド政府に講和を申し出された大日本帝國政府は判断

を御前会議に上梓してしまった。

そして、もともと避戦を望んでいた天皇の直裁で、講和が成立した。
この衝撃は巨大だった。

よもや覇権主義一辺倒だと思われていた大日本帝國がここまで譲歩した講和を呑むとは、どの国も思っていなかったのだ。

こうなってしまうと、親日傾向の強いインドが揺れはじめる。

日本が本気で、大東亜共栄圏構想を実施するつもりであることを、今回の講和で見せつけられたからだ。

占領ではなく同胞とするのは、共栄圏の基本である。

これにより、もともとから中立を宣言していたソ連などは、スターリンが猫撫で声ですりよってくる始末である。

かくして。

猛烈な阻止工作を展開した合衆国がいたにもかかわらず、昭和18年1月18日、オーストラリア政府とインド政府はニュージージランド同様の条件付き降伏を正式に受け入れた。

これにより、アメリカ軍は南太平洋の足掛かりを失うことになった。

「よお。小沢、草鹿。」

小沢と草鹿が港に着くと、山本が声を掛けた。

「長官。わざわざありがとうございます。」

草鹿が言う。

「今回はやはり長官ですね。」

小沢が言う。

「ああ、そうだ。近衛首相は、今や友邦となったオーストラリアやニューギランド、インドとの自由貿易の調整に奔走しているし。豊田はオーストラリアとニューギランドの海軍の整備を検討しているからな……」

山本が言う。

「長官はどうなんですか？」

小沢が聞いた。

「私は連合艦隊司令長官だから、連合艦隊の事を考えていればいいんだ。」

山本が笑いながら言った。

「それで長官。今回は何が目的で来たんですか？」

草鹿が聞いた。

「おお。そうだった。小沢に草鹿。これを見る。」

山本が右腕を挙げると海の向こうから4つの飛行物体が爆音と共に現れた。

くお知らせく

現在、攻撃ヘリコプター及び対潜ヘリコプターの改良型の名前を募集しています。

いい名前が思い付いたら連絡してください。

ご協力お願いします。

第20話 南太平洋戦線の終結（後書き）

次回、4つの飛行物体の正体が！？

第21話 日本航空機産業の底力

山本が右腕を挙げた方向を見ると黒い飛行物体が4つ、こちらに向かってきた。

「……………」

小沢が啞然としている。

「ジェット機？」

草鹿が言った。

「そうだ。草鹿。あの4つの航空機は現在の日本航空機産業の集大成だ。」

山本が言い切った。

「ジェット……機」

小沢が夢でも見ているかのようにつぶやいた。

キュイイイーーーーン

4つの真っ黒な航空機が滑走路に着陸した。
「それじゃあ、現物を見ようではないか。」

山本はそう言々と滑走路へと歩いていった。

「長官。行きましょう。」

草鹿が言った。

「ああ、そうだな。」

小沢はそう言うと、草鹿と滑走路へ向かった。

小沢と草鹿が滑走路へ着くとパイロット4人が山本と話をしていた。

「おお、二人共遅かったな。」

山本が笑いながら言った。

「よし。笹木少将。説明を始めてくれ。」

山本がパイロットの1人に言った。

「了解いたしました。」

笹木と言われた人物が応えた。

「小沢さん、草鹿さん。はじめまして。笹木と申します。海軍の技術少将です。」

笹木は言った。

「それでは、このジェット機について説明します。」

笹木が説明を始めた。

「まず、私が乗ってきたのが、艦上戦闘機轟天です。そして、その横が艦上攻撃機海王です。海王の横が艦上偵察機嶺花です。嶺花の横が、早期警戒機星雲です。」

「まず、ジェット機の簡単な構造について説明します。」

「簡単に言うと、ジェット機というのは、そう、ゴム風船を膨らましてそれを投げると、風船が宙を飛ぶのを小沢さんもご存じでしょう。」

笹木が聞くと。

「勿論だ、子供たちがそんなふうにして遊んでいるのを見たことがある。」

小沢が言った。

「ジェット機は、簡単に言えばその空気を絶え間なく噴き出すことを可能にさせたエンジンだと思っていただければいいかもしれません。むろん、ジェットエンジンが噴き出すのはゴム風船の空気とは違いますがね。」

笹木は言った。

「まず、轟天の概要を説明します。最大速度は1250キロ、実用

上昇限度は18300メートル、武装は58ミリ機関砲2門、15ミリ機銃2門、空対空ミサイル8発、空対艦ミサイル6発、航続距離は9300キロです。ミサイルは全て機体内のウエポンベイに内蔵しており、空気抵抗は少ないはずです。」

笹木が言つと、

「ミサイルとは何だね？」

小沢が笹木に聞いた。

「ミサイルとは、簡単に言えばそれじたいが敵機に向かい自動的に追尾し、攻撃する、追尾弾と言えればいいでしょうか。」

笹木が言つた。

「何となくミサイルが解つた。」

小沢が言つた。

「それでは海王について説明します。最大速度は930キロ、実用上昇限度は13500メートル、武装は20ミリ機銃5門、空対艦ミサイル8発、爆装は1トン徹甲弾2発、クラスター弾4発、航続距離は9000キロです。ジェット機にしたので雷装は破棄しました。」

「次は嶺花の説明です、最大速度は1300キロ、実用上昇限度は9300メートル、航続距離は11500キロです。」

「星雲は最大速度1150キロで実用上昇限度は13000メートル

ル、航続距離は10500キロです。全4機種とも双発ジェット機です。」

笹木が言った。

「長官。凄いです。日本にこれほどの航空機を造る事の出来る技術があったとは。」

小沢が山本に言っている。

「確かに。私も驚いたさ、初めてジェット機を見た時にはな。」

山本が続ける。

「そこでだ、小沢。お前の艦隊にこのジェット機4つを配備するんだが、誰でもそうだが、ジェット機なんて初めてだろ？だから1ヶ月の間空母の奴らを訓練させないといけないんだ。」

山本が言った。

「わかりました。長官。空母群を訓練に残します。」

小沢が言った。

「小沢。空母群だけじゃないんだ。」

山本が言う。

「他にあるんですか？」

小沢が聞く。

「潜水艦も全て改装する。」

山本が続ける。

「いや、第七独立機動艦隊全艦にちょっとした装置を装備させる。」

山本が言うつと。

「了解いたしました。第七独立機動艦隊は全艦1ヶ月の間改装に入ります。」

小沢が言った。

昭和18年2月20日。

第七独立機動艦隊は改装が終わり、旅順港を出港した。

目的地は

アメリカ本土西海岸

（後書きコーナー）

作者

「いやはや、結構長いこと続いている、艦魂さんいらっしやういです。」

早紀

「今回は誰を呼んだの？ 奴隷。」

作者

「今回は二等海士長先生の艦魂をお呼びしました。」

亜由美

「早く呼べっ！……！奴隷。」

作者

「了解いたしました。亜由美女王陛下様。」

作者

「それでは呼びします、摂津様と榎野様です。」

摂津

「はじめまして。摂津です。」

榎野

「は、はじめまして。榎野ですっ！……！」

作者

「榎野様。めっちゃ可愛いです。もはや天使ですっ！……！」

榎野

「そっ！……！そんな事言われても。」

作者

「可愛いですっ！……！胸をちょっとでいいですから触らグハッ
ツッ」

榎野

「！？007さん………？」

早紀

「榎野大丈夫？」

亜由美

「この奴隷が迷惑をかけたな」

喜恵

「大丈夫ですか？榎野さん？」

摂津

「榎野大丈夫？」

榎野

「大丈夫ですが、007さんは、どうなっただんですか？」

早紀

「ああ、奴隷なら私と亜由美と喜恵の一斉砲撃でどこかへ吹っ飛んだわ。」

亜由美

「たぶん、もうすぐ戻ってくるわ。」

ドカッッッ

榎野

「ひゃっ！！」

摂津

「よく飛んできたわね。」

早紀

「まあ、いいじゃない。」

亜由美

「ねえ、摂津、榎野。」

摂津

「何？」

榎野

「な、何ですか？」

亜由美

「あんたの作者、何か凄い家の生まれね。」

摂津

「確かに、うちの作者は父方の祖父は陸軍の将校、父は元航空自衛官、兄は空自幹部の、確かに凄い家の生まれね。」

榎野

「うちの作者さんは凄いですね。」

早紀

「私のところの作者はどうなの？」

亜由美

「さあ？」

喜恵

「聞いてみたら？」

早紀

「そうね。では聞きましょう。」

亜由美

「奴隷っ！……！」

作者

「はいっ！……！何でございましょうか？亜由美女王陛下様。」

亜由美

「そこに座れ。」

作者

「はあ……」

早紀

「それでは、証人喚問を始める。」

作者

「はい。」

早紀

「それでは、あなたの家族構成を言いなさい。」

作者

「父と母と私と弟、それとペットに柴犬がいます。」

早紀

「おじいさんとおばあさんは？」

作者

「母方の祖父は戦艦長門の砲術長でした。祖父の弟はあの大和の乗員でした。今は東シナ海の海の底に大和と一緒に沈んでいます。祖父は生まれる前、祖母は去年亡くなりました。父方の祖父は終戦の日に特攻隊として出撃する予定でしたが玉音放送を聞いた後に出撃に変更になったので、戦後に私は幸運のあるやつだ、が口癖でした。」

亜由美

「なかなかの家ね。」

作者

「ありがとうございます。」

摂津

「その話は、本当の話？」

作者

「何言ってるんですか！！！！嘘言ったって意味ないでしょうが、摂津様。」

摂津

「確かに」

早紀

「父親と母親は何をしているの？」

作者

「父は海上自衛隊の幹部です。母親は普通の主婦です。」

早紀

「その他、いとは？」

作者

「いとこの1人が防衛省の職員です。そして警視庁の警部補になっているところがいます。」

樫野

「なかなかの家ですね。」

作者

「所で、なぜこんな話になったんですか？」

摂津

「さあ？」

作者

「さあ？って」

早紀

「何か問題でも？」

作者

「いいえっ！！！！何もありません」

摂津

「それじゃあ帰るわ」

樫野

「それではっ、失礼します。」

早紀

「それじゃあね。」

亜由美

「バイバイ」

喜恵

「さようなら」

作者

「如何でしたでしょうか？」

作者

「二等海士長先生の艦魂をやつと出せました。」

作者

「ありがとうございました。」

早紀

「おい、奴隸。」

作者

「何でしょうか？早紀女王陛下様。」

早紀

「なぜ、私達にあのような話をさせた？」

作者

「ああ、あれですか。あれは……………」

早紀

「あれは？」

作者

「私の彼女が書けといたしましたので。」

早紀

「彼女！？」

作者

「はい。早紀女王陛下様も、私の彼女をモデルにしています。名前は私が考えた名前ですが……………」

早紀

「ふうん。私は奴隷の彼女をモデルにしているのね。」

作者

「イエスマイロード」

早紀

「解った。これから頑張るなさい。」

作者

「了解いたしました。」

早紀

「それじゃあ」

作者

「ふう。」

作者

「あつ、すみません。この小説は彼女の影響力が凄いですから……」

作者

「それでは、二等海士長先生。感想をお待ちしています。」

第21話 日本航空機産業の底力（後書き）

次回はアメリカからの話を書きたいと思います。

第22話 デーモン艦隊

1943年1月20日

ハルゼーは単身、ホワイトハウスに来ていた。

10日前に起こった、珊瑚海海戦の報告にやってきたのだ。

1月13日にパールハーバーに帰還したハルゼーだったが、自分の一方的に敗北に嫌気がさし、昨日まで軽い鬱になっていた。

しかし、彼は一介の艦隊司令長官である。

大統領と海軍長官、合衆国艦隊司令長官にワシントンに来るようにと言われたら、断れる訳が無い。

その為、ハルゼーは朝一番にワシントンに飛んできた。

大統領執務室に通されたのはいいが、未だに大統領達は現れない。

「やれやれ。俺も情けないな。」

ハルゼーが言った時。

「珊瑚海では大変だったなハルゼー。」

大統領が2人を連れて”歩いて”入ってきた。

「大統領閣下。」

ハルゼーが言った。

「まあ、ハルゼー。固くなるな。」

キングが言った。

「まあ、ハルゼー、掛けてくれ。」

ルーズベルトが言った。

「珊瑚海の件だが、気にする事はない。」

ハルゼーは我が耳を疑った。

「大統領。どうゆう意味でしょうか？」

ハルゼーが聞く。

「お前が戦ったのはX艦隊だ。」

キングが言う。

「いや、デモン艦隊だな。」

ルーズベルトが言った。

「デモン……艦隊。」

ハルゼーが言った。

「そうだ。奴らは英東洋艦隊を壊滅させた艦隊だ。」

ルーズベルトは続ける。

「その艦隊の破壊力は凄まじい、君の艦隊もその艦隊にやられたのだ。」

「その艦隊は何時何処に出現するか解らない。まさに神出鬼没だ。何処に出現すれば必ず敵艦隊を壊滅させる。まさにデーモンだ。」

ノックスが言った。

「海軍長官の言う通りだ。我が合衆国はそのデーモン艦隊に太平洋艦隊を壊滅させられた。」

ルーズベルトが言った。

「まあ、我が合衆国の国力を使えば再建は可能だが、投入していく端から壊滅させられていくのであれば意味がない。」

キングが言った。

「そこでだハルゼー。私はある計画にさらなる資金投入を決めた。」

ルーズベルトが言った。

「ある計画？」

ハルゼーが聞いた。

「マンハッタン計画だよ。」

ルーズベルトが言った。

「マンハッタン計画？」

ハルゼーが更に聞く。

「原子爆弾と言って半径2キロのものが消滅する。」

ルーズベルトが言った。

「消滅！？それならデーモン艦隊も消滅出来るではないですか！！」

ハルゼーが興奮気味に言った。

「そうだ。そのマンハッタン計画に金を使う訳だ。」

ルーズベルトが言う。

「了解いたしました。大統領。そうなれば現在の太平洋艦隊の旧式艦でも頑張れるはずです。」

ハルゼーが言う。

「そうだ。ハルゼー。旧式艦で訓練に励んでくれ。」

ルーズベルトがそう言うのと、ハルゼーは立ち上がり。

「そうと決れば私はパールハーバーに帰り訓練に励みます。」

ハルゼーはそう言うと颯爽と大統領執務室を出ていった。

「よし。ロスアラモスに連絡を入れてくれ。原爆開発を急げと。」
ルーズベルトが言った。

1943年2月20日

「大統領。朗報です。」

ハル国務長官が大統領執務室に飛び込んできた。

「何だね。ハル。」

「原爆が完成しました。」

ハルが言った。

「何！？本当か？」

ルーズベルトが聞く。

「勿論です。大統領。」

ハルが応える。

「よし。よくやった。」

ルーズベルトが続ける。

「それでは、ロスアラモスにB29を配備して特別空軍を設立する。」

「了解いたしました。それでは早速手配します。」

ハルはそう言うのと部屋を出ていった。

「よし。これでデーモン艦隊が本土に襲来した時でも大丈夫だ。原爆に耐えられる艦隊など存在しない。本土にデーモン艦隊が来た時こそ、デーモン艦隊の最後だ。」

大統領執務室にはルーズベルトの笑い声が響き渡っていた。

第23話 アメリカ本土西海岸空襲

昭和18年3月5日

第七独立機動艦隊はアメリカ本土西海岸サンディエゴの西50キロに位置していた。

「よし。大和改に連絡、空母群は攻撃隊を編成しサンディエゴを空襲せよ、だ。」

小沢が言う。

「了解いたしました。」

大和改に連絡がいく。

「よし。全艦砲撃用意。」

小沢が言う。

「遂に敵の本土に砲撃出来るわね。」

大和（早紀）が言う。

「確かにそうだな。」

有賀が言う。

「今回は空母を除いた全艦の対地砲撃だからサンディエゴは壊滅ね。」

大和（早紀）が言う。

「そうだな。大和改、武蔵改、信濃改、海神、風神以外の全艦で対地砲撃をして空母艦載機で空襲するんだ。どんなものでも壊滅するさ。」

有賀が言う。

「よし、そろそろ砲撃を始めるぞ。」

小沢が言う。

「了解しました。」

有賀が言った。

「さあて、ショータイムよ。」

大和（早紀）が言った。

「撃てえ〜」

小沢が言った。

ドグワアアアアン

凄まじい音と共に、大和、武蔵、信濃から発射された超々重量徹甲

弾27発がサンディエゴに向かって飛んでいった。

大和改では出撃の準備に追われていた。

「えらく張り切っているわね。」

大和改（由香）が飛行総隊長の木月中佐に声を掛けた。

「あたぼうよ、何せ今回はこいつでの初陣だからな。」

木月がそついいながら背後の真つ黒な機体に手を当てた。

「轟天ね。」

大和改（由香）が言う。

「そうだ。こいつはなかなかの代物だ。」

木月が言う。

「そんな事を言ってるのはいいけどそろそろ出撃じゃないの?」

大和改（由香）が聞く。

「おっと、隊長としたことが。それじゃあ行ってくるわ。」

木月は轟天に乗るとカタパルトに打ち出されていった。

「生きて帰ってきてね。」

大和改（由香）の目には涙がうつすらとあった。

潜水艦伊一 一は一、二、一 三と共に浮上していた。

「よし。対地ミサイル発射。」

伊一 一 艦長の橋本大佐が言つと。

バシユバシユと音が聞こえた。

これが山本が言っていた改装である。

垂直発射型対地ミサイル発射機である。

今で言うVLS式の走りである。

それが20基装備されたのである。

「一。凄いもんだな。」

橋本が 一（舞）に言つた。

「はい。まさか敵の本土にまで攻撃しにくるとは、思ってもみませんでした。」

一（舞）が言つた。

「そうだな。私も思っていなかったよ。」

橋本が言う。

「これから、この戦争はどうなるのでしょうか？」

一（舞）が聞く。

「さあな、私もわからんよ。」

橋本が言う。

「そうですね。わかりませんよね。」

一（舞）が言う。

2人の会話は続きそうだ。

サンディエゴ上空

「しかし、一方的だな。」

木月が言った。

木月の言う通りだ。

飛行場はもうすでに大和等の砲撃により壊滅しているし、他の飛行場から飛んできた航空機があっても、轟天の空対空ミサイルで撃墜される始末。

「張り合いがねえ。」

木月が言う。

「おや？」

木月が敵機を見つけた。

「また、落とされに來たか。」

木月はそう言いながら敵機にミサイルの照準を合わせた。

「ロックオン」

木月はそう言うのとミサイルの発射ボタンを押した。

すると、ウエポンベイに収納されていた、空対空ミサイルが轟天を離れて敵機に向かって飛んでいった。

ドカアアアアン

「撃墜。」

木月は言った。

今回は海王の護衛が任務である為、対艦ミサイルを載せずに対空ミサイルを載せた為14発のミサイルであつたが先程の攻撃でミサイルを撃ち尽くしてしまった。

「やっぱり一対一の方がいいな。混戦になると、見方が撃ち落としたりやつに向かつてしまふからな。」

木月が言った。

確かに木月の言う通りである。

轟天の搭載するミサイルはまだ真空管の付いた初歩的なミサイルのため、見方が撃ち落とした敵機に吸い寄せられて敵機に命中しないのがあつたのである。

いわばサイドワインダーの走りである。

そのため、彼らは敵機とすれ違う直前にミサイルを発射するという荒技をみせた。

そうすれば目の前に敵機がいるため、アホなミサイルでも敵機に命中するのである。

「この街も復興するのにどれだけかかるんだろうな。」

木月が言った。

今、木月の見下ろす街は瓦礫の山となつていた。

戦艦5隻、巡洋艦5隻、駆逐艦5隻、潜水艦3隻、戦闘機180機、

攻撃機180機、攻撃ヘリコプター30機に攻撃されたサンディエゴは壊滅した。

「よし。全機帰還せよ。」

木月は命令を下した。

ホワイトハウス

「大統領。大変です。」

ハルが大統領執務室に飛び込んできた。

「どうしたんだ？ハル」

「デーモン艦隊が現れました。」

ハルが言うと、

「何！？本当か？」

ルーズベルトが聞く。

「本当です、大統領。」

ハルが応える。

「よし。ロスアラモスの特別空軍に出撃命令だ。今すぐ、原爆を搭載してサンディエゴに急行せよ。だ。」

「了解いたしました。すぐに連絡をいれます。」

ハルはそう言っていると部屋を出ていった。

「フフフ。デーモン艦隊の最後だ。」

ルーズベルトは笑った。

第七独立機動艦隊総旗艦大和艦橋

「長官。対空レーダーが上空15000メートルにB29と思われる爆撃機10機を捕らえました。」

レーダー員が言った。

「10機ぐらいならほっておいてもいいだろう。」

小沢が言った。

「爆撃機10機が来ようとも私の敵ではないわ。」

大和（早紀）が言った。

「それもそうだ。」

小沢が笑いながら言った。

しかしこれが第七独立機動艦隊の最後になるうとは……………

第七独立機動艦隊上空15000メートル

「フフフ。デーモン艦隊め。これで最後だ。」

B29の機長マイクが言った。

「全機、投下用意。」

マイクが全機に言った。

「よし。全機原爆投下っ！！！！」

1機1発で合計10発が第七独立機動艦隊に投下された。

1つの艦隊に10発の原爆とは、アメリカがいかに第七独立機動艦隊に怯えているかがわかる。

その瞬間

ドグオオオオオオン

この世と思えない爆発音と共に10個のキノコ雲が立ち上った。

マイクは固唾を吞んで見守る。

キノコ雲が消えた海面を見ると、そこには原爆の熱によって蒸発した穴が空いていた。

「イーハアー！！！！やったぞ。デーモン艦隊は消滅した。ホワイトハウスに連絡だ。デーモン艦隊はすでに存在せず、とだ。」

マイクは興奮しながら言った。

第七独立機動艦隊消滅。

第23話 アメリカ本土西海岸空襲（後書き）

1ヶ月少々しか連載できませんでしたが、第七独立機動艦隊へ神出鬼没！！米海軍の悲劇へ、次回最終回です。

短い間でしたが、ありがとうございました。

第24話 無敵の第七独立機動艦隊

B29の機長、マイクは興奮していた。

彼らは原爆と言う超絶破壊兵器を使って、デーモン艦隊を消滅させたのである。

「機長。やりましたね。」

パイロットがマイクに言った。

「ああ。合衆国の悪夢、デーモンを消滅させたのだ。私達はナイトだよ。」

マイクは機嫌よく言った。

「デーモンを退治したんですから、基地に戻れば美女達が待ってますよ。」

通信員が笑いながらマイクに言った。

「ハハハ。そうだな。」

マイクがそう言ったそのとき。

「機長！！！！4時の方向から高速飛行物体、接近中です！！！！」

レーダー員が叫んだ。

「何っ！！！！本当かつ！！！！」

マイクが聞いた。

「本当です！！！！目視できると思います。」

リーダー員がそう言うのでマイクは半信半疑に4時の方向を見た。

すると、マイクは我が目を疑った。

ジェット機がこちらに向かって飛んできているではないか。

「なぜ、ジェット機が飛んでいるんだ？ジェット機を配備しているのはデーモン艦隊だけだろう！！！！しかしデーモン艦隊は消滅したんだ！！！！何故だっ！！！！」

マイクは人生の中で一番頭を働かせた。

しかし、マイクは答えを導きだせなかった。

そんな状況でマイク達は戦闘に巻き込まれた。

「敵が何かを発射しました！！！！」

機銃員が叫ぶ。

「ッ！！！！」

マイクが唇を噛み締める。

ドグワアアアアン

10機の内5機が爆散した。

「糞っ！！！！何て奴だっ！！！！」

マイクが叫ぶ。

「敵が突っ込んできます。」

パイロットが言った。

「糞っ！！！！機銃員、敵機を撃ち落とせっ！！！！」

マイクが叫んだ。

機銃員が必死になって、機銃を撃っている。

ところが、敵機は恐ろしいスピードで突っ込んでくる。

突如、

ズドドドドドッ！！！！

敵機の機関砲が咆哮した。

ズグワアアアアン！！！！

4機が爆散して、残りはマイクの機体だけとなった。

「機長っ！！！！全エンジンが爆発しました。」

パイロットが言った。

「糞っ！！！！」

マイクはそういいながら考えた。

考えている時もB29は降下を続ける。

「パイロット、海上着陸だ。それしかない。それと通信員、ホワイハウスに連絡だ、デーモン艦隊は生きている、だ。」

マイクが叫ぶ。

「イエッサー」

パイロットが叫ぶ。

そこへ、敵機が機関砲を乱射しながら近づいてきた。

（どうやら、俺の命運もこれまでだな。）

マイクの意識は薄れていった。

「マイク大尉。マイク大尉。」

(！？俺を呼んでいるのか？)

マイクは考えた。

「マイク大尉。」

何回目かの呼び掛けにマイクはやっと目を覚ました。

「ッ……………ここは何処だ？」

マイクは目の前の人物に聞いた。

「第七独立機動艦隊総旗艦大和の医務室だよ。マイク大尉。」

目の前の人物がいう。

「そうか、俺は今デーモン艦隊にいるんだな。」

マイクが言った。

「デーモン艦隊？」

目の前の人物が聞いた。

「ああ、デーモン艦隊だ。我が合衆国の艦隊を壊滅させた艦隊がある。その艦隊を合衆国ではデーモン艦隊と呼んでいる。」

マイクは言った。

「ハハハ。デーモン艦隊か、それは面白い。」

目の前の人物は笑った。

「なあ、1つ聞いていいか？」

マイクは言った。

「ああ。なんだ？」

目の前の人物が聞いた。

「どうやって、10発の原爆から生き延びたんだ？」

マイクは率直な疑問をぶつけた。

「フィラデルフィア実験。」

目の前の人物はそう言うつと艦隊が生き延びた経緯の説明を始めた。

目の前の人物……小沢……はマイクに説明を始めた。

1938年3月20日……史実は1943年10月28日……にアメリカ軍が行った、フィラデルフィア実験。

フィラデルフィア軍港から2500キロ以上離れたノーフォーク軍港に駆逐艦1隻を瞬間移動させようという計画であった。

しかし、実験はものの見事に失敗した。

フィラデルフィア軍港から瞬間移動した駆逐艦はノーフォーク軍港に出現したが、現れた瞬間に大爆発を起こして轟沈してしまった。

アメリカ合衆国政府はこの実験を国家S級事件……アメリカが国家の威信を守るため、秘匿するべき事件としてランク付けする。A級より上位ランクをS級と言っている。……として50年間の秘匿を決めた。

しかし、その実験は鈴木商店の対米工作員に見られていたのである。その工作員は鈴木商店に早速、フィラデルフィア実験の経緯を報告した。

工作員から連絡を受けた鈴木商店は帝國政府にその実験を知らせた。知らせを受けた帝國政府は鈴木商店と協同でフィラデルフィア実験の実用化を目指すために研究を始めた。

翌年の1939年10月に鈴木商店の対米工作員がまたしても興味深い情報を入手した。

アメリカがフィラデルフィア実験の研究を止めて、マンハッタン計画……史実は1942年から始まったが……という原子爆弾の開発を始めたというのだ。

そこで鈴木商店と帝國政府の合同研究チームはフィラデルフィア実験の空間移動理論を原爆の破壊力からパワーを得ようと、計画の大

幅な転換を行った。

まず、艦橋のトップに円形のエネルギー吸収装置を設置し、敵が投下した原爆の破壊エネルギーを吸収。

エネルギー吸収装置に吸収したエネルギーをその下に設置した拡散装置にエネルギーを移し、エネルギーを艦全体に放出して、空間移動を実現させようというのである。

将来的には原子力機関という機関を艦に装備し、自分自身で空間移動を可能になるだろう。

その装置が1943年1月20日に完成し、旅順に帰還した第七独立機動艦隊に搭載したのである。

そして、今回のサンディエゴ空襲作戦にて、初めて使用されたのである。

「これが、我がデーモン艦隊生存の真相だ。」

小沢が言った。

「日本は凄いな。」

マイクは言った。

「ハハハ。凄いのは技術者だよ。」

小沢が言った。

「そうだな。」

マイクが言った。

「それで、俺はどうなるんだ？」

マイクが聞いた

「大丈夫だ。君は日本の捕虜収容場に連れていくよ。大丈夫。粗末な暮らしはさせないよ。」

小沢が言った。

「ありがとう。」

マイクが言った。

「俺は疲れたよ。少し寝かせてくれ。」

マイクが言つと。

「ああ、勿論だ。日本までは遠いからな。ゆっくり休んでくれ。それじゃあ。」

小沢が艦橋に戻ると、草鹿が声を掛けてきた。

「あの大尉はどうでしたか？」

「ああ。マイクなら元気そうだったよ。」

小沢が言った。

「マイク？」

大和（早紀）が聞いた。

「ああ。あの大尉の名前だよ。」

小沢が大和（早紀）に言った。

「えらく仲が良さそうね。」

大和（早紀）が言った。

「それほどでもないよ。」

小沢が言った。

「長官。」

有賀が言った。

「おお。そうだな。」

小沢は1呼吸置くと、

「旅順に帰還するぞ。」

「了解しました。」

有賀が答えた。

こうして、第七独立機動艦隊は旅順への帰路についた。

第七独立機動艦隊は壊滅していなかった。

（後書きコーナー）

早紀

「奴隷っ！！！！！！！！」

作者

「はいっ！！！！何でございましょうか？早紀女王陛下様。」

早紀

「私達を生死不明にさせた罪は重いぞ。」

亜由美

「死をもって償え。」

喜恵

「リンチです。」

作者

「どうかお許しを……………」

早紀

「無駄なあがきだ。」

作者

「そんな……」

早紀

「奴隷を縛り上げる。」

亜由美

「勿論。」

喜恵

「喜んで。」

作者

「えっ………そんな………」

両腕両足を縛られる作者。

亜由美

「それでは奴隷。お前の処刑計画を発表する。」

作者

「……………はい。」

亜由美

「まずは1人100発ずつの鞭打ち、その次はロウソクのロウ垂らし、その次に釘バットで殴り倒します。最後に回し蹴りと飛び膝蹴りの10発セットです。以上が処刑計画です。」

早紀

「それでは処刑前に言い残す事はないか？」

作者

「それでは最後に、皆さん第七独立機動艦隊へ神出鬼没！！米海軍の悲劇へはまだまだ続きます。最後まで見捨てずに温かく見守ってください。」

亜由美

「それでは処刑を始める。」

作者

「お許しを……」

一同

「許すかあ……」

作者

「ギヤアアアアアアア」

5時間後、清々しい顔をして部屋を出ていった美女達が出た。

その部屋を見ると作者が傷だらけ及び出血多量で死んでいるのが見
つかった。

第24話 無敵の第七独立機動艦隊（後書き）

最終回ではありませんでした。
ろしくお願いします。

次回からもよ

第25話 八方塞がり

1943年3月6日

ワシントンDCのホワイトハウスでは沈痛な面持ちの大統領がいた。

「何故だ、私の考えに間違いはなかったはずだ。」

大統領……ルーズベルト……は言った。

「デーモン艦隊を消滅させるために私はマンハッタン計画に予定の数倍以上の資金を投入して、やっと10発が完成したのだ。」

あつ、これはルーズベルトの独り言ですので。

「そして、B29も完成させた。それなのに……」

ルーズベルトは続ける。

「原爆は確かに爆発した。デーモン艦隊は消滅したと思った。それなのにデーモン艦隊は消滅しなかった。」

「消滅しなかったただけならまだしも、我が国が実現不可能尚且つ大失敗したフィラデルフィア実験を実現させるとは……」

「糞つ。ジャップめつ……!!」

ルーズベルトは言った。

「戦時増産体制も整いつつあるが、投入する端からデーモン艦隊に沈められる……」

「議会も私の責任を追及してくるし、支持率は急落するし、艦隊は壊滅するし、ヨーロッパではドイツの勢いは落ちないし、ノルマンディー上陸作戦も延長しなければいけないし……」

「四面楚歌、八方塞がり……か。」

ルーズベルトは大きくため息をついた。

コンコンッ

誰かがドアをノックした。

「誰も居ないぞ。」

使い古された、ギャグを言ったルーズベルトだが、あまりにも馬鹿馬鹿しいので入れと言った。

「失礼します。大統領閣下。重大なお知らせです」

国務長官のハルが言った。

「何だ？ハル。焦らさず早く言え。」

ルーズベルトが言った。

「了解しました。」

ハルは大きく息を吸うと驚くべき事を言った。

「イギリスが降伏しました。」

「何っ!？」

ルーズベルトはそう言つと椅子に座り込んだ。

四時間後。

やっと、気を取り戻したルーズベルトはハルの話を聞き始めた。

「チャーチルと王室の方々はどうされた？」

ルーズベルトが聞く。

「王室の方々はもう既に、カナダに到着しました。チャーチル閣下はもうすぐカナダに着くはずですよ。」

ハルが言った。

「そうか……………」

ルーズベルトは言った。

「ならいいがな。」

「では、大統領。失礼します。」

ハルはそう言うと、部屋を出ていった。

「糞っ！！！！八方塞がりにも程があるっ！！！！！！」

ルーズベルトは叫んだ。

さて、読者の皆様にはヨーロッパ戦線の状況が全く理解出来ていないと思いますので（そりゃそうだ、説明してないから。）説明させていただきます。

開戦早々、西方電撃戦にてフランスはもとよりスペイン及びポルトガルを占領し、さらにはバルカン半島及びクレタ島をも占領した。

その後、ビスマルクをイギリスに沈められると言う悲劇に見舞われたが、大西洋戦争においてUボートを使い、制海権を握る事に成功した。

その後のドイツの活躍は凄まじく、ポーランドのソ連領に侵攻。

それを占領した。

ドイツはその後バルバロッサ作戦を発動し、レニングラード占領、キエフ占領、モスクワへの活路を見出だした。

そして、ドイツはモスクワ侵攻のタイフーン作戦を発動。

合計八十個師団を投入し半年に及ぶ攻防の末、ドイツはモスクワを占領した。

スターリンはモスクワ陥落前にヤクーツクに逃げ込んだ。

モスクワを占領したドイツ軍は勢いを落とさずにウラル山脈の西部まで占領してしまった。

ドイツはモスクワを首都としたウラル山脈西部までにモスクワ大公国という、傀儡国家を建国した。

そしてアフリカ戦線でもドイツは奮戦し、北アフリカを占領した。

そして1943年1月末にドイツはイギリスに上陸した。

イギリスの奮戦虚しく、ハルがルーズベルトに言った通り、イギリスは降伏した。

1943年3月6日のヨーロッパを見ると、スイスを除きドイツ第三帝国の占領下にあった。

スイスはヒトラーが絶対に占領するなと命令していたためスイスには食料援助をドイツは行っていた。

これが現在のヨーロッパ戦線の状況である。

「糞っ！！！！我が国はどうすればいいんだっ！！！！」

ルーズベルトは叫んだ。

「どうすればいいんだっ！！！！どうすればっ！！！！」

ルーズベルトは考え込んだ。

「落ち着け、落ち着くんた。フランクリン。考えるんだ。」

ルーズベルトは自分に言い聞かせた。

「考える。」

ルーズベルトが自分に言い聞かせていると。

「大統領。」

ハルが入ってきた。

「何だハル？」

ルーズベルトが不機嫌そうに聞いた。

「サンディエゴの被害総額と復興費用の合計です。」

ハルが書類をルーズベルトに渡した。

「うむ。」

ルーズベルトはハルから書類を受け取ると、それに目を通した。

そこには驚愕の数字が書いてあった。

「何っ！？これは本当か！？」

ルーズベルトは叫んだ。

「本当です。」

ハルが言うと、

「何て事だ。」

ルーズベルトはそう叫ぶと気を失った。

第25話 八方塞がり（後書き）

皆さん！……！

本日、1時30分から始まるたかじ

んのそこまで言って委員会を御覧ください。あの田母神前空幕長が
出演します！……！

絶対見て下さい！……！

第26話 太平洋制覇への道（前書き）

この小説は従来の艦魂小説とは違い、あくまでメインは戦記等です。
本来の艦魂小説をご希望の方がいらつしやいましたら極上艦魂会の他の先生方の小説をご覧下さい。 私は今の書き方を変える事は一切しませんのでご了承下さいませ。

と言うより、自分が上手に書けないだけの話なんですけどね…………

第26話 太平洋制覇への道

昭和18年3月23日

第七独立機動艦隊は横須賀港に入った。

見事に敵本国まで遠征しサンディエゴを壊滅させたのだ。

小沢達第七独立機動艦隊のスタッフは歓迎を受けると思っていたが、
現実とは違った。

「ハハハ、やっぱりいつ見ても殺風景な風景だな……」

小沢が言った。

確かに小沢の言う通りである。

今、小沢が見ているのは少しずつ復興が進んでいるが未だに瓦礫の
山の残る帝都であった。

あの1・3事件の時に第七独立機動艦隊及び富嶽戦略空軍による圧
倒的な砲撃かつ空襲により帝都は壊滅したのである。

その後は帝都の近代化を掲げ現在、復興を行っている。

道路も完全舗装され、高層ビルやマンションの建築も行われている。

しかしこの小説の大日本帝国の財政は凄いものだ。

第七独立機動艦隊はイギリスの資金と山本が稼いだベガスの資金があるのだが、それは第七独立機動艦隊専用で艦の建造と改修でイギリスの資金を全て使い、ベガスの資金で航空機や戦車の生産を行っている。

連合艦隊は重装甲空母大鳳を建造したし、富嶽戦略空軍を設立にするにあたって満州で富嶽生産の完全オートメーション工場も建設したから、帝都の復興費用はどこからひねり出したのか？

まあ、いつか話す事になるが……

今回第七独立機動艦隊がなぜ横須賀に来たかと言えば大日本帝國の軍事力の総力をあげた一大作戦、ハワイ占領作戦に向けての話し合いのためだった。

そのため、小沢と草鹿は2人揃って皇居へ向かっていた。

皇居

「小沢、草鹿遅かったな。」

山本が言った。

「小沢、草鹿。良くやった。」

天皇裕仁が言った。

「長官、陛下。ありがとうございます。」

小沢が言った。

今回は大日本帝國の軍事力の総力をあげた一大作戦の話し合いのため、皇居に山本、近衛、豊田、栗林、そして鈴木商店の大番頭金子が来ていた。

「それでは、お上。全員揃いましたので会議を始めさせていただきます。」

近衛が天皇裕仁に言った。

「うむ。では始めてくれ。」

天皇裕仁が答えた。

「それでは会議を始める。」

近衛が言った。

「まずは海軍の状況をお聞きしたい。山本君。」

近衛が山本に聞いた。

「はい。海軍の連合艦隊は全艦出撃準備が出来ております。そして、第七独立機動艦隊が帰還しましたので第七独立機動艦隊の休暇を取りまして作戦は昭和18年4月15日開始を予定しています。」

山本が言った。

すると、

「長官、我々は休暇などいりません。明日にでも作戦を開始しても構いません。」

小沢が言った。

「まあ、お前たちは職業軍人だからいいが、普通の兵達の事を考えてやれ。」

山本が小沢に言った。

「確かに……………」

小沢が言った。

「だからゆつくりしろ。何もずっと休暇を取れと言ってるんじゃない。訓練でもしたらいいじゃないか。」

山本が言つと、

「了解いたしました。」

小沢が言つ。

「よし、では陸軍はどうでしょうか？」

近衛が栗林に聞いた。

「はい。今回は大日本帝國の軍事力の総力をあげた作戦とあつて、陸軍は出せる兵力を全て投入します。」

栗林は続ける。

「海軍に技術を受けた20式重戦車も今回の作戦の主軸ですので大量に持つていく予定です。しかしここで問題が発生しました。」

栗林が少し声のトーンを下げて言った。

「輸送船の数が足りません。」

栗林が言つと、

「なんじゃ、そんな事か。何か他に重大な事を言つかと思つたら。なあに、心配するな、必要な数があれば2週間で建造するぞ?。」

金子が言った。

「本当ですか！？金子さん？」

栗林が聞く。

「ああ、もちろん。なんぼでも言え、すぐに建造を始めるぞ。」

金子が言った。

さて、ここで言うと鈴木商店は連邦商路護衛艦隊を設立するにあたって、画期的な建造方法を編み出した。

それは連続部分工法と呼ばれる建造方法である。

従来のドッグ1つ丸々占拠して建造する方法と違い、連続部分工法は艦首から艦尾まで数個のパーツに分け、最終的に全てのパーツを溶接して完成させるものである。

この建造方法により鈴木商店は輸送船の大量生産を始めたのである。

「それは、有り難いです。それでは20隻程お願いします。」

栗林は言った。

「うむ。では2週間後には全て建造出来るから、楽しみにしておけ。」

金子が誇らしげに言った。

「我が社は利益最優先だが今回は無料で建造してやろう。」

金子が続ける。

「何せ、日本の軍事力の総力をあげての作戦じゃからな。」

金子が言った。

「ありがとうございます。金子さんには感謝します。」
近衛が言った。

「うむ。朕は安心したぞ。」

天皇裕仁が続ける、

「この作戦が成功すれば世界が驚く事がある、絶対に成功させてくれ。」

天皇裕仁が言った。

「確かにお上の言われる通り、この作戦が成功すれば世界が驚きますな。」

山本が言った。

「ハハハ。これは楽しみじゃ。」

金子が言った。

天皇裕仁が言った、世界が驚く事とは何か？

第26話 太平洋制覇への道（後書き）

次回は第七独立機動艦隊艦魂の出撃まえの宴会です。お楽しみに。

第27話 一大作戦前夜の宴

昭和18年4月14日

ハワイ占領作戦『天元作戦』の発動を明日に控えた、今日は宴会が開かれていた。

連合艦隊でも宴会が開かれ無礼講の大騒ぎとなっていた。

第七独立機動艦隊も例外ではなかった。

小沢が無礼講としたため、水兵までもが艦長や長官に酒を飲ませにくる始末であった。

その一大宴会は人間だけでなく、艦魂も例外ではなかった。

「由美……あなたは私の物よ。」

おっと、いきなりか………

「いやあ……そんな所に手を入れないでくださいっ！……！」

「またまた……そんな事言つて。本当はこつゆつ事をされるのが好きなんでしょ?」

早紀が由美の耳元で囁く。

「あつ……………そんな所……………」

「フッフ。可愛いわね、由美。」

「馬鹿姉め。」

亜由美が言つた。

「あの……。すいません。」

「何?」

喜恵が亜紀に聞く。

「姉はどうなるのでしょうか?」

「ああ、由美さんならもうだめね。」

喜恵が言う。

「レズの姉に捕まつたんだからもうだめね。けど由美も、ああ見えて万更じゃないからね。」

亜由美が言う。

「そうですね。では。」

亜紀はそう言っていると美紀、渚、美香、舞、乱、華達の輪の中へ入っていった。

「全く、姉も困ったものだ。」

亜由美が喜恵に言った。

「まあ、いいんじゃないのかな？ 亜由美姉さんが頑張ってくれたらいいんだから。」

喜恵が言った。

「そうね。私が頑張ったらいいのよね。」

亜由美はそう言っていると酒を飲み始めた。

「姉さん。早紀司令と由美さんって凄く仲がいいわよね。」

綾夏が由香に言った。

「まあ、あの2人の間にはえげつない愛が芽生えてしまったからね……………」

由香が言った。

「見なかった事にする？」

綾夏が聞いた。

「もちのろん。」

由香が言った。

「りょくかい」

「こんな、もんでいいのかな？」

「いいんじゃない。作者も頑張ってるんだから。」

「そついうもんかな。亜由美姉さん。」

「そつよ。喜恵。ここは目をつぶりましょう。」

「りょくかい」

「姉さん。」

「なあに？ 愛美？」

「明日から天元作戦発動だけど大丈夫かな？」

「何で？」

「だって、皆なんか抜けてるんだもん。」

「大丈夫。私達はアメリカにデーモン艦隊と呼ばれてるのよ。寝ても勝てるわよ。」

「確かに……………」

「気にしない気にしない。じゃ乾杯」

「乾杯」

（^^） / ￥（^^）

第27話 一大作戦前夜の宴（後書き）

うん（ ） どうも艦魂の話は上手く書けませんね。

すいません。 由緒正しき艦魂小説をご希

望の方は極上艦魂会他の先生方の小説をご覧下さい。

まあ、私も一応極上艦魂会所属ですから、これから頑張りますのでよろしくお願いします。

第28話 天元作戦発動

昭和18年4月15日

この日遂に天元作戦が発動された。

この作戦は太平洋の中心、ハワイ諸島の占領を目的とした作戦である。

天元作戦には帝國海軍連合艦隊、帝國陸軍15個師団、富嶽戦略空軍、連邦商路護衛艦隊、そして第七独立機動艦隊等、大日本帝國が保有する全ての戦力が投入される（勿論、本土、中国大陆、オーストラリア、ニューギランド、ボルネオ、インド、フィリピン等の防衛・治安維持の陸軍は残されたが）。

それほどまでに、今回の天元作戦には大きな意味があるのである。

連合艦隊旗艦戦艦長門

「長官、いよいよですね。」

宇垣が山本に言った。

「ああ。そうだな、遂にアメリカの太平洋の要、ハワイを攻略するんだ。ミッドウェー以上の激戦を覚悟せねばいかんぞ。」

山本が言った。

「大丈夫ですよ、長官。連合艦隊の戦力は十分です、空母が11隻もあるんです。陸軍の輸送船団も連邦商路護衛艦隊が全力をあげて護衛します。しかも、遊軍ですが第七独立機動艦隊と富嶽戦略空軍もいるんです。大丈夫ですよ。」

宇垣が言った。

「まあ、確かにそうだな。ハワイにいる太平洋艦隊もごく少数だからな。安心だ。」

山本が言った。

確かに山本の言う通りである、現在アメリカは艦隊のほとんどを大西洋に配備しており、太平洋にはハワイに少しとサンディエゴに多数ぐらいである。

「今回の天元作戦は艦隊決戦より、航空戦や陸戦がメインになりそうだな……………」

山本が言った。

「確かに……………でもそうなれば対地制圧射撃を行い、陸軍の支援に空母艦載機を使つまでです。」

宇垣が言った。

「そうだ。」

山本が大きくうなづく。

「今回はハワイ諸島の占領が目的だ。出来れば敵味方双方に人的被害は出したくないが……………」

山本が言った。

「しかし、それは難しいと思いますが……………」

宇垣が言う。

「そうだな。私もそう思うよ。まあ希望だな。」

山本はそう言うと言った。

「そうですね……………」

宇垣もそう言うと言った。

山本率いる連合艦隊は威風堂々とハワイ諸島を目指し驍進中だ、陸軍輸送船団の護衛に連邦商路護衛艦隊も加わり、颯爽と大海原を駆ける。

さて、第七独立機動艦隊はどうか、覗いてみよう。

第七独立機動艦隊旗艦戦艦大和

「よし、俺の勝ちだ。」

「うっ、……………まいりました。」

「何、艦長も奮闘したよ。」

「ありがとうございます。」

どうやら、小沢と有賀は将棋をしていたようだ。

「流石は長官ですね。」

草鹿が言った。

「ハハハ、草鹿君。もう1度やるかね？」

小沢が聞いた。

「いえ、1回負けているのでいいです。」

草鹿が言う。

何とも呑気なものだ。

流石はアメリカにデーモン艦隊と恐れられるほどだが、少し抜けすぎてないか？

「ちよつと！！！！怠けすぎじゃないの？」

大和（早紀）が注意する。

「大丈夫だよ、大和。レーダーで索敵しているし、早期警戒機と偵察機も飛ばしているんだ。大丈夫だよ。」

小沢が言った。

「まあ、そうね。」

大和（早紀）がうなづく。

「長官。今回の作戦で、我々はどう動いたらいいんでしょうか？」

有賀が聞いた。

「ああ。今回の作戦で上陸作戦は陸軍がメインだし、敵艦隊は壊滅したも同然だしな……………」

小沢は考え込む。

「まあ、好きなようにやればいいだろう。」

小沢は笑いながら言った。

「それも、そうですね。」

有賀も笑った。

「まあ、気楽にいきましょう。」

草鹿も笑った。

「全く、もう少ししゃきつとしてよね。」

早紀も笑った。

今次作戦の意味を感じ、緊張しきった連合艦隊。

気楽なムード全快の第七独立機動艦隊。

やはり、遊軍だからなせる技だろう。

確実にハワイに向かって進んで行く、大日本帝國軍。

これだけの、戦力があればハワイなどあつという間に占領出来るかもしれない……。

第29話 ハワイ強襲（前書き）

本文中に、ニミッツ司令とありますがニミッツ司令とはハワイ基地の司令という事です。

第29話 ハワイ強襲

昭和18年4月21日

連合艦隊全艦はハワイを完全包囲した。

「長官。そろそろ時間かと。」

宇垣が言った。

「そうだな。よし、南雲と大西に命令だ。1航艦と2航艦はただちに艦載機を出撃させる。」

山本が宇垣に言った。

「了解。ただちに伝える。」

宇垣が通信員に言った。

さて、1航艦と2航艦について説明すると、

1航艦は第1航空艦隊。

2航艦は第2航空艦隊。

1航艦は従来通りの、赤城・加賀・蒼龍・飛龍・瑞鶴・翔鶴の6隻。

2 航艦は最新鋭の、大鳳・葛城・天城・阿蘇・生駒・笠置の6隻。

前者を南雲忠一中将に、後者を大西瀧治郎中将に司令長官に任命している。

「よし。連合艦隊全艦に命令だ。」

山本は大きく息を吸うと、

「全艦、ハワイに向け対地制圧射撃を始める。」

山本はそう言った。

今回の対地制圧射撃には連合艦隊のみならず連邦商路護衛艦隊も参加しての、大規模なものである。

しかも遊軍ではあるが、第七独立機動艦隊と富嶽戦略空軍も参加するので、ハワイは完全に廃墟となるだろう。

オアフ島パールハーバー海軍司令部

「ニミッツ司令、日本海軍のレンゴークンタイが攻撃を始めました。」

まだ入隊したばかりだろうと思われる、伝令員がニミッツの部屋に入ったとたんに言った。

「うん。……………そうか」

ニミッツはそう答えただけで、黙り込んでしまった。

「ハワイ全軍に命令だ。敵が上陸してくるまで、攻撃は控え、戦力温存に徹しろとな。」

ニミッツが言った。

「了解いたしました。すぐさま伝えます。」

伝令員はそう言うのと部屋を飛び出して行った。

これが、ハワイ陥落の原因になるうとはこの時、ニミッツをはじめ、誰も考えつかなかっただろう。

第七独立機動艦隊旗艦大和艦橋

「長官、お願いします。」

草鹿が言った。

「うむ、それでは命令を下す。第七独立機動艦隊はオアフ島に突撃せよ。」

小沢が言った。

「了解いたしました。全艦に伝えます。」

草鹿が答えた。

今回の作戦は第七独立機動艦隊はオアフ島に強襲上陸する事になっている。

オアフ島上陸時には富嶽戦略空軍も空襲する事になっている。

「長官、主砲射程内に入りました。」

有賀が言った。

「うむ。レーダー員、富嶽戦略空軍はキャッチ出来たか？」

小沢がレーダー員に聞いた。

「はい、今捕らえました。」

レーダー員が言うと、

「よし、全艦対地制圧射撃を開始せよっ！！！！」

小沢が言った。

「オイ、鉄砲。頼むぞ。」

有賀が砲術長に言った。

「任せてください。艦長。」

砲術長が言った。

「主砲発射くくく」

小沢が言った。

突如成層圏にゆづに達していよう高空から爆音が聞えた。

中島航空機の悲願であった、超重爆撃機富嶽である。

世界初及び世界最大となる、6発の爆撃機である。

爆撃機バージョンが100機、掃射機バージョンが100機の合計200機でオアフ島に爆撃を行うのだ。

オアフ島DHレーダーステーション

「お、おい！！！！これを見てみる！！！！」

マックレーダー員が同僚のレイヤーに言った。

「何だよ、マック。」

レイヤーが聞いた。

「これを見てみる、高度18000メートルを600キロで飛ぶ航空機を捕らえたんだぞ。」

マックが言った。

「本当か！？」

レイヤーが聞く。

「早くパールハーバー司令部に連絡だ！！！！」

「わかった！！！！」

レイヤーがマックに言われて連絡しようとしたが、それはかなわな

かった。

富嶽爆撃機バージョンの1機が1トン爆弾を投下し高度18000メートルからは信じられない正確さで、DHレーダーステーションに命中。

DHレーダーステーションは消滅した。

あつ、DHはダイヤモンドヘッドの事です。

DHレーダーステーションを破壊した富嶽戦略空軍はオアフ島全土に空襲を始めた。

富嶽爆撃機バージョンはその高空からは信じられない正確さで、次々と敵を吹き飛ばす。

富嶽掃射機バージョンは低空飛行(3000メートル)を行い、敵に機関砲弾の雨を降らす。

35ミリ機関砲弾はチタン被覆仕様のため、M4シャーマンの装甲を易々と貫通し、内部の人間を殺戮していく。

この富嶽戦略空軍の攻撃により、オアフ島の地上戦力は壊滅した。

飛行場から戦闘機が飛び立とうとするが、第七独立機動艦隊の五式弾により飛行場も壊滅。

そこに、連合艦隊と連邦商路護衛艦隊が支援する、陸軍上陸部隊がハレイワに上陸を始めた。

15個師団という大兵力が1点に集中上陸を始めたのでハレイワを防御するアメリカ軍は呆気に取られた。

小型舟艇による、上陸ではなく強襲揚陸艦がそのまま海岸に乗り上げるタイプだが、その内部からアメリカ軍が見たこともない、重戦車（20式重戦車）が現れた。

その後には大量のトラックや装甲車が上陸した。

アメリカ兵の思考はもはやパニック状態だ。

彼らは上官に日本軍はろくな戦車を保有せず、トラックや装甲車もなく完璧な歩兵だと。

ところが、蓋を開けると大量の重戦車やトラック及び装甲車が上陸してきたのだ。

狂気にとらわれた1人の兵士がバズーカを重戦車に向け発射した。

バズーカは確かに命中した、しかしその弾は

カーン

という音と共に弾き飛ばされた。

反撃は凄まじかった。

115ミリ砲の集中攻撃に米兵は襲われたのだ。

ハレイワ守備隊壊滅。

オアフ島パールハーバー司令部

「ニミッツ司令！……！日本軍がハレイワに上陸しました！……！」

伝令員が慌てて入ってきた。

「よし、オアフ島全軍はハレイワ守備隊の支援に迎え。」

ニミッツは言った。

「ニミッツ司令。ハレイワ守備隊は全滅しました。」

伝令員が言った。

「何！？」

ニミッツが聞いた。

「それとオアフ島全守備隊も敵の6発爆撃機により壊滅しました。」

伝令員が沈痛な面持ちで言った。

「日本軍のブシドーと言うものには感心します。」

伝令員が続ける。

「無防備都市を宣言したホノルルには機銃弾の1発も撃たれてないんです。」

「本当か？」

ニミッツが聞いた。

「はい。それと、オイル・タンクも全てノーダメージです。」

伝令員が言った。

「そうか……………」

ニミッツが言った。

「もう、是非もない。」

ニミッツは大きく息を吸うとある事を言った。

「降伏だ。」

ニミッツは言った。

第30話 ハワイ独立！！

昭和18年5月10日

ハワイ諸島は独立を宣言した。

先月の21日に陸軍15個師団がハレイワに、第七独立機動艦隊の1個師団がパールハーバーに上陸し、ニミッツの決断でハワイ諸島の守備隊は降伏した。

その後日本軍はオアフ島以外のマウイ島、カウアイ島、ハワイ島を占領し昭和18年5月1日ハワイ諸島全土の占領を宣言したのである。

その4日後、オアフ島民はカメハメハ大王の子孫である、ハメハメハ大王を首班としてもう1度ハワイ王国を建国したいと申し出てきた。

これに対し日本はまたしても、即答で独立を認める声明を発表した。

そして、昭和18年5月10日ハワイは全世界に向けてハメハメハ大王を首班としたハワイ王国の独立を宣言した。

戦後の話だが、ハメハメハ大王は日本のスパイではなかったのか？

という噂があつたが、その時の政府の統一見解として、ハワイ王国は純然たるハワイ王国国民の国である、と発表した。

昭和18年5月11日

ハワイがハワイ王国として独立を宣言した翌日。

第七独立機動艦隊はオアフ島パールハーバーにあつた。

ハワイ王国と安全保障条約を結んだ日本はハワイ諸島各島に基地を建設した。

そして、ハワイには在八大日本帝國富嶽戦略空軍基地が建設され、アメリカ合衆国は本土空襲も可能になった。

第七独立機動艦隊は日八安全保障条約の目玉として、配備された。

まあ、期間限定だが……………

オアフ島ホノルルホテル

この日は、日八首脳会談としてホノルルホテルで会談が開かれた。

日本からは近衛文麿内閣総理大臣及び山本五十六連合艦隊司令長官、
ハワイ王国からはハメハメハ大王及びニミッツ、ハワイ王国軍最
高司令長官が出席した。

「これは、これは、近衛総理遠路はるばるようこそ。」

ハメハメハが近衛に言った。

「いえいえ、ハワイ王国とは安全保障条約を結んでいるんですから気にしないでください。」

近衛が言った。

「まあ、そうですね。我が国としては早々に軍を創設しなければいけないんですが……」

ハメハメハが言った。

「なあに、気にせんでください。貴国の軍備が整うまで、我が国が安全を保障します。」

山本が言った。

「ハハハ、そうですね。我が国にはデーモン艦隊が配備されたんですから、アメリカも簡単に手を出さないでしょう。」

ニミッツが言った。

「ニミッツ君、デーモン艦隊ではなく第七独立機動艦隊と呼ぶように言っただろう。」

ハメハメハが注意する。

「はあ、すみません。なんとなく、デーモン艦隊の方が響きがいいので。」

ニミッツが照れながら言った。

「ハメハメハ大王、まあいいではないですか。ニミッツさんはハワイ王国軍最高司令長官にまでなってくれたんですから。」

近衛が言った。

確かに近衛の言う通りである。

ニミッツはハワイ基地司令であったが、先月の降伏の後捕虜となった。

そして、ハワイがハメハメハ大王を首班として独立する時に軍司令長官を任せられる者が居なかった時にニミッツに白羽の矢が立った。

ハメハメハ大王は自らニミッツにハワイ王国軍最高司令長官に就任してほしいと頼みに行った。

ニミッツはこの時、もはや本国に帰っても予備役にされるだけだと考え、ハワイ王国軍最高司令長官就任を承諾した。

これにより、ニミッツは捕虜収容所からハワイ王国府に出勤すれという事になった。

この他にも、元アメリカ軍の陸軍、海軍、海兵隊の人員がそれぞれハワイ王国陸軍、ハワイ王国海軍、ハワイ王国海兵隊として捕虜収容所から出勤している。

「まあ、そうですね。」

ハメハメハが言った。

「近衛総理、ありがとうございます。」

ニミッツが続ける。

「私はもはやアメリカ合衆国民ではなく、ハワイ王国民として生きていく覚悟です。その為、日本とは友好的な関係を築きたいと思えます。」

ニミッツは自分の意思を言った。

「ニミッツ君は凄いよ。アメリカ合衆国民だったのにハワイ王国民として生きていく覚悟を決めたんだよ。彼は凄いよ。」

ハメハメハが言った。

「ハメハメハ大王、貴国の安全は必ず我が軍が守ります。貴国の軍備が整っても我が国は毎年安全保障条約を自動延長します。それでよろしいですか？」

近衛がハメハメハに聞いた。

「はい、ありがとうございます。我が国も早く一人前の軍備を整え

ますが、これからも安全保障条約を自動延長してくれるのは大変嬉しくおもいます。」

ハメハメハ大王が言った。

その後、大日本帝國及びハワイ王国の間に安全保障条約が正式に結ばれ、大日本帝國はハワイ王国の防衛を引き受ける事になった。

しかし、この安全保障条約は国内で大きな反対があった。

なぜ、見ず知らずの他国の防衛を皇国が引き受けなければいけないのか？と。

しかし、これは天皇陛下の国際協力の一貫と、発表したため、国内の反対派は急速に衰えていった。

この時、ハワイ王国は建国して初めてという未曾有の危機を迎えているのを、まだ知らなかった。

第30話 ハワイ独立！！（後書き）

よくわかっていきます。ですから、独立愚連艦隊のパクリだとは言わないでください。

第31話 アメリカの秘策

1943年5月12日

サンディエゴ

この日のサンディエゴ港は騒然としていた。

何せアメリカ海軍の軍艦史上最大となる軍艦がサンディエゴにやって来たのだ。

ノーフォークで竣工した彼女は、遙々南アメリカ大陸を廻ってサンディエゴにやって来たのだ。

彼女の名前は『ユナイテッドステーツ』

日本でいう『大和』に並ぶ非常に重みのある、名前だ。

「やっと着いた。」

ユナイテッドステーツの艦橋に少女の声がした。

「そうだな、ステーツ。」

ユニテッドステーツの艦長である、メイヤーが答えた。

「メイヤー」

「何だい？」

メイヤーが聞いた。

「私は間に合わなかったのね。」

ステーツが悲しそうに言った。

「……………そうだな。」

メイヤーが言った。

「私はハワイを守るためにここまで来たのに、ハワイはもう占領されて、独立までしてしまったのよ。悲しいわよ。」

ステーツが泣きながら言った。

「……………」

メイヤーは何も言えなかった。

ステーツはただただ泣き続けるだけだった。

メイヤーは彼女を優しく抱きしめた。

サンディエゴ港

「如何ですか？大統領。」

海軍長官のノックスが聞いた。

「うむ、いい出来だ。」

大統領の「トルーマン」は言った。

なぜ、ルーズベルトではなく、トルーマンかと言えば。

ルーズベルトはデーモン艦隊の生存や欧州戦線の腑甲斐なさ、議会の追及、国内の支持率急落により狂気とかし、ハワイが占領された後に大統領執務室で拳銃自殺したのだ。

「このユナイテッドステーツを旗艦とした、特攻艦隊に頑張ってもらわねばいかな。」

トルーマンは沈痛な面持ちで言った。

「はい。史上初となる艦隊特攻でハワイを取り返してほしいと思います。」

ノックスも言った。

「彼らはの死は、無駄には出来ん。」

トルーマンはそう言うとホテルに帰って行った。

残されたノックスは

「許してくれ。」

そう言うと、彼もホテルへ足を向けた。

ユナイテッドステーツ会議室

ここに、新編成となったアメリカ合衆国海軍太平洋艦隊第二艦隊の面々が揃った。

第二艦隊の配備艦は、

超弩級戦艦ユナイテッドステーツ

軽巡洋艦ブルックリン

駆逐艦ドーナツ

駆逐艦ストーム

駆逐艦ピッチンガー

駆逐艦ゴープル

駆逐艦ダドレー

駆逐艦ジエーン

駆逐艦ロバート

駆逐艦ハミルトン

の合計10隻である。

「諸君、心して聞いて欲しい。」

第二艦隊司令長官のマクヴェイが言った。

「今回は会議ではなく、私の話を聞くだけでいい。」

マクヴェイは続ける。

「今回のハワイ強襲は、史上初となる艦隊特攻だ。」

マクヴェイが言うと、他のものが騒ぎはじめた。

「諸君らの気持ちは分かる。最後まで聞いてほしい。」

マクヴェイはそう言うと、また話始めた。

「艦隊特攻は、もはや生還出来ないかもしれない。」

「燃料も片道分だ。」

「我々はパールハーバーに停泊していると思われる、レンゴークンタイに砲撃を加え、最後にはオアフ島に乗り上げて浮き砲台となり、砲撃を続ける。」

「そして、最後は乗員全員が歩兵となり、白兵戦を挑む。」

「……………勿論、私が今言っているのは、キリスト教徒である、我々には当然理解しがたい行為だが、我々はそこまで追い詰められているんだ。」

マクヴェイは涙ながら話を続ける。

「我々は今から死に行くようなものだ。この艦にもまだ若い者が乗っていて、彼らも一緒に死に行かせねばいけないのは辛い、許してくれ。」

「諸君らも、道連れにしなければいけないのは辛い。だが、考えてくれ。」

「誰かがやらねばいけないんだ。」

もはやマクヴェイの目から滝のように涙が溢れている。

「だから、諸君らに48時間の猶予を与える。その間に自分の艦に戻り、意見を出してくれ。」

マクヴェイはそう言うと、最後にこう言った。

「共に、死ぬ覚悟が出来たら、こう言ってくれ。」

「ワシントンモニュメントで会おう。」と

マクヴェイはそう言うと、会議室を出ていった。

人間の彼等が会議をしている頃、艦魂の彼女達も会議を行っていた。

「……………と言っわけです。皆さん。」

ユナイテッドステーツの艦魂、アリサが言った。

「司令。」

軽巡洋艦ブルックリンの艦魂ユリが言った。

「何？」

アリサが聞く。

「私達は司令に着いていきます。例えそれが死への旅でも……………」

ユリが言った。

「私達もです。」

駆逐艦ドーナンの艦魂サラが言った。

その後ろには同じ決意だと言う、駆逐艦ストームの艦魂エレナをはじめ、リナ、ユキ、ナホ、キャシー、ヘレン、エリーがいた。

「みんな……………ありがとう。」

アリサは大粒の涙をみせた。

その夜

「さあ、皆で騒ぎましょう。」

アリサの音頭で宴会が始まった。

「どうぞ、司令。」

ユリがアリサにビール瓶を渡した。

「ありがとう。」

アリサはそれに一口口を付けた。

「司令。」

「なあに？」

アリサが聞いた。

「なぜ、大統領は大西洋艦隊を太平洋に連れてこないのでしょうか？」

ユリが言った。

「うーん。なんだろう。」

アリサは首をかしげた。

「日本は強いんですよ。ハワイも占領したんですから、いつ西海岸に上陸を始めてもおかしくないですよ。」

ユリが言った。

「確かにねえ。」

アリサが言った。

「でも、私達がハワイの日本軍をやっつけばいいんでしょう？」

アリサが言つと、

「失礼ですが、司令は本気でハワイの日本軍に勝てると思いますか？」

エリーが聞いてきた。

「？」

アリサの頭に多数の？が浮かぶ。

「ハワイには日本が誇るレンゴークンタイとデーモン艦隊がいるん

ですよ。しかもタイタンまでいるんですから。」

エリーが言った。

あつ、タイタンとはアメリカ軍が富嶽に付けたコードネームです。

「言うよね」

アリサが言った。

「……………」

エリーが呆然と見つめる。

「ゴメンゴメン、ジョークよジョーク。」

アリサが言った。

「確かに、無謀よね。いくら私が10万トンを超えたからと言って
も所詮、デーモン艦隊のヤマトには勝てないんだから。」

アリサが言った。

ここで、アリサ（ユナイテッドステーツ）の概要を説明すると、

全長340メートル

最大幅38メートル
満載排水量101500トン
速力28ノット
主砲46センチ連装4基8門
副砲18センチ連装2基4門
高角砲130ミリ連装両用砲20基40門
噴進砲10センチ6連装10基
対空機銃38ミリ4連装100基400門
オートジャイロ弾着観測機2機搭載

「しかし、司令。それでも行かねばならないのです。」

ユリが言った。

「勿論よ。日本にヤンキー魂を見せてやるわ。」

アリサが大声で言った。

「その意気です。」

ユリはそう言うと、笑った。

マクヴェイのほぼ一方的な会議から48時間が経った時、ユナイテッドステーツには第二艦隊全艦から、一言電文が届いた。

「ワシントンモニュメントで会おう」

マクヴェイは涙を流して感謝したという。

第32話 ハワイにて

昭和18年5月15日

アメリカの特攻艦隊が出撃を決めたその日。

ハワイは平和を享受していた。

しかし、敵が来ないからといって何もしない訳にはいかない。

もしもの時に備えて、ハワイ諸島全ての要塞化を急ピッチで行っている。

ハワイ要塞化には鈴木商店の土木会社が総動員され、工事が進められている。

まあ、要塞化と言えば聞こえが良いが要は、基地の建設とコンクリで海岸線添いを固めるだけであり。

そんな工事が急ピッチで進められている中、連邦商路護衛艦隊に護衛された輸送船団がパールハーバーに入港した。

「やっと、着いた」

少女が言った。

「ここがハワイか」

さて、この少女の正体は？

それはまだ……

輸送船団がパールハーバーに入港し、戦車を揚陸させた。

この戦車こそ、海軍と鈴木商店が共同で開発した『25式重戦車』である。

そして、先ほど登場したのが25式重戦車の『車魂』である。

「上陸」

彼女はそう言った。

「さて、私はハワイの基地と第七独立機動艦隊に配備されるのよね。」

「よし、第七独立機動艦隊の艦魂に会いに行こう！！！！！」

彼女はそう言うと、転移の光とともに姿を消した。

まあ、簡単に車魂の概念を説明すると。

- 一、車魂はその車種につき1人の車魂が宿る。
- 一、上記の通り車魂は車種につき1人の車魂が宿るために艦魂のよ

うに個別の車魂は宿らない。

一、車魂はその車体が存在する限り生存する。

一、車魂は特定の車体に宿るのではなくその車種全体の車魂として存在する。

一、上記の例を挙げると25式重戦車を1000台生産しても車魂は1人。

その1000台全ての車魂として宿る。

以上が車魂の説明である。

第七独立機動艦隊総旗艦大和

「由美」

今日も今日とて早紀と由美がいちゃついている。

「司令。やめてください。」

「またまたゝそんな事言つて」

「やつ……………そんな所……………」

「フッフ」

……………やれやれ。

と、そんな話をしていると転移の光が出現した。

「あつ、はじめまして。」

少女が声をかけた。

「!?!」

早紀と由美が呆然としている。

「あつ、すみません。私は25式重戦車の車魂です。」

「しゃこん?」

早紀と由美は共に叫んだ。

それから1時間後

第七独立機動艦隊の全艦魂が大和に揃った。

「そう、あなたは25式重戦車の車魂なのね。」

亜由美が言った。

「はい。」

彼女が答える。

「ちょっといいですか？」

喜恵が聞いた。

「はい。何ですか？」

「あなたに真名はあるのですか？」

喜恵が聞く。

「いいえ、ないみたいです。ですから作者さんは私を、彼女と表現しています。」

彼女が答えた。

「あら、それじゃあ。私達が考えていい？」

早紀が聞いた。

「あつ、はい。それはいいですが。」

彼女が答えた。

「じゃあ、沙織ね。」

早紀が言った。

「沙織……………」

彼女が考え込む。

「……………」

早紀が息を呑む。

「はい！！！！ありがとうございます。沙織。いい名前です、ありがとうございます。」

沙織が言った。

「決まりね、よろしくね。沙織ちゃん。」

早紀達が言った。

「はい、よろしくお願いします」

沙織が言った。

これが早紀達と沙織の出会いだった。

更に3日がたった、昭和18年5月18日

早紀達と沙織はとても親しくなった。

早紀達は沙織の自由な所が羨ましいみたいである。

早紀達はその艦に宿る艦魂の為、その艦から離れるわけにはいかないのだが、沙織は違った。

沙織はその車種全体の車魂として宿る為、本土の25式重戦車に宿ろうと思えば直ぐにいけるのである。

「沙織ちゃんはいいな〜自由で。」

早紀が言った。

「そ、そんな事ないですよ。」

沙織が言った。

「ウフフ、可愛いんだから。」

早紀の目が光る。

「早紀さん……………」

沙織がおじ気つく。

「もう、我慢出来ない!!!!!!!!!!」

そう言うと、早紀は沙織の鳩尾に鉄拳を食らわした。

「うつ!!!!!!!!!!」

沙織が倒れこむ。

「フッフ、楽しみましょう。」

早紀はそう言うと、沙織を連れて部屋へと消えた。

その頃、小沢達は富嶽掃射機バージョンからある通信を受け取って

いた。

「我、現在訓練中ノ富嶽掃射機デアル。ハワイオアフ島ノ北東約3500キロ地点ニ敵アメリカ海軍ノ艦隊ヲ発見。サンディエゴカラ出撃シテキタ模様。恐ラク、ハワイヲ目指シテイルモヨウ。」

アメリカ合衆国海軍太平洋艦隊第二艦隊（特攻艦隊）の発見であった。

第32話 ハワイにて（後書き）

うん。

どうでしょう？

車魂は……

設定が自由すぎますかな……

ご意見ご感想お待ちしております。

海軍だけでなく陸軍もまあ

まあ好きな007でした

第33話 ワシントンモニュメントで会おう

富嶽掃射機バージョンからの通信を受け、小沢と草鹿は議論を交わしていた。

「長官。どう思いますか？」

草鹿が聞いた。

「うーん。そうだな」

小沢が続ける。

「彼等は死を覚悟のうえで、ハワイに向かっているんだろう。」

小沢が言った。

「そうですね。」

「では、どうしますか？」

草鹿が聞いた。

「勿論、攻撃する。第七独立機動艦隊出撃だ。それと、機動群には艦載機の出撃を命令しろ。富嶽掃射機バージョンにもだ。」

小沢が言うと、参謀達は慌ただしく準備を始めた。

アメリカ合衆国海軍太平洋艦隊第二艦隊旗艦ユナイテッドステーツ
第二艦隊は高空を飛び続ける富嶽に対する、有効な手立てがなかった。

「艦長。タイタンに対する手立てはないのか？」

マクヴェイがメイヤーに聞いた。

「申し訳ありません長官。有効な手立てはありません。」

メイヤーが申し訳なさそうに言った。

「まあ、仕方ない。」

マクヴェイが言った。

その時。

「艦長。タイタンが降下を始めました。」

レーダー員が言った。

「何？本当か？」

メイヤーが聞く。

「はい。どうやらハミルトンに向かっているみたいです。」

レーダー員が言う。

「ハミルトンに！？」

ステーツ（アリサ）が言った。

「ステーツ。大変な事になったぞ。」

メイヤーが言った。

「……………」

ステーツ（アリサ）は何も言えなかった。

彼女は何か嫌な事を予感していた。

ステーツ（アリサ）の予感は的中した。

タイタンが降下を続け、遂に高度3000メートルになった。

その目前には駆逐艦ハミルトンが、

そして、タイタンがハミルトンの上空に差し掛かったその時！！！！

ズドドドドドドッ！！！！

タイタンの機体下が炎に包まれたかと間違えるほどの勢いで機関砲が発射された。

35ミリチタン被覆爆裂弾の威力は凄まじく、主砲塔はもとより艦橋や機関部にまで破壊し尽くした。

ハミルトンの艦上層部は鉄屑と化した。

「ッ！！！！！！」

ステーツ（アリサ）は唇を強く噛む。

「ステーツ。行ってやれ。」

メイヤーが声を掛けた。

「あの状況じゃ、ハミルトンの艦魂が心配だ。」

メイヤーが言った

「わかった。」

ステーツ（アリサ）はそう言うと、転移した。

駆逐艦ハミルトン

アリサがハミルトンに転移すると、そこは阿鼻叫喚の地獄絵図が広がっていた。

「うつ……………」

アリサは目を背けた。

駆逐艦ハミルトンの艦橋は艦長以下乗員の死体が転がっていた。

「司令。」

ユリが声を掛けた。

「エリー……!」

アリサがユリに近づくとエリーが血だらけでユリに抱き抱えられていた。

「エリー……!」

アリサが声を掛ける。

「し……れ……い……」

エリーが擦れ声で答えた。

「無理しないの……!」

アリサが言った。

「無理……なん……て……してま……せん」

エリーが答える。

「もう、喋らないの……!」

「だい……じょ……う……ぶで……す……ガハ

ッ！……！！」

エリーはそう答えたが、血を吐いた。

「もうっ！……！！」

アリサが泣きながら言う。

「司令！……！！タイタンが旋回してきます。」

サラ（駆逐艦ドーナン）が言った。

「し……れい……にげて……く……ださ……い」

エリーが言う。

「バカ！……！！逃げれるわけじゃない……！！」

アリサが言う。

「いい……え……逃げて……く……ださい……」

エリーが言う。

「なんで！……！！何でなの！？」

アリサが言う。

「司令！……！！早くお逃げください。タイタンが来ます。」

ユリが言った。

「嫌よ！……！エリーをほっていけるわけじゃない……！」

アリサが泣きながら言った。

「し……れい」

エリーが言った。

「何？」

アリサが聞いた。

「逃げ……て……くだ……さ……い……しれ……
……い……には……ま……だ……ハワ……イに行く……
……必要が……あ……りま……す」

エリーが言った。

「……」

アリサは答えられない。

「早……く」

エリーが言った。

「……許してね。」

アリサが言った。

「本当にごめん。」

アリサはそう言つと自分の艦に戻つた。

アリサが自艦に戻ると、タイタンが再びハミルトンに攻撃を始めた時だった。

「エリー……!……!」

アリサはそう叫んでいた。

駆逐艦ハミルトン

「しれ……い……皆……短い……間……だっ……」

……た……けど……ありが……とう……皆の……
……事は……忘……れ……ない」

エリーはそう言つと目を閉じた。

その直後、

ズドドドドドドドツッ……！！

再び、35ミリチタン被覆爆裂弾がハミルトンを襲った。

1度目の攻撃で弱っていた箇所により再び攻撃を受けたので、多数の箇所が破損した。

そして、主砲弾薬庫に爆裂弾が命中。

ハミルトンは大爆発を起こし、沈んでいった。

「エリー……！！……！！」

ステーツ（アリサ）はそう叫ぶと泣き続けた。

そこへ、第七独立機動艦隊の艦載機が高空から現れた。

第33話 ワシントンモニュメントで会おう（後書き）

うっ
うっ
うっ

自分で書いていて、泣けてきました。

悲しすぎる。

次回、第七独立機動艦隊艦載機による空

襲です。

第34話 轟沈

「ジェットです。デーモンからのザ・デスです。」

レーダー員が叫んだ。

「糞っ！！！！！」

マクヴェイが言った。

「全艦保てる火力を全てザ・デスに向ける！！！！！」

マクヴェイが命令を下した。

「エリーの仇！！！！！」

ステーツ（アリサ）は叫んだ。

突如、

ドグワアアアアン！！！！

アメリカ海軍の軍艦としては、史上最大の主砲46センチ砲が咆哮した。

しかし、悲しいかなアメリカ海軍は三式弾みたいな物を持っていない。

しかしながら、VT信管が46センチ砲弾には付いてある。

だが、VT信管とは自ら電波を発し、その電波が目標物に当たり、反射した電波を受信すると着火して砲弾を破裂させる、という仕組みである。

しかし、ひっくり返せば電波を反射せずに、吸収すれば、破裂しないということだ。

そこで第七独立機動艦隊の艦載機には電波吸収装置が取り付けられている。

「何！？VT信管が作動しないぞ！！！！」

マクヴェイが言った。

「もしや、ザ・デスには電波吸収装置が取り付けられているかもしれません。」

参謀の1人が言った。

「糞っ！！！！兵器の差が大きすぎる。」

マクヴェイが言った。

「艦長！！！！敵が何かを発射しました。」

見張り員が叫んだ。

「糞っ！！！！機銃、両用砲。撃て〜」

メイヤーが言った。

この時、第七独立機動艦隊の轟天と海王は空対艦ミサイルのみを装備して出撃していた。

そして、海王の前方を飛ぶ轟天が空対艦ミサイルを発射したのであった。

「命中します。」

レーダー員が叫んだ。

「ッ！！！！」

マクヴェイが唇を噛み締めた。

ドカアアアアアン！！！！

空対艦ミサイルが駆逐艦ドーナ、ストーム、ピッチンガー、ゴール、ダドレー、ジェーン、ロバートに命中。

駆逐艦全艦の艦橋に空対艦ミサイルが命中。

駆逐艦群は全て指揮能力を失った。

ユナイテッドステーツとブルックリンのみがノーダメージとなった。

「サラ、エレナ、リナ、ユキ、ナホ、キャシー、ヘレナ！！！！！」

アリサは叫んだ。

「ロケット弾の第二波が来ます！！！！！」

レーダー員が言った。

「面舵いっぱい。」

メイヤーが叫んだ。

しかし、その努力虚しくユナイテッドステーツに空対艦ミサイルが命中した。

「グハッ！！！！！」

アリサは横腹からの激しい痛みで倒れこんだ。

「ステーツ！！！！！」

マクヴェイが駆け寄る。

「大丈夫よ。安心して。」

アリサは言った。

「被害報告！！！！！」

メイヤーが叫んだ。

「対空機銃及び両用砲、噴進砲は全滅しました。我が艦の火力は主砲と副砲のみです。」

参謀が言った。

「そうか……………」

メイヤーが答えた。

「マクヴェイ。」

アリサが言った。

「何だ？」

マクヴェイが答える。

「作戦は続行よ。」

アリサが言った。

「勿論だ。」

マクヴェイが答えた。

「艦長、長官！！！！水上レーダーがデモン艦隊の主力を捕らえました。」

レーダー員が言った。

「糞っ！！！！」

マクヴェイが言った。

「ザ・デスが引き上げます。」

見張り員が言った。

「艦砲で止めをさすつもりだな。」

メイヤーが言った。

「仕方ないよ。」

アリサが言った。

「……………」

マクヴェイは黙ったままだった。

「リバイアサンが発砲しました。」

レーダー員が言った。

「くっ……………」

マクヴェイは死を覚悟した。

突如、

グワアアアアアン！！！！

という、音と共に第一砲塔と第二砲塔が吹っ飛び。

右に15度傾いた。

「!？」

マクヴェイは驚いた。

珊瑚海海戦ではリバイアサンの一撃でモンタナ級でも沈んだのである。

それなのに今、リバイアサンは1発しか撃ってきていない。

どういうことか？

「ハハハ、ステーツ。どうやら俺達はまだ死んでいないぞ。」

マクヴェイが言った。

「そう……………ね……………で……………も……………次は……………無理よ」

アリサが言った。

「わかってる。」

マクヴェイは続ける。

「すまないな、ステーツ。お前を死なせる事になり。」

マクヴェイが言った

「仕方……………な……………い……………わよ」

アリサが答えた。

その間にも傾斜は20度に達した。

「もう潮時かな？」

マクヴェイが言った。

「そ……………うね……………あり……………が……………とつ」

アリサが答えた。

「何を今更、こっちこそ。」

マクヴェイが言った。

「死ぬ……………と……………きも……………いつ……………しょ……………よ」

アリサが言った。

「ああ、勿論だ。」

マクヴェイが答えた。

「いつ……………ま……………でも……………いつ……………しょ……………」

アリサはそう言うと、マクヴェイにキスをした。

その瞬間、大和の放った砲弾がユナイテッドステーツに命中。

その弾は水中弾だった為に喫水線に命中。

ユナイテッドステーツは見事に横転した。

そして、ユナイテッドステーツは海中で大爆発を起こし、海底深く沈んでいった。

時に、1943年5月18日午後2時23分の事であった。

「司令~~~~!!!!!!」

ブルックリンの艦魂ユリは叫んでいた。

戦後の話だがこの史上初の艦隊特攻は、ステイブン・スパルバーク監督とクリントウーストウッド監督の2人（名前は誤記ではない。パレルワールドと言う設定であるから名前は少し違う）により映画化された。

題名は『MENS・OF・UNITED STATES』である。

この映画は世界中で大ヒットとなった。

第34話 轟沈（後書き）

リバイアサン 第七独立機動艦隊の水上艦

ザ・デス 第七独立機動艦隊の艦載機

デーモン艦隊 第七独立機動艦隊

本分中に出てきた電波吸収

装置は突っ込まないでください。

第35話 英霊よ永遠に

ユナイテッドステーツを沈めた第七独立機動艦隊は、ユナイテッドステーツの乗員の救出に当たっていた。

「長官。」

有賀が言った。

「何だ。」

小沢が聞く。

「彼等は何故ここまでしたのでしょうか？」

有賀が言った。

「そうだな。」

「大事な人を守る為かもしれんな。」

小沢が言った。

「大事な人を守る為ですか……………」

有賀が言った。

「ああ、そうだ。大事な人を守る為だ。」

「彼等は本土にいる家族、恋人、仲間を守る為にこのような事をしたのだ。アメリカはハワイを占領されて、本土空襲が現実味を帯びてきた。そこで、ハワイを奪還する為に、このような作戦をしたのだ。」

小沢が言った。

「大事な人を守る為に」

有賀が言った。

「お前も大事な人を守る為なら死ぬ覚悟はあるだろう？」

小沢が聞いた。

「勿論です。大事な人を守る為なら突撃でも何でもしますよ。」

有賀が言った。

「そうだろう。俺も同じだ。」

小沢が笑いながら言った。

「失礼します。」

草鹿が言った。

「何だ？参謀長」

小沢が聞く。

「生存者の救出。完了しました。」

草鹿が言った。

「よし。では、始めよう。」

小沢が言った。

この後の行動は鹵獲されたブルックリンの乗員が、戦後語っている。

「デーモン艦隊はユナイテッドステーツの生存者を救出したんだ。我々は、デーモン艦隊は死をもたらすだけだ。と教えられてきたのだが、どうやらそれは間違いだった。彼等は生存者を救出した後、海上慰霊祭を行ったのだよ。あれには感動したよ。デーモン艦隊全艦の乗員が甲板に集まり、ユナイテッドステーツの沈没位置に微動だにせずに、敬礼を行っていたんだ。しかも最敬礼。私は思わず見惚れてしまったよ。デーモン艦隊はデーモンではなかったんだよ。」

戦争だから彼等は戦いを行っただけだよ。」

このブルツクリンの乗員は、死ぬ間際にこのような言葉を残している。

「私は、特攻艦隊の生き残りとして、勇者と言われているが。本当の勇者は、戦場で死んだ彼等だ。」

この言葉を残し、彼は死んだ。

さて、ブルックリン以下駆逐艦群を鹵獲した第七独立機動艦隊は、ハワイに帰港した。

そこで小沢と草鹿は、近衛と山本そして、鈴木商店の金子にあった。

「おお、小沢に草鹿。ご苦労だった。」

山本が言った。

「ありがとうございます。長官。」

小沢が答えた。

「今回は凄いものを持ってきたぞ。」

近衛が言った。

「何ですか？」

草鹿が聞いた。

「なあに、そう焦るな。すぐ解ることだ。」

金子が言った。

「じゃあ、ホノルルホテルに行こう。」

近衛はそう言うのと車に乗り込んだ。

「ほら、早く乗れ。」

山本が言った。

「はい。しかし、大きい車ですね。」

小沢が言った。

「ああ、何でも豊田自動車の最新型らしいぞ。」

山本が言った。

「欧米のリムジンなどをモデルに、開発したんじゃない。」

金子が言った。

「何故金子さんが知ってるんですか？」

草鹿が聞いた。

「豊田自動車は鈴木商店系列の会社じゃ。」

金子が言った。

「まあ、早く乗れ。」

山本が言った。

「わかりました。」

小沢達はそう言うと、車に乗り込んだ。

ああ、勿論ながら。

豊田自動車は戦後のトヨタ自動車の事である。

戦後日本の会社は、その殆どが鈴木商店の系列になっている。

トヨタ自動車を筆頭に、いすゞ自動車・本田技研工業・日産自動車・任天堂・松下電器産業・日立製作所など、挙げ句の果てには三菱や三井等の財閥まで系列会社にしてしまったのだ。

しかもしかも、アメリカのビッグ3を筆頭にイギリス、フランスの老舗ブランド会社までも買収してしまったのだ。

これ以上言うと、第二部の楽しみが無くなるのでこれ位しておく。

ホノルルホテル

最上階の会議室に全員が揃った。

「さて、今回は第七独立機動艦隊にある物を取り付ける。」

近衛が言った。

「またパワーアップですか？」

小沢が聞いた。

「そうだ。これは金子さんに言ってもらおう。」

山本が言った。

「いや、ワシより詳しい人物を連れてきたからそやつに説明させよう。入ってこい。」

金子が言つと、

「失礼します。」

一組の男女が入ってきた。

「小沢長官、草鹿参謀長。はじめまして。天野といいます。」

「私は水香といいます。」

男女が言った。

「天野君は君の艦隊の兵器開発部門の部長だよ。」

山本が言った。

「そして、水香君は東京帝國大学校の工学博士だ。」

近衛が言った。

「てことは、我が艦隊の兵器は全て天野さんが開発したんですか？」

小沢が言った。

「そうだ。」

山本が言った。

「それはそれは。」

小沢が言う。

「まあ、それはさておき。本題に入る。」

「天野君、水香君。説明してくれ。」

金子が言った。

「了解しました。では。」

そう言うとき天野は、説明しはじめた。

「天野君。資料、資料。」

水香が言う。

「あつ。すいません。」

天野が慌てて配りはじめた。

「それでは、気を取り直して。」

今度こそ、説明をはじめ。

「今回、第七独立機動艦隊には原子力発電機を取り付けます。」

天野が言った。

「本来ならば、原子力機関を取り付けたいんですが。原子力機関を取り付けるには1年間の突貫工事が必要です。」

天野が言った。

「原子力発電機は、フィラデルフィア理論を使い空間移動をするためのエネルギーを発生させる発電機です。」

「これにより、原爆のエネルギーを得てから空間移動を行うのではなく。自分自身で自由に空間移動が可能になりました。」

天野が引き受ける。

「そして、原子力機関とは石油を使わずウランという物質を使うため、石油の給油がいらず航続距離が無限になります。」

「勿論、原子力発電機にもウランを使う為石油を使わずエネルギーを産み出す事が出来ます。」

天野と水香の説明が終わった。

「簡単に言えば、原子力機関は1年間の突貫工事が必要で搭載は無理。だから原子力発電機を搭載して、空間移動だけは出来るようにしましょう。てなわけか？」

小沢が言った。

「はい。そうです。」

天野が答えた。

「凄いいじゃないですか！！！！これで自由に空間移動が出来るんですから、敵の目の前に出現する事も出来ますよ。」

草鹿が興奮気味に言った。

「確かにそうだ。」

山本が言った。

「天野君。空間移動はどれくらい可能なんだ？」

小沢が聞いた。

「８０００キロは楽に移動出来ます。」

天野が言った。

「何！？８０００キロだと！？」

小沢が言った。

「はい。８０００キロです。西海岸で空間移動すれば東海岸に移動出来ます。」

天野が冷静に言った。

「凄い。」

小沢が言った。

「取り付けには何日かかるんですか？」

草鹿が聞いた。

「1週間もかからないと思います。」

水香が言った。

「ハハハ。これで第七独立機動艦隊の武勇伝がまた1つ増えたな。」

金子が笑った。

「確かにそうですね。」

小沢もそう言っていると笑った。

昭和18年5月25日

第七独立機動艦隊は原子力発電機を取り付けを終えた。

その日、在八大日本帝國富嶽戦略空軍が大挙出撃した。

アメリカ合衆国西海岸上陸作戦の前哨戦、アメリカ本土空襲作戦が始まった。

第35話 英霊よ永遠に（後書き）

よくわかっています。

ウランは満州

から発掘出来ると言う事をお願いします。

あまり、突っ込まないでください。

第36話 アメリカ本土空襲

昭和18年5月25日

在八大日本帝國富嶽戦略空軍がアメリカに向けて、出撃した。

爆撃機バージョン300機、掃射機バージョン200機の合計500機である。

爆撃機バージョンには新開発の、超大型焼夷弾を12発搭載している。

超大型焼夷弾は通常の焼夷弾を物凄く大型化したものである。

全長5・5メートル

重量4・5トン

全くもって、破格の大きさである。

そして、1番大事な事であるのが、爆撃目標であるが……

爆撃目標は……

ニューヨーク

何故に、ニューヨークかと言えば。

確かに、西海岸に上陸するのだから西海岸全土を空襲すればいいのだが。

それはそれ。

東海岸のニューヨークを空襲すれば、アメリカに富嶽の航続距離を知らしめてアメリカ国民に恐怖を与えと言っわけだ。

地図を見れば一目瞭然。

ニューヨークはワシントンD.Cよりも、更に東に位置する。

昭和18年5月25日深夜から翌5月26日の早朝まで、ニューヨークはそれはそれは凄い事になった。

25日の深夜に、ニューヨークに到達した富嶽戦略空軍は爆撃を開始した。

高度18000メートルからは信じられない正確さで超大型焼夷弾

が降り注ぐ。

勿論の事ながら、アメリカ軍も反撃に出るのだが。

高度18000メートルの高空。

新型のP51ムスタング（トルーマンの命令で早期完成）やF4U
コルセアがタイタン迎撃に出撃したが。

掃射機バージンの前に、全機撃墜された。

掃射機バージョンが敵機を撃墜している間に、爆撃機バージョンは
更に爆撃を続行。

ウエストサイド、イーストサイド等は壊滅。

ブルックリン橋、マンハッタン橋、ウィリアムズバーグ橋も超大型
焼夷弾の前に碎け散った。

そして、極め付けは何と言っても、エンパイアステートビルの崩壊
である。

この、アメリカの象徴とも言えるエンパイアステートビルの崩壊は
逃げ惑う、ニューヨーク市民が最後まで見届けた。

超大型焼夷弾15発の直撃を受け、エンパイアステートビルは崩壊
した。

そして、掃射機バージョンは敵機を撃墜した後、ニューヨークへの
攻撃を開始。

逃げ惑う市民を殺戮していった。

まだ、生き残っていた市民であるが。

多数の瓦礫の山と超大型焼夷弾による火災により、全員が死亡した。

富嶽戦略空軍はニューヨークへの攻撃を終えると、ハワイへの帰路に着いた。

その途中、まだ超大型焼夷弾を残していた富嶽が自由の女神にそれを投下。

自由の女神を破壊した。

富嶽戦略空軍は500機全機無事にハワイに帰還した。

このニューヨーク空襲により、ニューヨーク市民の死者は約20万人と言われる。

戦後にアメリカの民間団体が日本を提訴したが、アメリカ政府が民間団体に圧力をかけ、提訴を有耶無耶にした事もあった。

酷いようだが、これが勝者と敗者の格の違いというわけだ。

第36話 アメリカ本土空襲（後書き）

ヒヒヒ、アメリカ国民め。目標殺戮数100万。
メリカ。 小説の中ぐらいばこぼこにさせる。

覚悟しろ、ア

第37話 ノーフォークの悲劇

昭和18年5月28日

第七独立機動艦隊はサンディエゴの西1500キロの沖合いにいた。

「長官。準備完了です。」

草鹿が言った。

「よし。それではフィラデルフィア理論作動。」

小沢が言った。

「了解。フィラデルフィア理論作動!!!!!!」

草鹿が復唱した。

突如、第七独立機動艦隊の各艦から凄まじい光が発生した。

その光が消えると、そこには変わり無い海原が広がっていた。

さて、今回の作戦はノーフォーク軍港の壊滅と太平洋支援のに向かう大西洋艦隊の全滅。

この2つが目的である。

大西洋に来るには南アメリカ大陸を迂回しなければいけない、というアメリカの常識を根本から覆す作戦である。

何せチェサピーク湾にデーモン艦隊（アメリカ公称）がいきなり現れるのだから……………

ワシントンDCホワイトハウス

この日、アメリカ合衆国大統領のトルーマンは緊急の会議を開いていた。

文官ではハル国務長官とモーゲンソー財務長官が、軍人ではノックス海軍長官とスチムソン陸軍長官の4人が出席していた。

「……………以上がニューヨーク空襲の被害状況です。」

ハルの説明が終わった。

「なんと言う事だ。死者が約20万!？」

トルーマンが言った。

「はい。」

ハルが答えた。

「悪夢だ。」

トルーマンが言った。

「しかし、大統領。そう言っても何も始まりません。」

スチムソンが言った。

「確かにな。モーゲンソー、被害総額はどうか。」

トルーマンが聞いた。

「はい。これが被害総額です。」

モーゲンソーがトルーマンに書類を渡した。

「……………」

トルーマンはわが目を疑った。

まあ、そうだろう。

今の貨幣価値にすると……………

B2が10機位購入出来るかも……………

「大統領。我々としては現在建造中のミッドウェー級とモンタナ級全艦のキャンセルを提案します。」

モーゲンソーがそう言うと、

「何をバカな！！！！海軍が機能しなくなるぞ！！！！」

ノックスが叫んだ。

「しかし、海軍長官。今は軍より国民生活の方が先決です。」
モーゲンソーが続ける。

「私としては早急に日本と講和するべきだと思います。しかしそれは無理でしょうから、ミッドウェー級とモンタナ級全艦のキャンセルを提案したんです。」

「当然だ！！！！日本との講和など考えるものか。」

トルーマンが言った。

「……………仕方ない」

ノックスが言った。

「ありがとうございます。海軍長官。」

モーゲンソーが礼を言う。

「よし。それでは決まりだな。ミッドウェー級とモンタナ級全艦のキャンセルを大統領めい」

トルーマンが言い終わる前に秘書官が大統領執務室に飛び込んできた。

「何だね、いったい。」

スチムソンが聞いた。

「デーモン艦隊が……………デーモン艦隊がノーフォークに現れました。」

秘書官が言った。

「何!?!」

トルーマンはそう叫んだ。

ノーフォーク軍港

「主砲撃て〜」

有賀が言うと、

ズドオオオオオオン！！！！

51センチ3連装3基9門の主砲から五式弾9発がノーフォーク軍港に向かって発射された。

「全く。張り合いが無いわね。」

戦艦大和の艦魂である早紀が言った。

「全くです。」

25式重戦車の車魂である沙織が答えた。

「上空は轟天しか飛んでないし。」

早紀が言う。

「もう、大西洋艦隊は沈みましたからね。」

沙織が言った。

「全くよ。せっかく楽しめると思ったのに。」

早紀が言う。

確かにその通りだ。

アメリカ合衆国海軍の残された希望、大西洋艦隊は第七独立機動艦隊が空間移動したすぐ後に壊滅した。

空間移動直後の各砲塔射撃により大西洋艦隊の主力である、モンタナ級4隻とエセックス級10隻は一瞬で轟沈。

大西洋艦隊は2分で壊滅した。

死者数2万人。

残り78万……………

「おい、お2人さん。何を楽しそうに話している？」

小沢が言った。

「何でもいいでしょ。」

早紀が言う。

「あつ、小沢長官。ご苦労様です。」

沙織が言う。

「おお、沙織。頑張ってるな。」

小沢が言った。

なお、小沢にも車魂が見える。

車魂は通常は真名は無いため、普通に沙織と呼べる。

「はい。ありがとうございます。」

「ハハハ、沙織はかわいいな。」

小沢が言った。

「ロリコンがつ!!!!!!」

早紀が言った。

1943年でロリコンと言っ言葉……

気にしないで下さい。

「ひどい奴だな。」

小沢が言う。

「当然よ。」

早紀が言った。

「まあいい。」

小沢が続ける。

「そろそろ、帰るからアメリカの景色をよく観ておけよ。」

「もう帰るの？」

早紀が言った。

「ああ。大西洋艦隊は呆気なく壊滅したし、ノーフォーク軍港は見ての通りだからな。」

小沢が言った。

「確かに……………」

沙織が言った。

「じゃ、そう言う事だ。」

小沢はそう言うと、艦橋へ帰っていった。

「全く。あの馬鹿作者。もうちょっと詳しく書きなさいよ。」

早紀が言った。

「ちょ、早紀さん。本編でそんな事を言わなくても。」

沙織が宥める。

「大丈夫よ。今喋ってるのも、あの馬鹿が書いてるんだから。自分で自分を馬鹿扱いするなんて、正真正銘のドMね。」

早紀が言った。

「確かにそうですね。」

沙織が同意する。

「まあいいわ。もうすぐノーフォークにバイバイするんだから。」

早紀が言った。

「けど、もうちょっと詳しく書いてもらいたいです。」

沙織がそう言うと、第七独立機動艦隊の各艦が光に包まれた。

そして、第七独立機動艦隊はノーフォークから消えた。

ノーフォーク軍港及び大西洋艦隊壊滅。

第37話 ノーフォークの悲劇（後書き）

大西洋艦隊が壊滅したため、ドイツとの戦いまで海戦はありません。

これから多発するのは富嶽戦略空軍による空襲。 日

本の総力をあげてのアメリカ合衆国西海岸上陸作戦

そして、アメリカ合衆国降伏の決めてとなる原爆投下。

第38話 講和

昭和18年6月1日

第七独立機動艦隊はカナダのジェームズ湾に位置していた。

何故カナダのジェームズ湾にいるのかと言えば、カナダにいるロイヤルファミリーとチャーチル内閣との講和会議の為である。

勿論、アメリカとイギリスは同盟を結んでいるのだが、最近の日本軍の攻勢やアメリカ海軍の壊滅を受けてイギリスも日本と講和した方が得だと考えたのだ。

そして、鈴木商店のカナダ支店に掛け合い講和会議が決まったのだ。

そして、第七独立機動艦隊に政府代表として近衛文麿と豊田副武、日本軍代表として山本五十六、経済界代表として金子直吉の5人が出席する事になった。

会議場のオタワまでは早期警戒機星雲で向かう、一応念のために艦上戦闘機轟天20機の護衛を付けて。

オタワ、とあるホテル

近衛達が部屋に入るとジョージ五世とチャーチル首相が待っていた。

「いやゝ、遠路はるばるご苦労様でした。」

ジョージが言った。

「いやいや、イギリスとの講和とあつては疲れたなど言っている場合ではないです。」

近衛が言った。

「ワシは疲れたがな。」

金子が言った。

「ん！？金子じゃないか。」

ジョージが言った。

「おおっ！……ジョージじゃないか。」

金子が答えた。

「いやあ、君には世話になったな。」

ジョージが言った。

「なあに、気にするな。」

金子が言った。

「金子、ちょっと込み入った話がしたい。隣の部屋に来てくれ。」

ジョージはそう言うと隣の部屋に誘った。

「よし、わかった。」

金子が言った。

「ああ、近衛総理も来てくれ。」

ジョージが言った。

「わかりました。豊田君、後は頼んだ。」

近衛はそう言うと隣の部屋に行った。

「ハハハ、国王と金子さんはやっぱり仲が良い。」

チャーチルが笑った。

「そうですね。」

山本もそう言っていると笑った。

「長官。何故仲が良いんですか？」

豊田が聞いた。

「ああ、金子さんは鈴木商店の大番頭だろ。で、鈴木商店は戦前は世界中に支店を持っていた。そして、イギリスが一番多かったんだよ。」

山本が続ける。

「鈴木商店はロイド保険とも繋がりがあつた。ロスチャイルドとも繋がりがあつた。そして、自然と国王とも繋がりが出来たのだらう。私の考えだが、多分国王は日本に資本の移動を考えているだらう。」

山本が言つと、

「流石は山本長官です。我が国の考えをそこまで読んでいるとは……」

チャーチルが驚く。

「私の考えは、ロスチャイルドが本国陥落によりアメリカに食い込んだ。ロスチャイルド以外にも多数の資本がアメリカに食い込んだのだがアメリカ1国だけだと後の事が心配だ。そこでイギリス資本は日本に目を付けた。日本なら安心して取引が行えるからな。ロンドンが機能不全に陥った今、ニューヨークが世界唯一の巨大金融センターとして君臨し、世界的な金の流れを独占している。それに危機を感じたイギリスは日本にも一大金融センターを打ち建てるべきだと考えた。そして、東洋屈指の巨大巨大市場を作り上げ、ニューヨークにも対抗出来るように考えた。」

山本はなおも続ける。

「ところが、日本がニューヨークを空襲したためニューヨークまでもが機能不全に陥った。そこでイギリスは尚更日本に巨大金融市場の立ち上げを急ぐのだ。多分イギリスは東洋最大の外為銀行の香港上海銀行を日本に吸収させようと考えているはずだ。あそこは本国陥落に動揺しており落ち着く場所を探している。しかもイギリス陥落によって、大量の資金が海外に流出したからその資金も使える訳だ。」

「イギリスは既に戦後を見据えている。ヨーロッパのロンドン、南北アメリカのニューヨーク、極東の東京。この三ヶ所で世界経済を動かそうとしている。」

山本はそう言い切った。

「素晴らしい。流石は山本長官だ。私が言おうとしていた事を全て言ってしまった。凄い。」

チャーチルが称賛する。

「ありがとうございます。」

山本が礼を言う。

「私は嬉しい、こんな素晴らしい国と講和出来るとは。」

チャーチルが言った。

「では閣下。講和条約に署名を。」

豊田が言った。

「勿論だとも。」

チャーチルが言った。

これにより、大日本帝國とイギリスの間に講和条約が結ばれた。

大日本帝國はイギリス奪還支援の為、来月早々に第八特務機動艦隊を派遣する事になった。

そして、第二次日英同盟も同時に締結された。

大日本帝國はイギリス奪還支援の為、対米戦の早期終結を約束した。

例え何万と殺戮しようが……………

第38話 講和（後書き）

やっと、イギリスと講和出来ました。

これにより、

第八特務機動艦隊へ援英派遣！！英の守護神へ本格的に始まります。

そちらもよろしく願います。

第39話 西海岸上陸計画

昭和18年6月25日

料亭『赤松』にて会議が開かれた。

今回の会議は来たるべくアメリカ合衆国西海岸上陸作戦についての会議である。

「これはこれは、皆さんお集まりいただきありがとうございます。」

近衛が言った。

「まあ、そんな挨拶はなしにして早く始めようではないか。」

金子が言った。

「そうですね。では始めさせていただきます。」

近衛はそう言つと栗林に合図した。

「では最初に、陸軍の状況からお話します。」

栗林はそう言つと説明を始めた。

「今回はアメリカ合衆国西海岸上陸作戦と言う事で、陸軍は50個師団を投入します。そして20式重戦車と25式重戦車が主力の機

甲師団を各10個師団の合計70個師団で西海岸に上陸します。まあ、西海岸上陸と言っても西海岸全土を占領するのは確実に無理ですからカリフォルニア半島とロサンゼルス・サンディエゴ・ラスベガス位を占領出来ればたいしたものですよ。」

栗林が言い終えると。

「陸相の意見は誠に持って、的を得ている。アメリカは自分の国で戦うのだから確実に有利だ。我々も相当な被害を覚悟せねばいかんぞ。」

山本が言った。

「まあ、そうですね。」

近衛が同意する。

「では次は海軍の状況を。」

豊田が説明を始めた。

「海軍も今回の作戦には全艦を投入して作戦を行います。本土に1艦も残りません。連合艦隊・第七独立機動艦隊・連邦商路護衛艦隊を総動員します。第八特務機動艦隊は援英派遣ですからシンガポールで訓練の後にカナダへ向かいグ्रीトブリテン島への攻撃を行います。連合艦隊・連邦商路護衛艦隊の全艦にもフィラデルフィア空間移動機関を装備しましたので、空間移動が可能です。後、各艦隊の主力艦には航空機の空間移動を行う為の空間移動エネルギー投射パラボラアンテナを設置しましたので、航空機も空間移動が可能です。富嶽戦略空軍は先日から西海岸全土に対し、包括的な空襲を行

っています。上陸作戦時には敵兵力は多少は減っているでしょう。」

豊田の説明も終わった。

豊田の言った通り、富嶽戦略空軍は先週から西海岸全土に空襲を慣行。

18万の被害を与えている。

残り60万……

「そうかそうか、陸海空共に準備は万端じゃな。」

金子が言った。

「連邦商路護衛艦隊はどうですか？」

近衛が聞いた。

「大丈夫じゃ、既に出撃準備は完了している。後は作戦開始を待つだけじゃ。」

金子が笑いながら言った。

「解りました。流石は鈴木商店です。アメリカと講和した後のアメリカ力進出も上手く行きそうですね。」

近衛が言った。

「当たり前じゃ、我が鈴木商店はイギリスとの講和会議の後から戦後経済の事について、既に決めてある。東京に出来た東京証券取引所を通しアメリカとの講和後にアメリカ資本の買収を目指すのじゃ。香港上海銀行を我が鈴木商店が吸収した事により資金に大きな余裕が出来た。アメリカに進出したらUSスチールでも買収出来るじゃろ。」

金子が言うと、

「USスチールもですか!？」

山本が驚きの声を上げた。

「勿論、香港上海銀行を吸収し南方地帯の資本も鈴木商店傘下の鈴木銀行の物じゃ。野村證券やその他財閥の銀行も鈴木銀行傘下の鈴木銀行の傘下に入ったから鈴木銀行はモルガンスタンレーと同等、或いはそれ以上かもしれんな。ハハハ」

金子が言った。

「モルガンスタンレー以上……………」

蔵相の池田が呆然と答えた。

「モルガンスタンレー以上？」

未だにピンと来ていない豊田に池田が説明を始めた。

「アメリカでは預金を管理して融資する商業銀行と、株式や証券を引き受けて、その手数料を取る投資銀行に明確に分けられているんです。モルガンスタンレーは後者の筆頭で、アメリカ屈指の資金力を誇ってるんです。そのモルガンスタンレーと同等或いはそれ以上と言う事は鈴木商店傘下の鈴木銀行はとてつもない化け物ですよ。」

池田が言うと、

「……………」

豊田は顎が落ちたのか、口を開けたまま呆然としてしまった。

「日本とアメリカが講和すれば必ずアメリカ資本は日本資本の買収を考えるじゃろう。だから鈴木商店がUSスチールの1つ買収してやればモルガンスタンレーと言えども怖じ気つくと考えたんじゃ。」

日本にモルガンスタンレーと同等或いはそれ以上の銀行があればアメリカは無闇に日本資本買収を考えない、だからワシからアメリカ資本を買収してやるんじゃよ。USスチールを買収して混乱している間にエクソンでもモービルでもメリルリンチでもゴールドマンサックスでもボーイングでもグラマンでもロッキードでも何でもいい、用は何かしら買収してやればいいんじゃよ。アラスカの油田探掘会社と鉱山探掘会社は必ず買収してやる。」

金子が言った。

「凄………」

池田が続ける。

「財閥銀行の総力を上げてモルガンスタンレーに勝てるかどうか怪しいのに、鈴木商店の1銀行がモルガンスタンレーと同等或いはそれ以上なんて……………」

池田が言った。

「ハハハ。それと、皆の衆にはまだ驚くべき事があるぞ。」

金子はそう言つと仲居に呼んでくるように言った。

「誰が来るんですか？」

近衛が聞いた。

「まあ、慌てるな。」

金子が言った。

すると、

「失礼します。」

男の声が聞こえ2人の人物が入ってきた。

「お前達は……………」

栗林が驚いた声で言った。

そこには、死んだはずの

山下奉文と牟田口廉也がいたのだ。

「何故お前達がいるのだ？」

栗林が言った。

「それは、金子に聞いて下さい。」

山下が言った。

「説明しよう。あの1・3事件はこの2人ではなく海軍の嶋田と陸軍の辻が考えたのだよ。」

金子が説明を始めた。

「そして、それを知った我々はこの2人を匿う事にしたんだよ。あの事件で死んだのは嶋田と辻、それにこの2人の影武者だよ。」

金子が言い終えると、

「何とまあ。」

栗林が呆然とする。

「陸相、すいませんでした。」

山下と牟田口が謝罪した。

「何、丁度良かったよ。上陸軍の指揮官を誰にするか悩んでいたんだよ。2人には上陸軍の指揮官になってもらう。いいだろう?」

栗林が言った。

「ありがとうございます。」

山下と牟田口は礼を言った。

「よし、決まりじゃ。後はいつ作戦を開始するかじゃ。」

金子が言った。

「その日は、7月15日です。」

近衛が言った。

第39話 西海岸上陸計画（後書き）

次回第40話から、第八特務機動艦隊へ援英派遣！！英国の守護神としてのリンクを開始します。 始める始めると書きながら結局次回にまでもつれ込んでしまい、申し訳ありません。

第40話 アメリカ合衆国西海岸上陸作戦

昭和18年7月15日

ロサンゼルス沖

大日本帝國は国軍の総力を投入してアメリカ合衆国西海岸上陸作戦を慣行した。

第一波攻撃は陸軍20個師団、20式重戦車10個師団、輸送船1800隻、戦艦23隻、巡洋艦45隻、護衛艦船300隻、戦闘機・爆撃機・攻撃機・輸送機総数18500機に及ぶ、日本史上最大の作戦である。

連合艦隊旗艦長門

「全艦、対地制圧射撃を開始せよ。」

山本の命令が飛ぶ。

連合艦隊全艦が上陸予定地のロングビーチの防衛線に向け、攻撃を始めた。

そこには、戦車や重砲が配備されている事は先日の偵察で解っていた。

「長官、遂に始まりましたね。」

宇垣が言った。

「そうだな。大国アメリカに一石を投じたのだ。これは凄いぞ。」

山本が言った。

「確かに、我々はアメリカ占領の第一歩を踏み出しましたね。」

宇垣が答えた。

「ハハハ、我々は逆黒船だな。」

山本が笑いながら言った。

「黒船ですか？」

宇垣が聞いた。

「ああ、黒船だ。その昔ペリー提督率いる黒船が……まあ巡洋艦だな……日本に来たではないか。その黒船に負け、日本は開国し日米修好通商条約を結んだな。今回の逆黒船は、アメリカとの講和するのが目的だ。まあ、アメリカ上陸を頑張ろうではないか。」

山本が言った。

「はい。頑張りましょう。」

宇垣が答えた。

第七独立機動艦隊旗艦大和

ズドオオオオオオン！！！！

第七独立機動艦隊の全艦もロサンゼルスของ 롱ビーチへの対地制
圧射撃を行っていた。

「長官、嶺花の報告によるとロングビーチに配備されている戦車や
重砲は破壊しつくしたみたいです。」

草鹿が言った。

「そうか。富嶽戦略空軍と海軍全艦がロングビーチを攻撃したんだ。
しかしもう壊滅したか。」

小沢が言った。

「最近のアメリカは腑甲斐ないわね。」

早紀が言った。

「大和もそう思うか……………」

小沢が言った。

「私もそう思います。」

沙織が言った。

勿論の事ながら、第七独立機動艦隊の陸戦隊も上陸作戦に参加する。

「ハハハ、そうだな。沙織もそう思うか。アメリカも大変だな。」

小沢が言った。

「アメリカ没落が始まったと言う事ね。」

早紀が言った。

「そうだな。アメリカも大変だな。」

小沢がそう言っていると、

「長官！！！！対空レーダーがアメリカ本土からの大編隊を捕らえました。」

レーダー員が言った。

「何！？大編隊？どれくらいの規模だ？」

草鹿が聞いた。

「約200です。」

リーダー員が言った。

「200!？」

草鹿が叫んだ。

「落ち着け、参謀長。」

小沢が言った。

「リーダー員、機種は特定出来るか？」

小沢が聞いた。

「多分、全てがドントレスです。」

リーダー員が言った。

「ドントレスだけ？」

草鹿が言った。

「何か匂うな……………」

小沢が言った。

事実、小沢の言った事は現実の通りとなった。

連合艦隊旗艦長門

「全艦持てる火力を敵機に向ける！！！！」

山本が叫ぶ。

先ほど、第七独立機動艦隊が捕らえたドントレスは連合艦隊、連邦商路護衛艦船の護衛する陸軍輸送船団に自爆攻撃を行い始めた。

第七独立機動艦隊から敵大編隊を捕らえたとの連絡を受けた連合艦隊は、一応の対空戦闘態勢に入った。

すると、敵機が急降下を始めた。

猛スピードで急降下する敵機に山本達は、呆気にとられた。

5000を切り、4000、3000と降下して、ついには1000を切った。

しかし、敵機は急降下を続ける。

そして、3機が陸軍が乗っている輸送船3隻に命中。

3隻はすぐ間に轟沈した。

山本達は立ちすくんだ。

キリスト教の米兵が自爆攻撃を行ったのだ。

しかも、次々と残りの敵機が急降下を始めた。

山本はそこで、

「全艦対空戦闘開始！！！！」

そして、先ほどの山本の命令に戻る。

「しかし、長官。まさかアメリカがこのような愚策を行うとは……」

宇垣が言った。

「ああ、まさかアメリカがな……………」

山本が続ける。

「しかし、そのまさかだ。現にアメリカはその自爆攻撃を行った。油断は禁物だぞ、参謀長。」

「了解いたしました。」

宇垣が答えた。

その後、連合艦隊・連邦商路護衛艦隊は正々堂々とドントレス大編隊と戦った。

そして、第七独立機動艦隊も支援に駆けつけ全機を叩き落とした。

悪夢は去ったのだ。

しかし、山本は思った。

「これから先も、あのような攻撃があるのか……………」
と。

第41話 ロングビーチ上陸

昭和18年7月16日

すべての予備攻撃をおえると、日本軍は上陸作戦を開始した。

1800隻の輸送船団が、すべて複数の大発を積んでいる。

これはデリックで降ろすようになっている。

これは日本陸軍が発明したすぐれた上陸用舟艇で、9・5トン、8ノット、完全武装の兵士70人を乗せられる。

米軍は、のちにこれを手本としてLCVPをつくったほどである。

これらがいつせいに列線をなし、ロングビーチを中心として、サンタモニカビーチまでの広い海岸線に向かった。

各師団が上陸地点を振り当てられ、最も重要だと目されるロングビーチには、山下大将指揮の近衛師団が向かった。

これを援護する母艦機が飛来して、米軍の抵抗をくじきにかかった。

さらに富嶽までその姿を見せたので、その掃射機の恐ろしさを知っている米兵は、それだけで戦意を喪失してしまった。

しかし、なんといっても祖国にはじめて敵が上陸するのである。

これが意味するものは大きい。

指揮官から、はげしい叱咤を受けた兵士たちは、生き残った塹壕やトーチカにたてこもり、ジャップの上陸用舟艇の接近を待った。

これもまた、やはり史実のノルマンディー上陸作戦の裏返しだといっている。

ロンメルが『大西洋の防壁』と豪語したノルマンディーの海岸防壁は、資材不足のためじつは貧弱なもので、ドイツ空軍の援護もなくドイツ軍の頭上を飛び回るのは、敵機ばかりだった。

しかし、ドイツ将兵は猛然とこの敵に立ち向かった。

いったん、フランスに上陸を許したらこの戦争は負けであることを、一介の兵士すらよく知っていたのである。

彼らは必死に戦い、そのため攻撃正面のオマハビーチで、主力のアメリカ第1師団は壊滅に瀕してしまった。

作戦司令部は、いったんは作戦失敗を覚悟したほどである。

だが、米兵もしぶとかった。

最後の勇気をふりしぼってコンクリの巨大な防壁を爆破し、怒濤のごとくドイツ軍防衛線になだれ込む。

このありさまは、映画『史上最大の作戦』に詳しく描かれている。

また、ドイツ軍の防御砲火がいかに猛烈なものであったかは、スピルバーグの映画『プライベート・ライアン』を見るとよく分かる。

後者の、その戦闘描写のリアルさに誰しもがぶっ飛んだものだ。

いかにCG効果の技術があるにしろ、どうやって撮影したのかと思わせる凄惨な描写の連続である。

冒頭の20分の上陸シーンを見るだけで、映画1本分の価値がある。

まあともかく、いま米軍もロングビーチで正念場を迎えていた。

合衆国史上はじめて、敵兵に国土への上陸を許すかどうかの瀬戸際である。

正規兵、民兵を問わず、猛然な闘志を燃やし始めたのは当然だった。

少数残った重砲、各種野砲、迫撃砲が満を持して、日本軍上陸用舟艇が接近するのを待ち構えていた。

機銃座も十字線を形成して、待ち構えていた。

日本軍も、それは承知のうえである。

しかし、ここでひるんでは遙々太平洋を越えてやってきた甲斐がない。

かくして、両者の猛烈な闘志が激突する修羅場が出現した。

日本軍の上陸用舟艇をじゅうぶん引き付けておいてから、米軍指揮官たちは

「撃て！！！！」と絶叫した。

米軍の持つあらゆる火器が火を吐いた。

たちまち、砲弾が命中してひっくり返る大発。

宙に舞う兵士たちが続出した。

その兵士たちの手足は、ばらばらにちぎれていた。

まさに地獄図である。

それを見て、頭上の母艦機が敵陣に機銃掃射をくわえる。

艦爆までやってきて、爆弾を叩きつけた。

さすがに米軍の反撃はゆるみ、その隙に残った大発は、ビーチに殺到した。

上陸作戦というものは、上陸するときがもっとも危険である。

いわば、裸の身を敵にさらすからである。

狼の大群に羊の大群が立ち向かうようなものだ。

もっと言えば、美少年を痴女の集団に立ち向かわせるようなものだ。

後者の結果は……………

まあ、想像にお任せします。

大発が各ビーチに乗り上げ、前扉がばたりと前に倒れ、どっと兵士たちを吐き出した。

この前扉をもつのが大発のすぐれた点である。

LCVPもそのまま真似をした。

重機をもった兵士たちが散らばって、腹ばいになり、援護態勢をとるなかを兵士たちは軽機を抱えて突撃する。

しかし、そこに米軍は最後の反撃を試み、再びあらゆる銃砲火が集中した。

兵士たちは凶弾に倒れていく。

この様子を見て、上空を旋回していた支援の富嶽が降下してきて、得意の掃射を敵陣に加えたからたまらない。

以前に、1度これを味わったことのある米兵の戦意はここにおいて崩れ、指揮官の制止も振り切って陣地を放棄した。

なにしろ、35ミリチタン被覆爆裂弾を1発浴びれば、人体など吹っ飛んでしまうのである。

ここに米軍防衛線は、ビーチ全線において大きなほころびがいくつも生じ、日本兵はそこに突入した。

最前線が崩壊したという報告を受けて、ブラッドレーは、やむなく第2線への後退を命じた。

ロサンゼルスはただっ広く平坦な町で、高層ビルといえばダウンタウンにしかない。

ブラッドレーはコロシウム、映画スタジオ、ホテル、南カリフォルニア大学などに抵抗拠点をつくるよう命じた。

残存戦車と重砲をここに配置した。

また市街北部にあるグリフィス・パークには重砲を運び上げ、砲台とするように命じた。

高地から撃ち下ろす弾は、すこぶる威力があるので、日本軍もこれには閉口するだろう。

このとき、ようやく内地の陸軍基地から爆撃機が自爆攻撃にやってきたが、全機叩き落とされた。

なにしろ、日本機は18500機という膨大なもので、それに富嶽戦略空軍が加わっている。

旧式の陸軍機がかなうはずもなかった。

その間に、日本軍は続々と上陸、フリーウェイ405線までに進出した。

その兵力は陸軍10個師団、第七独立機動艦隊の1個師団。

強固な橋頭堡を築くのに十分である。

しかしまだ沖合いの輸送船団には、さらに陸軍10個師団と20式重戦車10個師団が上陸を待ち構えている。

これらの輸送船団は任務を果たすと、ハワイに戻り、後続の陸軍30個師団、25式重戦車10個師団を運んでこなければならないので、すこぶる忙しい。

ロサンゼルスでは、その日1日かけて、日本軍は上陸を完了。

ロサンゼルスの海岸線一帯に、強力な橋頭堡を築いた。

特殊工作艦がハーバーに入り、20式重戦車10個師団と重砲を揚陸させた。

これで、本格的にアメリカ本土上陸を果たしたといっている。

上陸作戦が成功するか否か、その確率は大抵は半々となっている。

決して樂觀視してはいなかった。

なにしろ不敗の大国、アメリカに上陸するという前代未聞の大作戦だったからである。

日米軍司令部双方にとって、史上最長の1日となったが、ブラッドレー中將から電話がかかり、

「ロサンゼルス海岸線に上陸を許し、橋頭堡を築かせてしまった」

という報告を聞いたマーシャル陸軍参謀総長は、ブラッドレーを怒鳴りつけたいのをやつところであつた。

かわりに命令を下すしかなかった。

「上陸させてしまったものは、仕方がない。だが、なんとしてもロサンゼルスを守りしる。各州から州兵を送る。ロサンゼルスに包囲網をそれによつて完成せよ。鋼鉄の輪をつくり、敵をじりじりと締め上げるのだ。」

マーシャルの言葉は勇壮だが、日本軍の勇猛さと実力を知っているブラッドレーは、素直に分かりましたという気にはなれなかった。

「州兵では、その任務はまことに心もとないですな。正規師団の補

充はまだですか？」

「……うむ、もう1ヶ月の時間が必要だ」

そう答えながらマーシャルは、ノーフォークに足止めを食らっているパットン軍を派遣する事を考えていた。

パットン軍はイギリス奪還の為にノーフォークに集結していたが、デーモン艦隊の攻撃により、ノーフォークは壊滅。

パットン軍はイギリスへの足を失った。

そのパットン軍を使わないのは宝の持ち腐れだとマーシャルは考えていた。

「分かりました。全力をつくします」

ブラッドレーとしては、そう答えるほかはなかった。

「後書きコーナー」

作者

「どうも、皆さん。お久しぶりの後書きコーナーです。」

早紀

「全く、さぼりやがって。罰だ！……！」

作者

「何で久しぶりなのに51センチ砲が……！」

早紀

「死ねえ……」

作者

「ギャ……」

沙織

「早紀さん、作者さんを始末したら何の為の後書きコーナーか解らないじゃないんですか？」

早紀

「大丈夫よ。この作者はメモに書いているはずだから。」

沙織

「そうなんですか？」

早紀

「そうよ。あつ、これだこれだ。」

沙織

「何が書いてありますか？」

早紀

「え〜と、まずは読者の皆様に。次回からは陸戦がメインになりますから、海軍からは離れます。その為、艦魂ではなく沙織様、車魂が本格的に出ます。その事をよろしく願います。それと、今回のように次回からも説明文モドキになりますが、ご了承ください。だつて」

沙織

「やった、私がメイン。」

早紀

「沙織ちゃん！！！！！」

沙織

「はい！！！！」

早紀

「私の前でメインになったからって喜びやがって！！！！」

沙織

「すいません！！！！」

早紀

「許さない! ! ! ! !」

沙織

「いや~~~~~」

亜由美

「まあ、これからもよろしくお願いします。」

第41話 ロングビーチ上陸（後書き）

次回は沙織様とM4シャーマン、M26パーシングが激突です。

第42話 25式重戦車VS・M26パーシング

1943年7月20日

マーシャルは約束どおり、中西部の州から州兵をかき集め、ロサンゼルスに送った。

パットン軍も大陸横断鉄道を爆走してロサンゼルスに到着した。

しかし、マーシャルのいう日本軍を締め上げる鋼鉄の輪を形成するにはほど遠い実力だった。

たしかに、州兵のもととなった民兵はアメリカのよき伝統だが、なにしろウィークエンドしか訓練しない。

正規兵とはまったく鍛え方がちがう。

おそらく、富嶽に掃射されたら仰天して、逃げ出すだろう。いっぽう日本軍は16日から20日の4日間に残りの陸軍30個師団と25式重戦車10個師団をロサンゼルスに揚陸させた。

第七独立機動艦隊の1個師団は陸戦隊2個大隊と25式重戦車2個大隊で1個師団と言っていた為、25式重戦車10個師団をその指揮下に入れた。

作戦は、ロサンゼルスを突破したのちにラスベガスにまずは進出する予定である。

ここにはいくつかの飛行場があるので、それを拡張して、基地航空

隊を置く。

また富嶽の中継基地とする予定である。

このあたりは砂漠だから、土地はいくらでもある。

もともと、ラスベガスはガラガラ蛇と少数のインディアンしか住んでいない不毛の土地だった。

このラスベガスを占領したのちに、カリフォルニア半島制圧を行うのである。

その後、東部空襲を徹底的に行い最終的には原爆を投下する。

これが全体的なアメリカ占領作戦の骨子である。

日本軍が上陸するとあらためて戦闘序列を整えなおし、巨大な日本軍の兵力が米軍の第二防衛線……事実上、最終防衛線をつぶしかかった。

今回は25式重戦車、155ミリ榴弾砲が主たる武器で、艦載機と富嶽がそれを支援していた。

ブラッドレーは、

「敵の前線に戦車が現れました」

という報告を受け、ブラッドレーは胸騒ぎをおぼえた。

日中戦争やハワイ戦において、日本軍は強力な戦車を投入してきた。そして、M26パーシングという重戦車を開発してパットン軍に与えていたのだ。

ブラッドレーは半信半疑ながらパットンの勝利を願った。

ロサンゼルス市街

パットンは全軍をロサンゼルス市街に拡散して配置していた。

「日本軍の動向はどうだ？」

パットンが聞いた。

「はっ。もうすぐ報告が入ると思います。」
参謀が答えた。

「そうか……………」

パットンが言うと、

「中将！！！！大変です！！！！」

伝令が司令部に駆け込んできた。

「何だ？」

パットンが聞くと、

「敵の戦車は我が軍のM26パーシングよりも巨大な戦車です。」

伝令が答えると、

「私より巨大！？」

少女が言った。

「そうみたいだな、アリア。」

パットンが笑いながら言うと、

「バカ！！！！私より大きいってことは装甲が厚く、巨大な砲を積んでいることよ。」

アリアが言った。

「確かに。」

パットンは続ける、

「ともかく、重砲でその戦車を叩け。」

「了解いたしました。」

伝令はそう言いつと飛び出していった。

「全く、呑気なものよ。私は負けても工事に戻るけどあなたは死ぬのよ。それを覚えておいて。」

ああ、このアリアはM26パーシングの車魂です。

「大丈夫だよ、アリア。俺は死なない。作者がそう言っていた。なんでもドイツとどうたらかんたらって。」

パットンが反論した。

「そう、それならいいわ。」

アリアは答えた。

「ハハハ、よし作者。説明に戻ってくれ。」

……………私が書いてるんですけど。

では。

日本軍も重砲で応戦、しばらくは壮絶な砲撃戦となった。

この小説のなかの日本軍は弾惜しみをしない。

史実の日本軍は、弾の数がかぎられており、1発ずつ数えながら撃つような情けない有様だったが、鈴木商店やその他軍需産業が各種砲弾の大量生産を行っており、湯水のごとく使える。

ここを先途に撃ちまくった。

米軍も、もとより物量においては劣らない。

数時間にもおよぶ砲撃戦となった。

ブラッドレーは、西海岸のすべての重砲をすでにロサンゼルスに移動させていたので、当然である。

敵の反撃が執拗なので、業を煮やした松井司令部では、富嶽の出撃を要請した。

ハワイから富嶽爆撃機バージョン50機が出撃、5時間ほどで到着すると、敵の砲兵基地めがけて1トン徹甲弾をばらまいた。

これは効いた。

1トンもの爆弾を食らうと、直径30メートル以内のものすべてのものが消滅してしまう。

それほど威力のあるものである。

敵の砲撃が沈黙すると、戦車隊を先に立てて、各師団は進撃を開始した。

山下大将の指揮する第1軍はダウンタウン。

牟田口中将の指揮する第2軍は市街北部。

佐藤中将の指揮する第3軍は、市街南部。

朝来少将の指揮する第七独立機動艦隊師団は、敵戦車の撃滅。

これにより、全市を制圧する肚である。

ロサンゼルスは、衛星都市に囲まれているが、それらの制圧は次の段階となる。

米軍は、まさにその衛星都市を拠点としたのである。

パサデナ、グレンデール、アナハイム、サンタアナ、ノースハリウッドといった街である。

米軍もM26戦車を繰り出して抵抗した。

朝来師団

今回は25式重戦車10個師団も指揮下に入れた朝来師団は敵戦車の撃滅を目指してロサンゼルスへ進撃していた。

朝来師団長車

朝来は他の兵と同様、戦車に乗って指揮を行っていた。

「師団長、敵の新型です。」

車長が言った。

「ふむ、日米新型対決か。」

朝来が言った。

「勿論、私が勝つけどね。」

沙織が言った。

「そうだな。」

朝来が言う。

「敵発砲。」

車長が言った。

「うむ。」

朝来が言つと、

カーン

乾いた音と共に敵弾が弾かれた。

「ふう、ちよつと痛かったかな。」

沙織が言つた。

「装填手、砲弾装填。弾種、徹甲弾。」

「徹甲弾、了解。」

「砲手、右端の戦車をねらえ。目標、砲塔基部」

矢継ぎ早に命令を下す、朝来。

「撃て！！！！」

耳をつんざく音と共に徹甲弾がM26目がけて発射された。

ドガアアアアアアン！！

ものの見事にM26の砲塔は吹っ飛んだ。

凄まじい命中率だ。

流石は三式射撃レーダーを小型化して搭載しただけのものである。

「砲手、見事だ。」

朝来が言った。

「ありがとうございます。」

砲手が礼を言う。

「私って強いよね。」

沙織が言った。

「ああ、もちろんだ。」

朝来が言う。

25式重戦車はその後、M26戦車を壊滅させた。

パットン軍

パットンは例によって機銃装備のジープに乗り、指揮をとっていた。

「何て奴だ。日本の新型は化け物か！！！！」

パットンが叫んだ。

パットンには目の前の光景は信じられなかった。

アメリカの希望、アメリカ最大最強のM26パーシング重戦車が目の前で次々と壊滅したのだ。

そりゃそうだ、ドイツ軍との戦いの為にT10重戦車を元に考えたんだ。

M26パーシングなどおもちゃ当然だ。

すくなくとも、25式重戦車とM26パーシングでは25式重戦車の方が、2世代は進歩していた。

戦車の世界では、2世代の性能格差は決定的で勝負にならない。

1世代ですらそうである。

湾岸戦争で、イラク軍のソ連製のT70がアメリカの最新鋭エイブラムスに一方的に撃破されたことを見ても分かる。

「悪夢だ。」

パットンは言った。

「日本とは戦争していても意味がない。早期講和だ。」

パットンはそう考えていた。

まあ、なにはともあれロサンゼルスは日本軍の手に落ちた。

次なる目標は、ラスベガス

第42話 25式重戦車VS・M26パーシング（後書き）

M4シャーマンは降板させました。

次回はラスベガス攻略戦です。

お楽しみに。

第43話 急激な方針転換

昭和18年7月25日

皇居にて緊急の会議が開かれた。

「今日はいきなり集まってもらいすまない。」

近衛が言った。

「ワシら鈴木商店のプロジェクトチームが今後のアメリカ進行について検討していたが、ある結論に至ったのじゃ。」

金子は続ける。

「その結論は、原爆投下によるアメリカとの早期講和じゃ。」

「何ですって!？」

山本が言った。

「どういうこと何ですか？」

栗林が聞いた。

「うむ、それは今から説明しよう。」

金子はそう言うと、高畑に説明を始めさせた。

「我が社としましては、アメリカ本土進行作戦が決定した時点で、日本軍の被害をシミュレーションしてみました。」

高畑が資料を配る。

「ご覧ください、アメリカの被害は別に気にしませんが、日本軍の被害は30万と結果が出ました。」

「しかし、戦争だから仕方ないのではないか？」

栗林が言った。

「確かにそうですが、作者はアメリカだけを叩き潰そうと考えています。そこで日本軍にも30万の被害が出れば意味がない。その為、急激な方針転換をしなければいけなくなりました。」

高畑が言った。

このシミュレーションは私が本当にやりました。

アメリカの兵力と日本の兵力、武器の差、両軍の士気、地形、補給線の維持など考え付くだけの物を数値化して図上演習を行い導きだしました。

サイコロを振って決めるといふ。

結構楽しかったです。

「その、急激な方針転換とはなんだね？」

豊田が聞いた。

「はい、アメリカ本土への原爆投下です。」

高畑が言った。

「何！？原爆投下だと！？」

山本が叫んだ。

「そうです。ヒューストンにでも落としてやればアメリカも講和を考えますよ。」

高畑が言った。

「確かに、地上戦を行いながら東部を目指すのは骨が折れるからな。」

山本が言った。

「そうです。計画は、明日の正午に陛下にアメリカに対し降伏勧告を行って貰います。それで、6時間以内に降伏を受け入れなければヒューストンに原爆を投下すると言うのです。そして、6時間以内に降伏しなければヒューストンに原爆投下。そうすればアメリカも日本が本気だと考えます。そして、更に6時間以内に降伏しなければ、今度はワシントンに原爆を投下すると言うのです。そうすれば、アメリカも降伏を受け入れますよ。そうすれば万事うまくいきます。」

」

高畑が言った。

「朕は、もはや戦争なぞ望まん。例え原爆を使おうとも戦争を早期に終結させるのだ。ヨーロッパの方もナチスが占領しているがヨーロッパも原爆を投下して終結させるのだ。スターリンとはもう合意してある。」

天皇裕仁が言った。

「お上、スターリンと合意してあるとはどういう事でしょうか？」

山本が聞いた。

「ああ、アメリカと講和した後にヨーロッパへ進行する時にソ連經由でモスクワ奪還を支援するのだよ。」

天皇裕仁は続ける。

「ヤクーツクのスターリンと会談した時に、モスクワ大公国に同時進行するのを決定したんだよ。」

「しかし陛下、関東軍に余裕はありません。」

栗林が言った。

「分かっている。エサだよ。」

天皇裕仁は言った。

「エサですか。」

栗林が言った。

「そうだ、その変わり樺太全土とレナ川の東部全土を貰うとの条件でだ。」

天皇裕仁は続ける。

「勿論、さつきも陸相が言ったように関東軍に余裕はない。しかも鈴木商店のシミュレーションの結果、相当数の被害が出る。そこでドイツ第三帝國の首都ベルリンに原爆を投下して一気にヨーロッパに置ける、ナチスの支配を瓦解させるわけだ。」

「何と言う、壮大な計画。太平洋戦争だけでなく、第二次世界大戦も一気に終結させる計画とは。」

山本が言った。

「陛下、それでは、第八特務機動艦隊はどうなるのですか？」

豊田が聞いた。

「勿論、引き揚げだ。第二部で活躍出来るだろう。」

天皇裕仁が言った。

「了解いたしました。」

豊田が答えた。

「よし、明日の準備を始めよう。」

近衛が言った。

太平洋戦争、第二次世界大戦は急速に終結に向けて動きだした。

第43話 急激な方針転換（後書き）

色々ありますが、第一部を上手いこと終わらせて第二部に入ります。

最初は第七独立機動艦隊へ神出鬼没！！米海軍の悲劇へは書こうと思つてなかったんです。

いきなり、第

三次世界大戦を書こうとしたんですが、太平洋戦争も書いたらいいいんじゃないかな？

と考えて書き始めました。その結果見事

に詰まりました。第二部は年表まで作り完璧に仕上げたんですが、太平洋戦争は何も考えずに書き始めました。誠に申し訳ありません。しかしながら、第二部は完全に仕上げるつもりです。第二部は期待してください。すいませんでした

第44話 原爆投下

昭和18年7月26日正午

ハワイ王国からアメリカ全土に天皇裕仁の声が響き渡った。

先日の会議のあと、NHKにて降伏勧告の放送が録音されたのだ。

それをハワイ王国に空輸。

今の放送に至る。

『大日本帝國は米国との戦争をこれ以上は望まぬ。帝國としては米
国が降伏するならこれ以上の攻撃は行わない。今から6時間以内に
降伏するなら早急に講和会議を開きたい。しかしながら、6時間以
内に降伏しないならヒューストンでは悲劇に見舞われるだろう。帝國
はそれを望まない。早急に降伏される事を望む。』

ざっくばらんに言うとこれが放送の内容だ。

これが延々とアメリカ全土のラジオから流れるのだ。

ワシントンDCホワイトハウス

「何とかなんのか！……この忌まわしい放送は！……！」

トルーマンが言った。

「そう言われましても、作者が決めてますので。」

ハルが言った。

「そうだな。」

トルーマンは諦めた。

「大統領、どうしますか？」

ハルが聞いた。

「分かっているだろう、こんな放送は無視しろ……！」

トルーマンが叫んだ。

「了解いたしました。」

ハルはそう言うつと、部屋を出ていった。

6時間後

「大統領！！！！ヒューストンが消滅しました！！！！」

ハルが飛び込んできた。

「ちょっと待て、消滅！？」

トルーマンが聞いた。

「多分、原爆が投下されたかもしれませんが。」

ハルが言った。

「多分じゃないだろう！！！！消滅したんだぞ！！！！原爆に決まってるだろう！！！！」

トルーマンが怒鳴った。

「すいません！！！！」

ハルが謝った。

すると、

「大統領！！！！ラジオをお聞きください！！！！」

秘書官が飛び込んできた。

「ラジオか、」

トルーマンはそう言うと、ラジオのスイッチを入れた。

『残念ながらトルーマン大統領は降伏を受け入れなかった、その為にヒューストンには原爆により消滅した。今より更に6時間猶予を与えるから、降伏を受け入れるように。もし、降伏を受け入れなければワシントンDCに原爆が投下されるだろう。』

「ッ！……！」

トルーマンは唇を噛みしめた。

「大統領！……！議会が早急に降伏を受け入れるよう言っています。」

秘書官が電話を手にしながら言った。

「大統領、潮時かもしれません。」

ハルが言った。

「……………」

トルーマンは考える。

「大統領！！！！」

ハルが言う。

「……………分かった。降伏を受け入れよう。日本に伝えてくれ。」

トルーマンが言った。

「了解いたしました。」

ハルが言った。

ここに、太平洋戦争は終結を迎えた。

時に、1943年7月26日の事であった。

第44話 原爆投下（後書き）

次回が最終話です。
稿します。

0時まで投

最終話 日米講和成る

昭和18年8月1日

遂に、日米講和が実現した。

連合艦隊と第七独立機動艦隊はチェサピーク湾にいた。

「やっとここまで来たな。」

小沢が言った。

「そうね。私達の戦いは終わったのね。」

早紀が言った。

「嫌、お前の戦いはまだまだ続くぞ。」

小沢が笑いながら言った。

「あつ、そう言えばそうね。あの馬鹿が第二部でも登場させるって言うってたわね。」

「そう馬鹿呼ばわりするな。」

「馬鹿なもの馬鹿なの……!」

「おお、怖い怖い。」

「けど、何か嬉しい気持ちもあるけどね。」

「どう言った事だ？」

「だって2035年よ。楽しみじゃない。」

「そうか、艦魂はいいな。」

「けどそうになると、軽く70歳は越えてるわね。」

「ハハハ、おばあちゃんだな。」

「なっ！！！レディに向かってなんて失礼な。」

「おやつ？自分はレディだと思ってるのか？」

「当たり前よ。」

「これは失礼。おばあちゃん。」

「この馬鹿！！！！」

「冗談だよ、冗談。」

「冗談でも許さん！！！！」

「早紀さん！！！！落ち着いてください。」

「沙織、あんたなもの。」

「大丈夫です、私め第二部に登場しますから。私もおばあちゃんですよ。」

「沙織……………」

「早紀さん……………」

「おい、作者殿。早く講和会議を初めてくれ。」

了解いたしました。

では、

近衛首相、豊田海相、栗林陸相、金子大番頭は連合艦隊に乗り込み
チェサピーク湾に空間移動した。

そこからアメリカの用意した車に乗り、ホワイトハウスでの講和会
議に望むわけだ。

ワシントンDCホワイトハウス

日米講和会議

太平洋を挟んで激闘（？）を繰り広げた大国が遂に講和会議のテーブルに付いた。

しかし、未だにアメリカ国内では日本の恫喝によって仕方なく行っただけだという輩が多数いる。

まあ、それはあながち間違っではないが……

大日本帝國

近衛首相、豊田海相、栗林陸相、金子大番頭、山本連合艦隊司令長官。

アメリカ合衆国

トルーマン大統領、ハル國務長官、ノックス海軍長官、スチムソン陸軍長官、モーゲンソー財務長官。

日米からは以上の者が出席した。

「まずは、貴国の国民を大量に殺戮した事に謝罪いたします。」

近衛は会議の冒頭に謝罪した。

確かにこの会議が始まるまでに日本は富嶽戦略空軍でアメリカ合衆国全土に度重なる空襲を行っていた。

ニューヨーク・ボストン・シカゴ・ニューオーリンズ・サンアントニオ・サンディエゴ・ロサンゼルス・サンフランシスコ・シリコン

バレー・ポートランド・シアトル・アンカレジ・セントルイス・カンザスシティ・ナッシュビル・アトランタ・ヒューストン等は空襲により壊滅していた。

死者は100万を遥かに越え148万人となった。

さすがに首都は止めておこうとなったが、海軍省・陸軍省は爆撃した。

絨毯爆撃を行った結果だ。

近衛の謝罪にトルーマンは困った。

アメリカは日本に敗戦したのにその国の首相が謝罪したのだ。

そりゃ困るわ。

「いやいや、頭を上げてください。この会議はそれより、日本とアメリカの講和がメインなんですから。」

トルーマンが言った。

「確かにそうでした。では会議を始めましょう。」

近衛が言った。

「まずは、今回の戦争責任についてですが。」

「戦争責任ですか……」

「大統領、仕方ありません」

「まあそつだな、国務長官の言う通りだ。」

「戦争責任ですが、それはお国の決断に任せます。」

「本当ですか!？」

「勿論です、戦勝国が敗戦国を裁く権利はありません。もしそうすれば、出来レースです。」

「日本は寛大ですな」

「戦争責任は任せるとして占領統治は残念ながら行います。」

「それは仕方ないですね。大統領としてそれは受け入れます。」

「ありがとうございます。次は日米の間で経済の活性化を目指したいと思います。」

「ようは日米自由貿易の確立と言うわけですね。」

「はい、そうです。日米の資本と英国の資本で世界経済を牽引していくと言う事です。」

「英国やヨーロッパはどうなるんですか？」

「勿論、解放します。」

「どうやって?」

「ドイツ第三帝國の首都ベルリンに原爆を投下します。ドイツ第三帝國はヒトラー1人の支配下になっています。ヒトラーさえ殺せば瓦解するでしょう。その混乱している時にイギリスやノルマンディーに上陸すれば奪還は可能です。モスクワ大公国もソ連が占領しますから簡単なものです。」

「何と、原爆ですか。確かにドイツ第三帝國はヒトラー1人の支配下ですから奴さえ殺せば終わりですね。」

「そうです。」

「ありがとうございます。」

「いえいえ。」

こうして、日本とアメリカの間に講和が成立した。

講和条約の内容は

- 一・大日本帝國はアメリカ合衆国を占領統治する。
- 一・大日本帝國とアメリカ合衆国は自由貿易を確立する。
- 一・大日本帝國とアメリカ合衆国は相互防衛条約を締結する。

まあ簡単にはこれくらいだ。

その他は第二次世界大戦が終結しての東京国際平和会議で決められた。

アメリカ合衆国は大日本帝國の資本奪取に向けて、進出してくるが鈴木商店の前に夢は打ち砕かれる。

まあ、それは第二部で語るとしよう。

第二部は最初の方は1943年から2034年までの歴史を書くのでそこで。

では、第一部はこれまで。

第一部、第七独立機動艦隊へ神出鬼没！！米海軍の悲劇へ完

「後書きコーナー」

早紀

「そこへ座れ、馬鹿作者。」

作者

「はい」

亜由美

「おまえは自殺志願者か？」

作者

「いいえ！！！！滅相もない。」

喜恵

「けど、この暴挙は自殺行為ですよ。」

作者

「……………」

由香

「死ね」

綾夏
「死ね」

理華
「死ね」

望
「死ね」

愛美
「死ね」

裕香
「死ね」

志保
「死ね」

千穂
「死んでください」

由美
「死ね」

亜紀
「死ね」

美紀
「死んでみよう」

美香

「死ね」

渚

「死ね」

舞

「死ね」

乱

「死ね」

華

「1度死んでいただくと幸いです」

レナ

「死んで」

リンダ

「死ね」

ルリ

「死ね」

ルナ

「死ね」

作者

「レナ様、リンダ様、ルリ様、ルナ様最後の最後に登場ですね。」

早紀

「では、作者。覚悟は出来てるな。」

作者

「何のですか？」

早紀

「第一部を簡単に終わらせた事だ。」

作者

「……………」

早紀

「覚悟しろ。」

作者

「待って下さい。話し合えばわかります。」

早紀

「分かん……………」

作者

「分かんず屋……………」

早紀

「……………」

作者

「あ……………」

早紀

「覚悟しろ」

作者

「すいません！……！」

早紀

「皆、殺っちまえ！……！」

一同

「勿論！……！」

作者

「ぎゃ~~~~~」

沙織

「作者さんがリンチされてますのでわたしから。」

沙織

「作者さんは何故か急に第二部を書くんだって言いだして終わらせました。」

沙織

「確かに太平洋戦争編は思い付きで書いていたみたいですが、まさかここまで続くとは思ってなかったみたいです。」

沙織

「何だかんだと、私まで生み出してくださいましたし。」

沙織

「もともとは第二部が第一部だったみたいです。」

沙織

「ご心配なく、明日には第二部を投稿すると張り切っていますよ。」

沙織

「作者さんは太平洋戦争も好きですが、書くのなら現代戦が良いみたいですよ。」

沙織

「まあ、行き当たりばったりで書いていたみたいです。」

沙織

「けど、第二部は長く続けると言っています。」

沙織

「予定では100部は超すと。」

沙織

「まあ、あの作者さんですからどうなる事やら。」

沙織

「ではそろそろこれくらいで。」

沙織

「明日にはちゃんと投稿しますので。」

沙織

「今後ともよろしく願いします。」

最終話 日米講和成る（後書き）

明日、第二部を投稿いたします。

誠に勝手ながら、これを持って第一部完結とさせていただきます。

ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3128f/>

第七独立機動艦隊～神出鬼没!!米海軍の悲劇～

2010年10月11日02時01分発行